

身を盡し」の意を言ひ

 (目しくつをみ)

む

む

むいろうじ

昔は松か迎へに來た「句」家柄の過去を誇る形容。「謔語」昔昔「句」むかし(昔)を重ねて、強めていふ語。遙かの昔の出来事を語る時にいふ語。

昔昔その昔「句」前條の語を一層強めていふ語。俗語「士」段君が香「そもそ」圍碁の初「は」は、昔昔、その昔、堯玉作りて、愚かなるたんしゆに教へたまひしより、唐「は」にて初とかや「昔を今に爲す」句「次條に同じ。「賤」や賤しづのをだまき繰り返し昔を今になす由もがな」

昔を返す「句」昔の榮華なりし境遇を、再び現在に返す。諸曲并簡「更けゆや在原寺の夜の月、昔を返す衣手に、夢待ち添へて、假枕」

むかし悦し「形」むく(向く)より派生せし語にて、向はまほしき義をいふ「おむかしに同じ。「古語」蕪菁白玉の五百」つ集「を手に結びおこせむ海人」はむかしくもあるか」

むかしあふき昔扇「名」昔風の扇。昔の扇。一代女「錦坂」の目貫羽織の胸紐、昔扇の地紙又は唐獅子の根附、取集めて、錢二百ばかりが物を見せかけて」

むかしえん昔縁「名」昔よりの縁。宿縁。空穂をこゝ女の御中は、むかし縁のままなり」

むかしかたき昔形氣・昔氣質・昔堅氣「名」昔風にて、律義・頑固なる心。むかしこゝろ。

むかしがたり昔語「名」むかしはなし(昔話)に同じ。空鶴いみじき昔語をし、あはれなる行く末を契りてゐたまへる」

むかしがたりむかしがたり「名」昔語質屋庫「名」昔「昔」南朝の頃、大和國六田「の」の郷に、好む屋敷樹「の」のと呼ぶ質屋あり、その庫に閉ぢ籠められたる質物(讀書先生の見豪、友切丸、曾我の十郎衛小紋の小

稱俗説を辨じたるもの。五冊。曲草馬琴の作。文化七年出版。挿畫は藤川春亭。むかしかぶれ昔氣觸「名」昔の風習にかぶること。

むかしぐさ昔草「名」昔「昔今集」の歌に「五月」待つ山橋の香をかば昔の人の袖の香ぞするに本づきていふなべし」たちばな(橘)の異稱。「古語」蕪菁「昔草、橘。代代を経て宿は荒れゆき昔草香をなつかしき袖まつりする」

むかしこころ昔心「名」昔風の心。むかしかたき。太平記片腹いたき昔心にて「昔の小袖。一代女「空色の昔小袖に、八重菊の鹿子」紋を散し」

むかしこと昔事「名」昔ありし事柄。過去の事件。榮哉昔事を言ひ出つづつ」

むかしこゑ昔聲「名」昔の聲。養村「春もやあな驚よ昔こゑ」

むかしさま昔様「名」昔のさま。源氏「昔さまのほほも見えぬ習に」

むかしぞめ昔染「名」昔風の染模様。五人女「昔ぞめのかづき」

むかしづくり昔作昔造「名」昔風の作りさま。建築・身姿「などにいふ」長町女「昔作のつこと聲」

むかしそき昔出来「名」昔出来たること。又その物。

むかしともだち昔友達「名」昔の友だちむかしなじみ昔馴染「名」昔なじみたること。又その人。昔の親友。

むかしはなし昔話昔噺「名」自己又は親しき人などに關する、過去の話。むかしがたり。廣野越々「散る花の間は昔話かな」

むかしはなしいなづまべし昔語稻妻表紙「名」昔「昔」山東京傳の作れる讀本

屋山三郎の鞘當に取り、丹波の父打栗「の」の傳説。鹽瀨寺の縁起、浮世又平軍學者海津嘉門の事を綴り合はせたるもの。五卷。文化三年の刊行。京傳の讀本中、好評ありし「にして、芝居にも演ぜらる。ほんてろすあほだい本朝辭書提參照。

むかしび悦しび「名」むかしぶこと。むかしと思ふこと。喜ばしきこと。「古語」喜々記「喜々加之比」

むかしびと昔人「名」昔の世の人。古人。世を去りし人。亡き人。むかしへびと。故人。落窪所所の庄の券取り出へて、持て参りて、怪しう侍れども、むかし人の言ひおき侍りしかばなんとて奉りたまへば」

むかしふ悦しふ「動四自」むかししく思ふ。喜ばしく思ふ。うむかしむ。

むかしふう昔風「名」昔のすがた。當世風ならぬこと。むかしやう。古風。

むかしらふみ昔文「名」ふるき文。ふるき書物。古文書。夫本はては又しみのすみかの昔ぶみはらへば塵と見るぞ悲しき」

むかしへ昔邊「名」過去の頃。むかし。いにしへ。古代。古今むかしへや今も戀しきほととぎすふるさとにしも鳴きて來つらん」

むかしへびと昔人「名」むかしびと(昔人)に同じ。土佐ここにむかしへ人の母、ひと日片時も忘れねば、詠める」

むかしぼん昔本「名」昔出版したる本。むかしめく昔めく「動四自」むかしふ(昔ぶ)に同じ。芭蕉萬の葉は昔めきたる紅葉かな」

合六句四撮一秒に相當す。天正十四年に至り、これを廢して、新制の枱を用ひ、これを京料といふ。「に同じ」

むかしもの昔者「名」むかしびと(昔人)むかしもの昔物「名」昔、作りたる物。古風なる物。

むかしものがたり昔物語「名」むかしはなし(昔話)に同じ。落窪年頃は、對面なく、遙かになりてもゆくも、あはれに思ふたまへつるを、昔物語などする程に」

むかしものやう昔模様「名」昔、流行したる模様。古風なる模様。俳諧新體「富永」一家皆昔模様や節小袖」

むかしやう昔様「名」むかしやう(昔風)に同じ。源氏御調度ども、いと古代になれたるが、昔やうにてうはしきを」

むかしよき昔文・飛蓬「名」昔「昔」菊科に屬する多年生の草。蓬原(名)に自生し、高さ一尺餘に達す。葉は柳のに似て、粗糲あり。花は中央に、黄色の筒狀花、周圍に白色の舌狀花集まれる頭狀花序をなして開く。やなぎよき。よき。

むかしわたり昔渡「名」こたたり(古渡)に同じ。胸算馬「帶」ても昔渡の本橋子」

むかしをさ昔男「名」人「伊勢物語」に、各條の冒頭に「昔男ありけり」と書けるもの多く、男とは業平を指したるものなるよりいふ「あはれはなりひら(在原業平)の異稱。まめを」と。五人女「清十郎とて、自然と生れつきて、昔男をうつし繪にもまさり、そのさまうはしく」

むかつ「貌」急にむかつく感じ。むかつ腹の立つ感じ。むかつ參照。

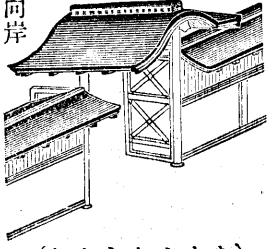
むかつかす「動下四他」吐氣を催さしむ。胸をわくる。和合人「胸むかつかせ、つかへし、げつ、げつと大騒」

むかつき「名」むかつくこと。

むかひつ「他四自」むかひむかと吐氣を催す。伊呂波子類「噓ムカツク」

をふむろれるりらよゆやめめんむみまほへふひはのねぬになとてつちたそせすしきこけくきかおえ

むかふがみ 向髪「名」まへがみ(前髪)に
むかふからもん 向唐門「名」(建)唐門
の一種。前
後に唐破
風(破)あり
て、本柱控
柱(控)合
はせて、四
本あるも
の。むかひ
からもん。
むかふきし 向岸



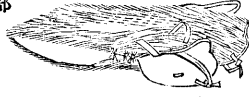
(んもらかふかむ)

むかづば

むかてこはん 蜈蚣小判百足小判「名」
「蜈蚣の手」を見よ。昆沙門(昆)天を祀
れる寺にて、金匱にて、小判の形のもの
を造り、参詣者に授與するもの。蜈蚣は昆
沙門天の使はしめて、蜈蚣は、足多き蟲
なるより、福德を掻き取る等の意に取れ
るなるべし。〔條に同じ〕
むかてな 蜈蚣菜・百足菜「名」(植)次
むかてのり 蜈蚣海苔・百足海苔「名」
〔植〕紅色藻類に屬する海藻。本州・四國・

屬する節足動物。石垣の間、樹の根など
に棲息し、體は扁平にして、數十の環節
より成り、長さ五六寸に達し、黄赤色もし
くは赤褐色を呈し、脚は二十對を有し、
その先端、鉤状をなす。第一脚は頸脚に
變じ、基部相合して、鉤状をなし、その尖
頭に毒腺を開き、これに刺さるれば、疼痛
甚し。頭上に、數箇の單眼と一對の複眼と
を有し、動物質を捕食する。はがち。和名、蜈
蚣。一名、百足、無加天。目紋所の一。
前項の蟲に象り、その體を捲曲して、やや
渦巻状をなせるさまを描く。子持蜈蚣。
蜈蚣の丸などの種類あり。
蜈蚣死して倒れず「句」百足(蜈蚣)
の蟲は死して倒れず「句」に同じ。〔諺語〕
蜈蚣の手「句」數多き臂。〔諺語〕
時々御無心は、蜈蚣の手ほど申せども
又この度も俵十兩賜へ。〔文〕
むかてい 蜈蚣石・百足石「名」(礦)う
みゆりせきといはん(海百合石灰岩)に同じ。
むかてぐさ 蜈蚣草・百足草「名」(植)こ
あをねかつら(青根草)に同じ。〔やぶぞつ
(藪薺)に同じ。〕
むかてこはん 蜈蚣小判百足小判「名」
「蜈蚣の手」を見よ。昆沙門(昆)天を祀
れる寺にて、金匱にて、小判の形のもの
を造り、参詣者に授與するもの。蜈蚣は昆
沙門天の使はしめて、蜈蚣は、足多き蟲
なるより、福德を掻き取る等の意に取れ
るなるべし。〔條に同じ〕

むかへき 向腰「名」むかふすね(向腰)に
同じ。拾遺の川のむかへき過ぎて深
からば渡らてたに歸るばかりぞ。
むかへき 行腰「名」向(向)穿(穿)の義。
昔、毛皮にて作り、狩獵の時、馬上にも、徒
歩にも、又、旅行などの時、足に穿ちて、蒔
轡・雨露を防ぐに用ひしもの。鷹狩
等に用ひしものは、僅かに
膝の上に達する程のものな
りしが、後世、専ら馬上用と
なりてより、長く足首に懸
る程なるを常とするに至れ
り。毛皮は、多く鹿の夏毛
を實用し、又、秋二毛(二毛)の
をも用ひ、黒く染め、星の部



(きばかむ)

むかてふね 蜈蚣船百足船「名」兩側に
多數の楫を取り附けたる船なるべし。
常山紅藍川口に、蜈蚣船、晩ごとに漕ぎ(漕)
てをさせてけり。
むかてもち 蜈蚣持百足持「名」一本の
材木などを、多人數、兩側に並びて持ち運
ぶこと。其角冠公卿わたまし祝ひ奉
りて、初雁や臺場は晴れて蜈蚣持。
むかてやま 蜈蚣山「名」(地)この山に
大なる蜈蚣の棲みしを、田原藤太秀郷の
退治したりといふ俗説によりていふ。
みかみま(三上山)に同じ。
むかへき 向腰「名」上部の前胸。ぬかば。
むかふさ 平家大將の源九郎に組みた
まへ。九郎はせいの小き男の、色の白か
んなるが、むかふさの少しし出して、特
に
するかんなるぞ。
むかへき 向腰「名」むかふすね(向腰)に
同じ。拾遺の川のむかへき過ぎて深
からば渡らてたに歸るばかりぞ。
むかへき 行腰「名」向(向)穿(穿)の義。
昔、毛皮にて作り、狩獵の時、馬上にも、徒
歩にも、又、旅行などの時、足に穿ちて、蒔
轡・雨露を防ぐに用ひしもの。鷹狩
等に用ひしものは、僅かに
膝の上に達する程のものな
りしが、後世、専ら馬上用と
なりてより、長く足首に懸
る程なるを常とするに至れ
り。毛皮は、多く鹿の夏毛
を實用し、又、秋二毛(二毛)の
をも用ひ、黒く染め、星の部

むかふす 向伏す「動四自」雲、向の方
に、遠く低く横たはる。雲、大地の果に垂
れさがる。〔祝詞〕新年祭「青雲(雲)の鶴
(鶴)く極(極)」、白雲の陸奥(雲)向伏す限
(限)」「青雲白雲のたなびく國の青雲の
向伏す國の天雲(雲)の下なる人は」
むかふすね 向腰、向腰「名」腰の前面。
むかへき。〔狂言義太夫〕太郎冠者が向腰。
むかふさ 向反「名」相撲(相撲)の手の
一。雙方立ち上りて、四手(四手)に組み、此
方より押しゆくを、相手の踏みこらへて、

むかづば

むかへき 向腰「名」むかふすね(向腰)に
同じ。拾遺の川のむかへき過ぎて深
からば渡らてたに歸るばかりぞ。
むかへき 行腰「名」向(向)穿(穿)の義。
昔、毛皮にて作り、狩獵の時、馬上にも、徒
歩にも、又、旅行などの時、足に穿ちて、蒔
轡・雨露を防ぐに用ひしもの。鷹狩
等に用ひしものは、僅かに
膝の上に達する程のものな
りしが、後世、専ら馬上用と
なりてより、長く足首に懸
る程なるを常とするに至れ
り。毛皮は、多く鹿の夏毛
を實用し、又、秋二毛(二毛)の
をも用ひ、黒く染め、星の部

むかへき 向腰「名」むかふすね(向腰)に
同じ。拾遺の川のむかへき過ぎて深
からば渡らてたに歸るばかりぞ。
むかへき 行腰「名」向(向)穿(穿)の義。
昔、毛皮にて作り、狩獵の時、馬上にも、徒
歩にも、又、旅行などの時、足に穿ちて、蒔
轡・雨露を防ぐに用ひしもの。鷹狩
等に用ひしものは、僅かに
膝の上に達する程のものな
りしが、後世、専ら馬上用と
なりてより、長く足首に懸
る程なるを常とするに至れ
り。毛皮は、多く鹿の夏毛
を實用し、又、秋二毛(二毛)の
をも用ひ、黒く染め、星の部

むかへき 向腰「名」むかふすね(向腰)に
同じ。拾遺の川のむかへき過ぎて深
からば渡らてたに歸るばかりぞ。
むかへき 行腰「名」向(向)穿(穿)の義。
昔、毛皮にて作り、狩獵の時、馬上にも、徒
歩にも、又、旅行などの時、足に穿ちて、蒔
轡・雨露を防ぐに用ひしもの。鷹狩
等に用ひしものは、僅かに
膝の上に達する程のものな
りしが、後世、専ら馬上用と
なりてより、長く足首に懸
る程なるを常とするに至れ
り。毛皮は、多く鹿の夏毛
を實用し、又、秋二毛(二毛)の
をも用ひ、黒く染め、星の部

むかづば

むかへき 向腰「名」むかふすね(向腰)に
同じ。拾遺の川のむかへき過ぎて深
からば渡らてたに歸るばかりぞ。
むかへき 行腰「名」向(向)穿(穿)の義。
昔、毛皮にて作り、狩獵の時、馬上にも、徒
歩にも、又、旅行などの時、足に穿ちて、蒔
轡・雨露を防ぐに用ひしもの。鷹狩
等に用ひしものは、僅かに
膝の上に達する程のものな
りしが、後世、専ら馬上用と
なりてより、長く足首に懸
る程なるを常とするに至れ
り。毛皮は、多く鹿の夏毛
を實用し、又、秋二毛(二毛)の
をも用ひ、黒く染め、星の部

むかへき 向腰「名」むかふすね(向腰)に
同じ。拾遺の川のむかへき過ぎて深
からば渡らてたに歸るばかりぞ。
むかへき 行腰「名」向(向)穿(穿)の義。
昔、毛皮にて作り、狩獵の時、馬上にも、徒
歩にも、又、旅行などの時、足に穿ちて、蒔
轡・雨露を防ぐに用ひしもの。鷹狩
等に用ひしものは、僅かに
膝の上に達する程のものな
りしが、後世、専ら馬上用と
なりてより、長く足首に懸
る程なるを常とするに至れ
り。毛皮は、多く鹿の夏毛
を實用し、又、秋二毛(二毛)の
をも用ひ、黒く染め、星の部

むかへき 向腰「名」むかふすね(向腰)に
同じ。拾遺の川のむかへき過ぎて深
からば渡らてたに歸るばかりぞ。
むかへき 行腰「名」向(向)穿(穿)の義。
昔、毛皮にて作り、狩獵の時、馬上にも、徒
歩にも、又、旅行などの時、足に穿ちて、蒔
轡・雨露を防ぐに用ひしもの。鷹狩
等に用ひしものは、僅かに
膝の上に達する程のものな
りしが、後世、専ら馬上用と
なりてより、長く足首に懸
る程なるを常とするに至れ
り。毛皮は、多く鹿の夏毛
を實用し、又、秋二毛(二毛)の
をも用ひ、黒く染め、星の部

むかづば

むかへき 向腰「名」むかふすね(向腰)に
同じ。拾遺の川のむかへき過ぎて深
からば渡らてたに歸るばかりぞ。
むかへき 行腰「名」向(向)穿(穿)の義。
昔、毛皮にて作り、狩獵の時、馬上にも、徒
歩にも、又、旅行などの時、足に穿ちて、蒔
轡・雨露を防ぐに用ひしもの。鷹狩
等に用ひしものは、僅かに
膝の上に達する程のものな
りしが、後世、専ら馬上用と
なりてより、長く足首に懸
る程なるを常とするに至れ
り。毛皮は、多く鹿の夏毛
を實用し、又、秋二毛(二毛)の
をも用ひ、黒く染め、星の部

むかへき 向腰「名」むかふすね(向腰)に
同じ。拾遺の川のむかへき過ぎて深
からば渡らてたに歸るばかりぞ。
むかへき 行腰「名」向(向)穿(穿)の義。
昔、毛皮にて作り、狩獵の時、馬上にも、徒
歩にも、又、旅行などの時、足に穿ちて、蒔
轡・雨露を防ぐに用ひしもの。鷹狩
等に用ひしものは、僅かに
膝の上に達する程のものな
りしが、後世、専ら馬上用と
なりてより、長く足首に懸
る程なるを常とするに至れ
り。毛皮は、多く鹿の夏毛
を實用し、又、秋二毛(二毛)の
をも用ひ、黒く染め、星の部

むかへくさむ 迎車「名」人を迎へて乗せ歸るために、轆きゆく人力車。むかひぐるま。

むかへけ 迎氣「名」吐氣(き)を催すこと。むかへこう 迎講「名」阿彌陀如來の來迎の儀に擬へて行ふ法會。平安朝の中期以後漸く盛んに行はれ、鎌倉時代にありて、ますます盛んなるに至れり。むかひこう。今貴始(きき)丹後國迎講「聖人往生給語」古事類聚は、恵心僧都始めたまふ事なり。三寸の小佛を脇足の上に立て、脇足の足に緒を附けて、引寄せ引寄せして涕泣したまひけり。

むかへこそて 迎小袖「名」昔婚禮の當夜婿より嫁の實家又は迎(き)の使者に贈りし「重(おも)き」の小袖。襟と襟とを合はせて、縁にて綴ち附けて、裏に積むを法とし、酒肴を添へなす。迎の使者「參照」。

むかへさけ 迎酒「名」二日酔(ふ)の氣を發散せしむるために、更に飲む酒。むかひさけ。よびさけ。

むかへそなへ 迎備「名」敵を迎へ撃つために、布く陣。

むかへちやうちん 迎提燈「名」夜間、人を迎へて連れ歸るために、點火して携へゆく提燈。有罪(あり)其(その)郡(ぐん)屋(や)へ通る御迎提燈だ。

むかへつけ 迎付「名」茶の湯にて、茶室の用意整ひ、來客も揃ひたる時、その客を、席上に迎ふこと。むかひつけ。

むかへさる 迎取る「動四他」人を迎へて、自己の家に居らしむ。迎ふ。運兵(い)い。

むかひちん 向陣「名」敵の陣と向ひ合ひて取る陣。太平記小城なれば、何程の事かあるべきと、……向陣をも取らず、攻支度をも用意せず。「(向造)に同じ」。

むかひづくり 向造「名」「建」むかひづくりむかひつけ 迎付「名」むかへつけ(迎付)の轉訛。

むかひづち 向槌「名」あひづち(相槌)むかひづぶて 向礫「名」礫を投げあひて、勝負を争ふ小兒の遊。平家公卿殿上

なにかことづけて、我も、むかひ火作りてあるべきを。」敵陣の篠火と向ひ合ひて、此方の陣にも焚く火。盛衰記「平家は、生田(の)の森に陣を取りて、向火を合はす」むかひび 迎火「名」むかへび迎火の轉訛。「迎火」五人女燈籠かすかに、棚經せはしく、むかひ火に麻幹(の)の影消えて、向火を附く「句」むかひび(向火)をなす。運兵(い)うしろめたき心なりけりと、むかひ火附くれば」

むかひびと 迎人「名」むかへびと(迎人)の

むかへは 迎湯「名」生れたる兒に、産湯(うぶゆ)をばはしむる時の相手。空襲御むかへへ 迎へる「動四自」迎酒を飲む「(俗語) 登壇(とうだん)宿醉(しやくすい)で……ちつとばかり迎(むか)へるがよい」

むかへへんせん 迎温泉「名」湯治した次の年、又、湯治すること。

むかひむか 迎 吐氣(き)を催す感じ。さし當りて、怒を發する感じ。會(あ)脇が燃えかへり、胸の蟲がむかむかと」

むかかん 無絨「名」封緘せぬこと。無封。むかかんく 無感覺「名」感覺の無きこと。感じを失ひてあること。

むかかんが 無考「名」考をめぐらさぬこと。思慮の無きこと。

むかかんじやう 無汗症「名」(醫)「難 An-droids」汗の分泌の中止すること。熱の上の時、高熱持續の時、その他、消化管又は腎臓より、多量の水分を失ふ時に起る。

むかかんちやう 無勘定「名」事を爲す前に、費用の勘定をせぬこと。

むかかんはいたつ 無絨配達「名」電報の指定事項の一。電報を、無絨にて、受信人に配達すべきこと。略符號として、和文にはナン、歐文にはNOを用ふ。

むかかんはいたつてんばう 無絨配達電報「名」無絨配達の方法に依る電報。

むかかも 向股「名」『左右向ひ合へるに

むかふ向「名」正面に當りて相對する方。前方。むかひ。俳諧新選移竹「川留の向へ越しぬほととぎす」あひて。先方。後の時。今後。未來。四むかふさじき 向棧敷に同じ。むかふつけ(向附)の略。本舞臺の向にあるよりいふ。はなみち花道に同じ。八笑人この鳴物にて、向より、……、何れも町人の拵、螢籠・大團扇などを持ち、出て來り」向指す「句」向を指すを見よ。向三軒・兩隣「句」向三軒兩

むき無機「名」(佛)唯識論の卷五に「於三不善損益義中、不可記別、故名三無記」、俱舍論の卷二に「無記者、不可記爲善不善性、故名三無記、有說、不能記、異熟異、故名三無記、三性」一。非善非惡の中間性。さんじやう(三性)の目的への努力を助けも妨げもせざるもの、即ち善にも惡にも非ずして、全然道德の範圍の外にあるもの。

むき無期「名」(英 Inorganization)生活力を有せざること。(有機に對して)むき無期「名」期限の無きこと。無期限。む。有期に對して)むき麥「名」(植)大麥小麥ライ麥オト麥等の總稱。主としては、大麥と小麥とをいふ。各條を見よ。和名麥、牟岐。今案、大麥小麥の總名也。五穀之長也」麥搗「(歌)むきうた(麥歌)に同じ。假名手本忠臣蔵麥搗つ歌に、おやち出て唄や、麥(こ)ん連れてと唄ふを聞き」麥押す木「(句)むきおし(麥押)に同じ。和名杆麵杖、牟岐於須紀」麥の秋「(句)はくしう(麥秋)の直譯。むきあき。夫不、御園生に麥の秋風そよめきて山ほととぎす忍び鳴くなり」俳諧新選徒中「巡禮を戻れば丁度麥の秋」

むかふ向「名」正面に當りて相對する方。前方。むかひ。俳諧新選移竹「川留の向へ越しぬほととぎす」あひて。先方。後の時。今後。未來。四むかふさじき 向棧敷に同じ。むかふつけ(向附)の略。本舞臺の向にあるよりいふ。はなみち花道に同じ。八笑人この鳴物にて、向より、……、何れも町人の拵、螢籠・大團扇などを持ち、出て來り」向指す「句」向を指すを見よ。向三軒・兩隣「句」向三軒兩

むき無機「名」(佛)唯識論の卷五に「於三不善損益義中、不可記別、故名三無記」、俱舍論の卷二に「無記者、不可記爲善不善性、故名三無記、有說、不能記、異熟異、故名三無記、三性」一。非善非惡の中間性。さんじやう(三性)の目的への努力を助けも妨げもせざるもの、即ち善にも惡にも非ずして、全然道德の範圍の外にあるもの。

むき無期「名」(英 Inorganization)生活力を有せざること。(有機に對して)むき無期「名」期限の無きこと。無期限。む。有期に對して)むき麥「名」(植)大麥小麥ライ麥オト麥等の總稱。主としては、大麥と小麥とをいふ。各條を見よ。和名麥、牟岐。今案、大麥小麥の總名也。五穀之長也」麥搗「(歌)むきうた(麥歌)に同じ。假名手本忠臣蔵麥搗つ歌に、おやち出て唄や、麥(こ)ん連れてと唄ふを聞き」麥押す木「(句)むきおし(麥押)に同じ。和名杆麵杖、牟岐於須紀」麥の秋「(句)はくしう(麥秋)の直譯。むきあき。夫不、御園生に麥の秋風そよめきて山ほととぎす忍び鳴くなり」俳諧新選徒中「巡禮を戻れば丁度麥の秋」

むかふ向「名」正面に當りて相對する方。前方。むかひ。俳諧新選移竹「川留の向へ越しぬほととぎす」あひて。先方。後の時。今後。未來。四むかふさじき 向棧敷に同じ。むかふつけ(向附)の略。本舞臺の向にあるよりいふ。はなみち花道に同じ。八笑人この鳴物にて、向より、……、何れも町人の拵、螢籠・大團扇などを持ち、出て來り」向指す「句」向を指すを見よ。向三軒・兩隣「句」向三軒兩

むき無機「名」(佛)唯識論の卷五に「於三不善損益義中、不可記別、故名三無記」、俱舍論の卷二に「無記者、不可記爲善不善性、故名三無記、有說、不能記、異熟異、故名三無記、三性」一。非善非惡の中間性。さんじやう(三性)の目的への努力を助けも妨げもせざるもの、即ち善にも惡にも非ずして、全然道德の範圍の外にあるもの。

むき無期「名」(英 Inorganization)生活力を有せざること。(有機に對して)むき無期「名」期限の無きこと。無期限。む。有期に對して)むき麥「名」(植)大麥小麥ライ麥オト麥等の總稱。主としては、大麥と小麥とをいふ。各條を見よ。和名麥、牟岐。今案、大麥小麥の總名也。五穀之長也」麥搗「(歌)むきうた(麥歌)に同じ。假名手本忠臣蔵麥搗つ歌に、おやち出て唄や、麥(こ)ん連れてと唄ふを聞き」麥押す木「(句)むきおし(麥押)に同じ。和名杆麵杖、牟岐於須紀」麥の秋「(句)はくしう(麥秋)の直譯。むきあき。夫不、御園生に麥の秋風そよめきて山ほととぎす忍び鳴くなり」俳諧新選徒中「巡禮を戻れば丁度麥の秋」

麥の秋風【句】麥の熟する頃に吹く風。林葉「刈生」は麥の秋風吹き立ちぬはやうちとけぬ山ほととぎす」

麥の音【句】刈り取りたる麥の穂を穀竿【句】にて打つ音。華村「竹や村百軒の麥の音」

麥の黒子【句】「句」麥の黒穂。麥奴和名「麥奴、牟岐乃久呂美」

麥の粉【句】「句」麥粉に同じ。和名「麵、无岐乃古、麥粉也」

麥の出穂【句】火を降らせ【句】麥の出穂の季節には、日照の多き程、みのりよし。【諺語】

麥の目はじき【句】「麥の黒子」に同じ。備後「小忌衣、以山藍、摺之、無三山藍、時、用麥目波志木」

麥は作【句】に似る【句】「麥のみのりよき時」は、米も亦よくみのる。【諺語】

麥三日【句】米二十日【句】「句」麥飯は厭きやすきものなる形容。【諺語】

麥を打つ【句】刈り取りたる麥の穂を、穀竿【句】にて打つ。廣野「重五」麥打つや内外も無き志賀の里」

むぎ 武儀【名】「地」美濃國の十五郡の一。郡役所を上有知【句】町に置く。

むぎあき 麥秋【名】「麥の秋」に同じ。俳諧新選「大麥」麥秋にまづ豊かなる年嬉し」

むぎあど 麥跡【名】麥を刈り取りたる跡。炭俵「六」麥跡の田植や遅き登どき」

むぎあひ 向合【名】むかひあひ（向合）に同じ。【合ふ】に同じ。

むぎあふ 向合ふ【動四自】むかひあふ向むぎいひ 麥飯【名】むぎめし（麥飯）に同じ。著聞「麥いひに鯛あはせて煮て」

むぎいりこ 麥炒粉【名】むぎめし（麥焦）を云ふ。【加賀國の方言】

むぎうた 麥歌【名】むぎうたたる（麥）の歌。俳諧新選「移竹」麥歌や誰と明してねぶた聲」

むぎうち 麥打【名】刈り取りたる麥の穂を、穀竿【句】にて打つこと。太監「麥打や歌も連」なる姉妹」

むぎうちたい 麥打臺【名】四角なる木の框【句】に、割竹の棧を、堅に並べて、四本の足を取り付け、刈り取りたる麥の穂を打ち付けて、その實を落すに用ふる具。即ち四五五月頃の鵜。

むぎうらうら 麥漆【名】小麥の粉を交へたる生漆【句】。

むぎおし 麥押【名】めんぼう（麵棒）に同じ。無機界【名】無機物の汎稱。【有機界に對して】

むぎからうち 麥麵【名】大麥又は裸麥にて製したる麵。味噌の製造に用ふ。【米麵に對して】

むぎかくていこうさい 無期確定公債【名】「經」償還の時期の不定なる確定公債。永久公債。永遠公債。【有期確定公債に對して】

むぎかす 麥滓【名】ふすま（麸）に同じ。和名「麸、无岐加須」

むぎかた 撿頭【名】小麥の粉を材料として、頭を撿りたる形にせし餅なりといふ。【古語】和名「撿頭、无木太」

むぎかへる 向返る【動四自】うしろの方へ向きなほる。

むぎがみ 武儀紙【名】「美濃國の中、武儀郡がその本場なるよりいふ」みのがみ（美濃紙）に同じ。

むぎから 麥幹・麥稈【名】むぎわら（麥藁）に同じ。和名「稈、牟岐加良」續猿蓑文鳥

むぎからぐさ 麥幹草【名】「植」みのごめ（養米）に同じ。【むつせれぐさ（六折草）に同じ。】

むぎかり 麥刈【名】麥を刈り取ること。むぎかりせみ 麥刈蟬【名】「動」麥を刈り取る頃に、始めて鳴くよりいふ。なつせみ（夏蟬）に同じ。

むぎきり 麥切【名】大麥の粉にて、切麥の如く製し、短く切りたる食品。

むぎきん 無期禁鋼【名】「法」きん（禁鋼）及びむぎきんけい（無期自由刑）を見よ。【有期禁鋼に對して】

むぎくわがく 無機化學【名】「化」『英 Inorganic chemistry』無機物につきて研究する化學。【有機化學に對して】西曆一八二八年、獨逸の化學者ベエレル（J. E. Berzelius）氏、無機物を以て、有機物なる炭素との區別は、無意味なるに至りたれども、炭素を含める化合物の多數なるにより、研究の便宜上、なほ、化學に、この二部門の對立を認む。

むぎくわがふぶ 無機化合物【名】「化」『英 Inorganic compounds』炭素化合物以外の、すべての化合物（但し、金屬の炭化物は、無機化合物とす）。天然に産するすべての礦物。熱する時、決して炭化することなし。【有機化合物に對して】

むぎくわお 麥慈姑【名】「植」あまな山慈姑に同じ。

むぎけい 無期刑【名】「法」むぎきんけい（無期自由刑）の略。【有期刑に對して】

むぎけん 無期限【名】期限の定まりてあらぬこと。

むぎ 麥粉【名】大麥・小麥ライ麥などの粉。【むぎこ（小麥粉）に同じ。】

むぎ 石灰八合合麥粉「料」むぎいりこ（麥炒粉）に同じ。『聖賢』麥粉を食ふとて、頻にむせばれるを」

むぎこうさい 無期公債【名】「經」さいえんこうさい（永遠公債）に同じ。

むぎこがし 麥焦【名】大麥を炒り焦し、石白にて碾きて粉としたるもの。砂糖を和して食し、又、湯に煉りても食し、又、麥落雁などの原料に用ふ。麥のはたい。むぎいりこ。むぎこ。こがし。

むぎこき 麥扱【名】鐵にて齒を作り、形、大なる櫛の如くにて、刈り取りたる麥の穂を引き掛けしこきて、その實を落すに用ふる具。

むぎこく 麥石【名】なつこく（夏石）に同じ。

むぎこん 無氣根【名】氣根の無きこと。根氣の缺くること。

むぎこんもん 無氣根者【名】無氣根なる人。川中島合戰、寒くて合戦成りがたくなば、釜（下）ひいて、誰ぞ替れ。ええ、無氣根者の」

むぎさけ 麥酒【名】麥の實にて醸したるべしといふ。【古語】麥酒ただけうち

むぎさす 麥さす【名】麥の青穂【句】なはきて、むぎさすばかり」

むぎさん 無機酸【名】「化」『英 Inorganic acids』無機化合物たる酸。例へば、硝酸・硫酸・鹽酸・亞硫酸・炭酸・亞砒酸など。その酸素を含めるをオキシ酸といひ、また、酸性の強弱によりて、強酸と弱酸とを分つ。礦酸。【有機酸に對して】無機酸、有機酸の區別は實は適當ならず、只便宜上使用するのみ。むぎくわがふぶ（無機化合物）参照。

むぎじりけい 無期自由刑【名】「法」終身の自由刑、即ち舊刑法の無期徒刑・無期刑、新刑法の無期懲罰・無期禁鋼。無期刑【有期自由刑に對して】

むぎじつ 無機質【名】（無機物なる物質）に同じ。【有機質に對して】

むぎじんよう 無期信用【名】「經」信用の一。その期間の永久的なるもの。【有期信用に對して】

むぎす 疵物【名】疵の無きこと、又その物。疵物【句】ならぬこと。五人女「珊瑚珠は、一匁五分から百三十目までの無疵の玉千二百三十五」罪を犯しなどせしことなきこと。又、女ならば、男と關係せしことなきこと。純潔。潔白。

むぎすくひ 麥炒【名】麥素【句】を煮る時、それをすくひ上ぐるに用ふる筈、あげざる。和名「辨色立成云、策簾、無岐須久比、麥素煮簾也。以竹編爲之」

むぎすふなにしうけん 無疵船荷證券【名】「商」『英 Clean bill of lading』貨物の、善良なる狀態に船積せられたる證として、荷主の請求ありたる時、船長又は船主の代人より交付する船荷證券。

むぎ

むぎうち

むぎきん

むぎこん

むぎ

むぎぜみ 麥蟬【名】(動)むぎかりぜみ(麥刈蟬)に同じ。
むぎせんめい ぼけんじようけん 無記船名保險證券【名】(商)せんめいぼけんじようけん(船名保險證券)に同じ。
むぎそく 麥續飯【名】(名)麥飯にて作れるそく。
むぎた 麥田【名】(名)麥を作りてある田。
むぎたけ 麥葦・麥葦【名】(名)「植」ひらたけむぎだじ 剝出【名】むきだすこと、又、その状態。露骨。
むぎだじ じやう 剝出狀【名】(名)次條に同じ。
むぎだじ じやう 剝出狀【名】(名)はだかみ裸身に同じ。
むぎだす 剝出す【動】(動)隠さず出す。少しも被ふ所無。露出す。
むぎだん 麥團子【名】(名)小麥粉を材料として製したる團子。
むぎぢや 麥茶【名】(名)むぎゆ(麥湯)に同じ。
むぎぢやうえき 無期懲役【名】(名)「法」終身の懲役刑。無期自由刑の一。(有期懲役に對して)
むぎつき 麥搗【名】(名)麥を搗くこと。
むぎつきうた 麥搗歌・麥搗唄【名】(名)麥を搗く時などにうたふ唄。むぎうた。
むぎとけい 無期徒刑【名】(名)「法」終身の徒刑。無期自由刑の一。(有期徒刑に對して)「舊刑法の語」。「をかけたる食品」。
むぎとろ 麥醬漬【名】(名)麥飯にとろろ汁むぎな 向名【名】(名)古、上臈女房を、東向、北向、南向、北向など分ちて呼びし敬稱。北向、南向を、南向、西向より上位なるものとしたり。
むぎなき 麥糠【名】(名)むぎかり(麥刈)に同じ。
むぎなて じ 麥撫子【名】(名)「植」ばらもんじんに同じ。

むぎな

むぎなは 麥素・麥繩【名】(名)「さへい」(索餅)に同じ。和名索餅、无岐奈波。日饅餡又は冷麥(饅)をいふなるべし。今夏夏の頃、麥繩多く出来たるを、客人をも多く集まりて喰ひける。
むぎなふ 麥素・麥繩【名】(名)前條の轉。字鏡撰麥餅、麥奈不。
むぎなほ 向直る【動】(動)全身を動かして、他の方面へ向く。
むぎめか 麥穢【名】(名)ふすま(敷)に同じ。續撰(麥)を「麥穢に餅屋の見世のわかれかな」。
むぎねんきん 無期年金【名】(名)「英」Unlimited annuity 支給の年數に一定の制限なき年金(有期年金に對して)。
むぎはたけ 麥畑【名】(名)次條に同じ。
むぎはたけ 麥畑【名】(名)麥を作りてある畑。むぎばた。
むぎひより 麥日和【名】(名)麥を植まつけ、又は刈り入るるによき日和。芭蕉「秋や須磨須磨や秋和の麥日和」。
むぎひれう 無機肥料【名】(名)「英」Inorganic manure 無機物即ち礦物より成る肥料。例へば、硫酸石灰、硫酸苦土、過磷酸石灰、硫酸アンモニア、鹽化アンモニア、鹽化加里、硫酸加里、炭酸加里、木灰、炭酸石灰、苛性石灰、智利硝石など。礦物肥料。(有機肥料に對して)。「(有給に對して)」。
むぎふ 無給【名】(名)給料を與へぬこと。
むぎふ 麥宿【名】(名)麥の莖にて作り、宿の如く吹き鳴らすもの。むぎわらぶえ。夫木「うなむがすきに鳴らす麥宿の聲に驚く夏のひるぶし」。
むぎぶつ 無機物【名】(名)「英」inorganic substance 生活體の組成成分ならざる物。例へば、金、水、空氣の如き是れなり(有機物に對して)。
むぎふにん 無給人【名】(名)無給なる人。無むきふにん 無給吏員【名】(名)俸給を受けぬ、自治體の吏員。(有給吏員に對して)。
むぎへん 麥偏【名】(名)漢字の偏の一。題「被」(敷)などの左方にある麥の字。麥總(被)。

むぎは

むぎは 麥穗【名】(名)麥の穗。農儀(利口)「柿寺に麥穗いやしや作取」。
むぎほかる 麥穗刈萱【名】(名)「植」をかむるや、刈萱に同じ。
むぎほこり 麥埃【名】(名)麥打をなす時に立ちのぼるほこり。俳諧「新選麥里」(蠅の立つや静まる麥ほこり)。
むぎまき 麥時・麥播【名】(名)「麥」の種を蒔くこと。舊撰「麥時や百まで生きたる類ばかり」。「動」鳴禽類に屬する小鳥。形、鵲(鵲)に類し、雄は上、面灰黒色、肩白く、肩に白點あり、尾羽の根元も白く、下面は、喉の邊橙赤色を呈し、腹の方に至るに従ひて白くなる。雌は、上面橙褐色を呈し、白色の部分、雄と同一なり。我國山地に産す。こつばめ。
むぎまき きたら 麥時帷子【名】(名)「田植布子」(帷子)に麥時帷子を見よ。
むぎまんぢう 麥饅頭【名】(名)皮を小麥粉にて製したる饅頭。
むぎみ 剝身【名】(名)蛤(か)の淺刺(さ)などの貝類の肉(こ)を、貝殻より取り出したるもの。
むぎみじり 剝身絞【名】(名)「多くの淺刺の剝身を、器に盛れる形に似たるよりいふとぞ」白地に、かすかに藍色のある絞。藝毛(ぎ)の剝身絞に、對(む)の浴衣。染。藝毛(ぎ)の剝身絞に、對(む)の浴衣。
むぎみそ 麥味噌【名】(名)普通の味噌の米麴の代りに、麥麴を用ひたるもの。普通、赤色を呈す。
むぎみや 剝身屋【名】(名)剝身を賣る家。又むぎむき 向向【名】(名)むき(向)の複數。萬葉「這ふ篇の己がむきむき天雲の別れし行けば」。
むぎみん 無菌【名】(名)微菌を含みてあらぬむきめい 無記名【名】(名)氏名を記さぬこと。「法」むきめいしき(無記名式)の略。(記名に對して)。
むきめい いらがき 無記名裏書【名】(名)「商」むきめいしき(無記名式裏書)に同じ。
むきめい かはせてかた 無記名爲替手形【名】(名)「商」むきめいしき(無記名式爲替手形)に同じ。

むきめい

むきめいかぶ 無記名株【名】(名)「商」むきめいかぶしき(無記名株式)の略。(記名株に對して)。
むきめいかぶけん 無記名株券【名】(名)「商」無記名式によりて發行したる株券、即ち株主の氏名又は商號を記入せぬもの。無記名式株券。(記名式株券に對して)。
むきめいかぶしき 無記名株式【名】(名)「商」無記名株式によりて表はしたる株式。無記名株。(記名株式に對して)。
むきめいけん 無記名券【名】(名)「商」無記名式に依りて發行せる證券。(記名券に對して)。
むきめいこうさい 無記名公債【名】(名)「商」無記名公債證券にて表はしたる公債。又、その公債證券。無記名式公債。(記名公債に對して)。
むきめいこうさいじようけん 無記名公債證券【名】(名)「商」次條に同じ。(記名公債證券に對して)。
むきめいこうさいじようけん 無記名公債證券【名】(名)「商」無記名式に依りて發行したる公債證券、即ちその債權者の氏名を記入せぬもの。無記名公債證券。(記名公債證券に對して)。
むきめいこうさいじようけん 無記名公債證券【名】(名)「商」むきめいしき(無記名式小切手)に同じ。
むきめいこうさい 無記名國債【名】(名)「商」無記名公債證券にて表はしたる國債。又、その公債證券。(記名國債に對して)。
むきめいこうさいけん 無記名債權【名】(名)「法」無記名證券にて表はしたる債權、即ち債權證券に債權者の何人たることを記入せず、證券の所有者をその債權者とするもの。(記名債權指圖)。(債權に對して)。
むきめいこうさいけん 無記名債券【名】(名)「法」無記名式に依りて發行したる債券。(記名債券に對して)。
むきめいこうさい 無記名式【名】(名)證券又は投票などの書式の一。その權利者の氏名又は商號などを記入せぬもの。(證券の場合には、記名式指圖)式に對して、又、ををわ れるりら よゆや もめんむまま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせずしき こけくきか おえういあ

投票などの場合には、記名式に對して

「無記名式裏書」

「無記名式裏書」の「無記名式」に由るもの。即ち誰彼を問はず、所持人又は持参人に支拂ふべき旨を約束するもの。従つて、この方式にて譲り受けた時は、裏書に由らず、唯引渡によりて譲渡することを得。無記名裏書。白地(裏書)普通裏書(指圖)式裏書記名式裏書に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式裏書」に對して

「無記名式」によりて發行したる證券(記名證券指圖)證券に對して

「無記名證券」

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

「無記名證券」に對して

る蛇。運ぶ色葉集「于思、ムクヒゲ・ムサイ」
むくひつじ 老羊「名」「動」めんやう綿
羊に同じ。

むくふ 報ふ酬ふ「動四他」むくゆ(報ゆ)
に同じ。著墨日食「すこしきにして
飢多忍びがたきは、餓鬼の悲に報ふなり」
眞傳「朕、深く公の恩を報はんと思ふ」
むくみ 浮腫「名」むくむこと、又、むくみ
である状態。

むくむ 浮腫む「動四自」「むくむくと
義」水腫(水)などのために、身體腫(こ
れ)ふくらむ。

むくむく「貌」むくむを重ねていへる語。
廣き面積に互りて肥えふくらみであるさ
ま。圓みを帯びて高まるさま。むくり。
むくり。著墨「毛、むくむくと生ひたる
細き腕(うで)」狂言「鹽屋」茶は、……湯七
分に沐八分、むくむく、やはやは、ほらほ
らと」
むくむく「貌」身體の、重重しく動くさま。む
くめく(蠢く)參照。

むくむく「貌」物言ひたげに、又は、商無
き人の物を喰むとて、口を動かすさま。も
ぐもぐ。もぐもぐ。浮世風「口をむぐむ
ぐしながら」

むくむく「形」むくむくしに同じ。源氏
「この人を空しく死なしてん事のいみじ
くおぼさるるに添へて、大かたのむくむ
くしき、譬へん方なし」更科「聞くに、い
とむくむくしくをかし」

むくめく 蠢く「動四自」むくむくと動
く。うぐめく。聖齋「ムクメクムシノ
ゴトクニシテ」空齋「義蟲のやうにてや、
むくめきまわらん」

むくもつ 填つ「動四自」うごもつ(填つ)
むくゆ 報ゆ酬ゆ「動上二自」「むく(向く)
より出でたる語」受けたる恩又は怨に對
して、仕向く。返報す。報復す。むくふ。

むぐら 鼯鼠・土龍「名」「動」むぐらもち(鼯
鼠)の略。

鼯鼠に岩「句」「鼯鼠の土中の進路を
遮るよりいふ」進退の妨となる譬。
「謠語」

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むぐら 律「名」「植」金律(オウゴン)八重葎(ハ
ハハ)

むげんのかね 無間鐘(名) 昔、遠江國小夜中山(おののけ)の久永寺(本尊は觀音)にありきといふ鐘。これを撞く者は、死しては、無間地獄に墮つれども、現世にては、巨萬の財寶を得ると、撞き鳴らす者多かりしより、住僧人をして罪を作らしむるに忍びずとて、廢棄せりと傳ふ。東海遺名所記その寺に無間の鐘あり。二月の初午の日、開帳ありといふ。藤西毛傳(聞く、無間の鐘は、その寺に名のみ残りて今はなしと)

むげんのかね だうじやうじ 無間鐘道成寺(名)もちどりむすめだうじやうじ(百千鳥娘道成寺)を見よ。

むげんりう 無限流(名) 劍道の流派の一。反町(おの)無格(安部攝津守の臣、三浦源左衛門の門人)を祖とするもの。

むげんりよくかいじやく 無權力解釋(法)むげんかいじやく(無權解釋)に同じ。(有權力解釋に對して)

むげんりよくわんじやく 無限維管束(名)【植】『獨Ofones Gestisfundel』形成層を具へて、細胞の分裂増殖によりて、靱皮・木質兩部を増生する機能を有し、年を加ふるに隨ひ、生長し、肥大する維管束。雙子葉植物及び裸子植物の有するものこれなり。(有限維管束に對して)

むご 智婿婿(名) 娘の夫。半子。和名「智、无古」

むご 無辜(名) ぶご不辜に同じ。

むご 武庫(名) 地 攝津國の七郡の一。郡役所を西宮(に)町に置く。【むごのみなど武庫水門】を見よ。

むご 慘酷(形) 「むごし」の語幹。感動句に用ふ。天神記、むごや、つらや、情(分)なや

むご 無期(名) 期限の無きこと。際限なきこと。久しく續くこと。世にいかによ、事成りぬやなどいへば、まだむごなどいらへて「源氏」今朝も、むごに御心ちため

むごいり 智入・婿入・婿入(名) 結婚後、夫が、始めて、その妻の生家に行くこと、又、その儀式。狂言料理智入には、このほか辭意作法があつて、むづかしいものぢやと申す。【入夫が結婚すること、又、その儀式。續猿蓑(由)袴著ぬ智入もあり年の暮】「きこと」

むごう 無功(名) 功なきこと。功勞なき湖。(有口湖に對して)

むごうち 智打(名) 昔の風習にて、新婿の智を祝ひて打ちしこと。水祝(みづ)などの類。

むごうてうちゆう 無鈎條蟲(名) (動) 頭に四個の吸盤あるのみにて、鈎を有せぬ條蟲。世界中、牛肉を食する地方には、必ず多少發見せらる。(有鈎條蟲、裂頭條蟲に對して)

むごえらび 智選婿選婿(名) 智を選ぶこと。太監口切や心ひそかに智えらび

むごかしづき 智傳婿傳婿(名) 智を大切に取扱いふこと。源氏「おどろおどろしきまで智かしづきたまふべき」

むごがね 智がね婿がね婿がね(名) 【がねは接尾語】智となるべく豫め定まれる人。伊勢「この智がねに詠みておこせたりける」

むごがは 武庫川(名) 地 攝津國の殆ど中部を南流する川。丹波國多紀郡古市村より發する田松川と、攝津國有馬郡小野村より發する香野川との、有馬郡貴志村にて相合せ、三田(み)町を經、途中、數流を合はせ、名稱も、三田川(又は東瀬川・生野(な)川・生瀬(な)川等、順次に變り)武庫郡に入りて、武庫川となり、鳴尾(な)村に至りて、東西の兩派に分れて、大阪灣に入る。幹川の流程十八里半餘。夫木「むご川に跡もとどめぬかほよ鳥鳴く日も見えぬさみだれの頃」

むごき 五加(名) 植 五加(五加)に同じ

むごがら、その由を告ぐる所なきこと、又その人。「無告の民」

むごく 無極(名) この上なきこと。至運多葉集、無極、ムゴク

むごこ 智子・婿子・婿子(名) 智たる子。狂言水論智「身どもは智ぢや。智子といふて、子同然の者」

むごこ 智事・婿事・婿事(名) 縁ぐみ結婚。【古語】智婿、ムゴコト

むごさん 武庫山(名) 地 攝津國の西南部、武庫有馬の二郡に跨れる、この國第一の高山。海拔三〇五九尺。山中に洞候所あり。山間より御影川流出し、北麓に有馬温泉湧出。一名、六甲(ろ)山、樸葉(は)山、御影(み)山。むごやま

むごし 無腰(名) まる(丸)腰に同じ。

むごし 慘し 酷し(形) 情(け)を知らず。無慈悲なり。むごらし。むごたら。若風魚「言うて甲斐なき恨、むごい仕形(け)」

むごし 無故實(名) よりどころを失ふこと。たよりなくて困ること。猿蓑合戦物語「極めて無故實なる體(て)にて、彼方此方に立廻りけるを」

むごしやうへん 武庫將軍(名) 兵庫頭(兵庫令)の唐名。武庫府。拾芥抄「兵庫頭、武庫令、武庫將軍」

むごしゆじ 武庫主事(名) 兵庫屬(兵庫令)の唐名。武庫府。拾芥抄「兵庫頭、武庫主事、武庫府」

むごし 武庫署(名) ひやうごら(兵庫寮)の唐。唐原抄「兵庫寮、唐名武庫署」

むごじよう 武庫丞(名) 兵庫丞(兵庫丞)の唐名。拾芥抄「兵庫頭、武庫丞、武庫少令」

むごせうれい 武庫少令(名) むごあんぐわ(武庫員外郎)に同じ。

むごたらし 慘たらし 酷たらし(形) むごら(慘)に同じ。

むごらし 無骨(名) 骨の無きこと。おごつ(無骨)に同じ。

むごつけなし(形) むごちなしに同じ。御

むごつたら 無骨鱈(名) 鹽漬の鱈を乾燥し、鱈と皮とを除去し、肉を適宜の大きさに切り、箱詰としたもの。

むごつたらし 慘つたらし 酷つたらし(形) むごら(慘)の骨便。御膳中條はむごつたらし(骨便)を立て

むごとり 智取・婿取・婿取(名) 娘のために智を定め迎ふること。空島只今婿とりしむすべき家附のやうにて

むごとり 智すめ 智取娘・婿取娘・婿取娘(名) 智を迎ふべき家附の娘。

むごのうみ 武庫海(名) 地 攝津國武庫郡の南方にある海、古稱、武庫川より和田岬にかけての部分はいふなるべし。萬葉武庫の海にはよくあらしきりす海士(の)釣舟波の上ゆめし

むごのうら 武庫浦(名) 地 前條に同じ。萬葉、武庫の浦の入江の渚島(の)羽ぐくもる君をはなれて戀に死ぬべし

むごのみなど 武庫水門・務古水門(名) 地 攝津國兵庫(の)港の古稱。但し、その地點は、今の港の西北方の山手、築島(の)の地在る所なりしなるべしといふ。泊舟(の)泊と稱し、後、又大輪田の北に築島せるもの、近代の兵庫港なり。瀬戸内海に在り、且つ風波の虞少く、大船の寄港に便なるより、上古より、その名著れしなり。

むごはな 智花(名) 嫁の美しさに、智に榮(さ)ありて見ゆること。異本會義「さも智花にいつくしかりし姿も、今は、いつしか黒み寒れ」

むごひきて 智引出・婿引出・婿引出(名) 次條に同じ。生玉心出「おきは親になりかはり、智引出に取らする」

むごひきて 智引出物(名) 婚姻の時、舅より新郎への引出物。むごひきて。御伽草子「文正草子」この人々、かねてより智引出物取りたまふとて笑ひたまふ

むごふ 武庫府(名) むごしゆじ(武庫主事)に同じ

をえわ ろれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしき こけくきか おえう

に同じ。拾芥抄「兵庫頭……屬、武庫主事、武庫府」

むごぼし 娚星 娚星 娚星「名」ひごぼし(彦星)に同じ。(娚星に對して)「娚星」星に於て娚星の星の花

むごみやうせき 娚星跡 娚星跡 娚星跡「名」娚星に家督を相續せしむること

むごむらゐ 無去無來「名」佛「三世」の間の去來を「無」することなき義「不生」(不滅)に同じ。娚星不生不滅の佛すらなほ娚星離苦、無去無來を離れたまはず

むごん 夢魂「名」夢を見てゐる間のたなしこと

むごん 無根「名」事實の無きこと。ねなしこと

むごん 無痕「名」痕跡の残らぬこと

むごん 無言「名」物を言はぬこと。むげん。佛「次條の略。方式殊更に無言をせざれども、ひとり居れば、口業つてを修めつべし」

無言の行「名」佛「むごんぎやう(無言行)に同じ。新後撰「無言の行はべりける頃、郭公を聞きて」

むごん 無言戒「名」佛「次條に同じ。娚星抄」市に出て、無言戒、娚星の眞似し

むごん 無言戒「名」佛「言語を發せぬ戒行」佛「無言戒」無言

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ。源氏「心にのみこめて、無言太子とか、法師ばらの悲しき事にする」

むごん 無言童子「名」人「天竺波羅奈」國の太子にて、諸天の誠を受けて、生れて、十三年の間、無言なりきといふ。無言太子。無言菩薩

むごん 無言童子「名」人「天竺波羅奈」國の太子にて、諸天の誠を受けて、生れて、十三年の間、無言なりきといふ。無言太子。無言菩薩

むごん 無言童子「名」人「天竺波羅奈」國の太子にて、諸天の誠を受けて、生れて、十三年の間、無言なりきといふ。無言太子。無言菩薩

むごん 無言童子「名」人「天竺波羅奈」國の太子にて、諸天の誠を受けて、生れて、十三年の間、無言なりきといふ。無言太子。無言菩薩

むごん 無言童子「名」人「天竺波羅奈」國の太子にて、諸天の誠を受けて、生れて、十三年の間、無言なりきといふ。無言太子。無言菩薩

むごん 無言童子「名」人「天竺波羅奈」國の太子にて、諸天の誠を受けて、生れて、十三年の間、無言なりきといふ。無言太子。無言菩薩

むごん 無言童子「名」人「天竺波羅奈」國の太子にて、諸天の誠を受けて、生れて、十三年の間、無言なりきといふ。無言太子。無言菩薩

むごん 無言童子「名」人「天竺波羅奈」國の太子にて、諸天の誠を受けて、生れて、十三年の間、無言なりきといふ。無言太子。無言菩薩

むごん 無言童子「名」人「天竺波羅奈」國の太子にて、諸天の誠を受けて、生れて、十三年の間、無言なりきといふ。無言太子。無言菩薩

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むごん 無言童子「名」人「むごん」(無言童子)に同じ

むさうさ

むさうさ 無造作【名】造作【サ】なきこと。手輕、簡易。

むさうさんまい 無相三昧【名】「佛」三昧の一、むさうだもん(無相解脫門)に同じ。

むさうじたて 夢想仕立無雙仕立【名】羽織の表と裏とを、同じ布帛にて仕立つること。

むさうじんぢかい 無相心地戒【名】「佛」だじようかい(大乘戒)を見よ。

むさうじゆう 無相宗【名】「佛」般若所説の諸法皆空を宗とするによりて、他宗より呼びていふ。さんろんじゆう(三論宗)に同じ。(有相宗)に對して。

むさうじよ 無想處【名】「佛」むさうてん(無想天)に同じ。

むさうだんす 夢想簞笥無雙簞笥【名】全體ただ一種の木材のみにて作りたる簞笥。

むさうぢやう 無想定【名】「佛」外道の、無想天の果を得んとて修【シ】する、一切の心想を滅する禪定【サ】。無想。

むさうてん 無想天【名】「佛」梵【サ】天【名】の譯語。三界諸天の中、色界【サ】の第四禪天の第四。この天に生る者は、一期【サ】(五百大劫)の間、一切の心想起らず。一類の外道【サ】は、これを眞の涅槃【サ】界なりと誤想す。無想界。無想處。無想。

むさうどめ 夢想留無雙留【名】つきつ

むさうばおり 夢想羽織無雙羽織【名】夢想仕立の羽織。

むさうひきだし 夢想引出無雙抽出【名】前後兩方へ、拔差【サ】の出来るやうに造りたる引出。

むさうびやうち 夢つてものがたり 夢想兵衛胡蝶物語【名】「書」武藏國神奈川なる浦島坂の邊に住める夢想兵衛といふ者、夢に浦島子より授けられし釣竿を骨として、紙鳶を造り、釣の絲を附け、絲の元を松樹に結び、自身、紙鳶の背にしがみつきに、紙鳶、空中に飛揚して、少年國・

むさう

色慾國強欲國・貪婪國・貪言郷・煩悩郷・哀傷郷・歡樂郷などを巡遊し、目覺むれば、その身は、本牧【サ】の沖に、漁舟を泛べて、眠り居りし筋に作り、世態・人情上の批評をも加へし讀本【サ】。遊芥子の「和莊兵衛」に倣へるもの。前編は文化六年の出版にて、五卷、後編は、同七年の出版にて、四卷。曲亭馬琴の作。

むさうふで 夢想筆無雙筆【名】使用の時のみ繰の出づるやうに造りたる筆。

むさうまへら 夢想枕・夢雙枕【名】いれこま(入子枕)に同じ。

むさうまど 無想窓無雙窓【名】夢想櫺子を取り附けたる窓。

むさうもち 夢想餅【名】一種の餅菓子。ト養狂歌集「その頃、世に、大阪焼のむさう餅といふ菓子やけりけり」。

むさうらひ 形【名】かはやうなり。む

ごし。不憫なり。「肥前國長崎邊の方言」博多小女郎浪浪【サ】は長崎國説【サ】。……むさうらひげにそがいにせても、大事なかつたん」。

むさうりう 夢想流【名】■小具足【サ】の流派の一。■昔、御所の女房の間に

行はれし、髪を結びて、形は片外【サ】に似、笄を抜けば、變じて、下髪となるやうにせしもの。さげしち。

むさうれん 夢想櫺子無雙櫺子【名】

間間に隙を設けたる櫺子に重ねて、同じく間間に隙を設けたる引戸を設け、その引戸を一方に引けば、兩者の各扉、すべて一致し、他方に動かして閉れば、兩者の隙、互違【サ】になりて、櫺子の全部が、一面の板張の如く見ゆるもの。

むさえ 無才【名】才【サ】無きこと。才智の無きこと。「古語」空邊【サ】えある者はしづめ、無才のをこは、先に立つ」大鏡「みそか事は無才にぞおはしまししかど」。

むさく 無作【名】ぶこつ(無骨)に同じ。太子集「花吹かぬ梅の木立は無作かな」。

むさくさ 貌【名】むしやくやに同じ。若風俗「むさくさとしたお髭、障【サ】となりて」。

むさくさ 貌【名】むさくさ者【名】秩序なくみだりがはしき人。亂暴なる人。

むさくる 形【名】次條に同じ。

むさくる 形【名】二 いかにもむさし。きたたらし。むさくるし。

むさげだつもん 無作解脫門【名】「佛」むくわんだつもん(無願解脫門)に同じ。

むさき 鼯鼠【名】「動」次條に同じ。土御門集、曉の烟も深き山のべにをり知り

がほのむさきさの聲」。

むさき 鼯鼠【名】「動」啮齧類に屬する哺乳動物。體は、長さ一尺前後、形、栗鼠【サ】に似、尾は、ふさふさとして長く、左右兩側に於て、前後兩肢の間に、皮膚たる

毛の皮膜と

なり、これを、四肢と共に開張して、體軀を空中に支へて、樹より樹に飛ぶ習性あり。毛色も栗鼠のに似、下面は淡白色を呈し、特に額を横ぎりて、頸部に達する白色部あり。深山の樹洞に棲み、夜出でて、果實を食ふ。さためす。ばんどり

をかつき。もみ。もむが(鼯鼠)参照。和名「鼯鼠、毛美。俗云、無佐佐比」。

むさび 鼯鼠色【名】赤みを帶びたる紫色【サ】。

むさび 六指八道【名】■盤上に、數個の線を劃し、六箇の石を、線上を辿り、一畫づつ進退して、勝負を争ふ遊戲。用ふ駒の數によりて、六(六)六指十六(六)六指などの種類あり。又、八道行成【サ】といふもあり。下集、八道、ムサン」。

むさび 六指十六(六)六指を云ふ。「中國の方言」■小兒の、地上に、大路・小路の形を畫き、錢を投げて、勝負を争ふ戲。じぶろく。やこちぢ。ろくたうち。ろくだうろく。

むさ

むさく 無作【名】ぶこつ(無骨)に同じ。太子集「花吹かぬ梅の木立は無作かな」。

むさくさ 貌【名】むしやくやに同じ。若風俗「むさくさとしたお髭、障【サ】となりて」。

むさくさ 貌【名】むさくさ者【名】秩序なくみだりがはしき人。亂暴なる人。

むさくる 形【名】次條に同じ。

むさくる 形【名】二 いかにもむさし。きたたらし。むさくるし。

むさげだつもん 無作解脫門【名】「佛」むくわんだつもん(無願解脫門)に同じ。

むさき 鼯鼠【名】「動」次條に同じ。土御門集、曉の烟も深き山のべにをり知り

がほのむさきさの聲」。

むさき 鼯鼠【名】「動」啮齧類に屬する哺乳動物。體は、長さ一尺前後、形、栗鼠【サ】に似、尾は、ふさふさとして長く、左右兩側に於て、前後兩肢の間に、皮膚たる

毛の皮膜と

なり、これを、四肢と共に開張して、體軀を空中に支へて、樹より樹に飛ぶ習性あり。毛色も栗鼠のに似、下面は淡白色を呈し、特に額を横ぎりて、頸部に達する白色部あり。深山の樹洞に棲み、夜出でて、果實を食ふ。さためす。ばんどり

をかつき。もみ。もむが(鼯鼠)参照。和名「鼯鼠、毛美。俗云、無佐佐比」。

むさび 鼯鼠色【名】赤みを帶びたる紫色【サ】。

むさび 六指八道【名】■盤上に、數個の線を劃し、六箇の石を、線上を辿り、一畫づつ進退して、勝負を争ふ遊戲。用ふ駒の數によりて、六(六)六指十六(六)六指などの種類あり。又、八道行成【サ】といふもあり。下集、八道、ムサン」。

むさび 六指十六(六)六指を云ふ。「中國の方言」■小兒の、地上に、大路・小路の形を畫き、錢を投げて、勝負を争ふ戲。じぶろく。やこちぢ。ろくたうち。ろくだうろく。

むさ

むさく 無作【名】ぶこつ(無骨)に同じ。太子集「花吹かぬ梅の木立は無作かな」。

むさくさ 貌【名】むしやくやに同じ。若風俗「むさくさとしたお髭、障【サ】となりて」。

むさくさ 貌【名】むさくさ者【名】秩序なくみだりがはしき人。亂暴なる人。

むさくる 形【名】次條に同じ。

むさくる 形【名】二 いかにもむさし。きたたらし。むさくるし。

むさげだつもん 無作解脫門【名】「佛」むくわんだつもん(無願解脫門)に同じ。

むさき 鼯鼠【名】「動」次條に同じ。土御門集、曉の烟も深き山のべにをり知り

がほのむさきさの聲」。

むさき 鼯鼠【名】「動」啮齧類に屬する哺乳動物。體は、長さ一尺前後、形、栗鼠【サ】に似、尾は、ふさふさとして長く、左右兩側に於て、前後兩肢の間に、皮膚たる

毛の皮膜と

なり、これを、四肢と共に開張して、體軀を空中に支へて、樹より樹に飛ぶ習性あり。毛色も栗鼠のに似、下面は淡白色を呈し、特に額を横ぎりて、頸部に達する白色部あり。深山の樹洞に棲み、夜出でて、果實を食ふ。さためす。ばんどり

をかつき。もみ。もむが(鼯鼠)参照。和名「鼯鼠、毛美。俗云、無佐佐比」。

むさび 鼯鼠色【名】赤みを帶びたる紫色【サ】。

むさび 六指八道【名】■盤上に、數個の線を劃し、六箇の石を、線上を辿り、一畫づつ進退して、勝負を争ふ遊戲。用ふ駒の數によりて、六(六)六指十六(六)六指などの種類あり。又、八道行成【サ】といふもあり。下集、八道、ムサン」。

むさび 六指十六(六)六指を云ふ。「中國の方言」■小兒の、地上に、大路・小路の形を畫き、錢を投げて、勝負を争ふ戲。じぶろく。やこちぢ。ろくたうち。ろくだうろく。

むさく 無作【名】ぶこつ(無骨)に同じ。太子集「花吹かぬ梅の木立は無作かな」。

むさくさ 貌【名】むしやくやに同じ。若風俗「むさくさとしたお髭、障【サ】となりて」。

むさくさ 貌【名】むさくさ者【名】秩序なくみだりがはしき人。亂暴なる人。

むさくる 形【名】次條に同じ。

むさくる 形【名】二 いかにもむさし。きたたらし。むさくるし。

むさげだつもん 無作解脫門【名】「佛」むくわんだつもん(無願解脫門)に同じ。

むさき 鼯鼠【名】「動」次條に同じ。土御門集、曉の烟も深き山のべにをり知り

がほのむさきさの聲」。

むさき 鼯鼠【名】「動」啮齧類に屬する哺乳動物。體は、長さ一尺前後、形、栗鼠【サ】に似、尾は、ふさふさとして長く、左右兩側に於て、前後兩肢の間に、皮膚たる

毛の皮膜と

なり、これを、四肢と共に開張して、體軀を空中に支へて、樹より樹に飛ぶ習性あり。毛色も栗鼠のに似、下面は淡白色を呈し、特に額を横ぎりて、頸部に達する白色部あり。深山の樹洞に棲み、夜出でて、果實を食ふ。さためす。ばんどり

をかつき。もみ。もむが(鼯鼠)参照。和名「鼯鼠、毛美。俗云、無佐佐比」。

むさび 鼯鼠色【名】赤みを帶びたる紫色【サ】。

むさび 六指八道【名】■盤上に、數個の線を劃し、六箇の石を、線上を辿り、一畫づつ進退して、勝負を争ふ遊戲。用ふ駒の數によりて、六(六)六指十六(六)六指などの種類あり。又、八道行成【サ】といふもあり。下集、八道、ムサン」。

むさび 六指十六(六)六指を云ふ。「中國の方言」■小兒の、地上に、大路・小路の形を畫き、錢を投げて、勝負を争ふ戲。じぶろく。やこちぢ。ろくたうち。ろくだうろく。

むさく 無作【名】ぶこつ(無骨)に同じ。太子集「花吹かぬ梅の木立は無作かな」。

むさくさ 貌【名】むしやくやに同じ。若風俗「むさくさとしたお髭、障【サ】となりて」。

むさくさ 貌【名】むさくさ者【名】秩序なくみだりがはしき人。亂暴なる人。

むさくる 形【名】次條に同じ。

星(シホ)科に属する多年生の草。地下の球莖より、二小葉の掌状複葉二枚を出す。花には、大きな佛焰苞ありて、その上部の卷曲せる大きな、やや燈の如く、表面は暗黄色、裏面は帯紫色を呈す。我國、陰濕な山間の地に自生す。しばきり。「由跋」

「書」端書に、樂翁房といへる者、京都の北野の神社にて、東に赴く小間物屋に語り聞かせし由を記し、次條に引ける伊勢物語の歌の語を取りて、斯様の事は、問はぬもつらし、問ふもうるさし、武藏燈、かけても人に語るなと記せり。江戸の明暦の大火の状況を記せるもの。二卷。淺井了意の著。

むさしあふみ 武藏燈(枕) 燈は、馬の左右の腹に懸くるものなるより、かけて(懸けて)に掛けていふ。一説に、上古の木製の燈は、鉸具(ヒンジ)を力革の端に附けたるより、さすがといふ物無かりしに、武藏燈は、後世の燈と同様に、その端にさすが(ひちよ金)を作り附ける製作法なりしが、さすが(流石)に付けていへり。伊勢「むさし燈」すがに懸けて頼むには訪はぬもつらし訪ふもうるさし。

むさしいちばん 武藏一分判金 [名] 慶長一分金と武藏判小判金とを標準として造りしよりいふ。徳川幕府の通貨の一。正徳四年、慶長の古制に復せしむる目的にて、武藏小判金と共に發行し、元文元年まで通用せし一分判金、縦六分餘、横三分五厘餘。品位は、慶長一分判金に同じ。正徳一分判金。

むさしおがす 武藏耕武藏飛白(名) 武藏國の村山の邊より多く產出する耕、初の名は、村山耕なりしが、明治維新後、所澤の市場にて賣買するに至りて、所澤耕と呼ばれ、後、今の名に變れり。箴(シ)一羽に經(シ)絲一本を通して、織るを特色とし、故に、又一本耕の名あり。

むさしこばん 武藏小判(名) 次條の略。むさしこばん 武藏小判金(名) 慶長小判金と武藏判小判金とを標準として造りしよりいふ。徳川幕府の通貨の一。正徳四年、慶長の古制に復せしむる

目的にて、武藏一分判金と共に發行し、元文元年まで通用せし小判金。縦は二寸二分餘、横は二寸三分餘、品位は慶長小判金に同じ。正徳小判金。七割に同じ。

むさしちたう 武藏七黨(名) 武藏のむさしすまばんとばんさん 武藏判小判金(名) 徳川家康が、文祿四年、江戸にて發行せし小判金。縦は二寸なる、二寸五分なるとの二種あり。横は一、二寸五分、厚は二、三厘あり。横は一寸二分五厘を表はせり。ぶんろくこばん 次の花押を表はせり。ぶんろくこばん 宮本武藏の彫りたる錢。地銀(シ)鋼の如くに堅く、掘目深くして、浪又は雲などを彫り、透(シ)ありて、雅致あり。

むさしの 武藏野(名) 關東平野の一部。範圍半の平野の舊稱。關東平野の西は秩父(シ)多摩の諸嶺、北は利根(シ)川までの間なるが如し。或はまた狭く取りて、府中の邊より川越邊までの地域を指す者もあり。南北朝より戰國時代にかけては、概ね千文の場となり、ただ川越・江戸等の諸城下の發達を見たのみなりしが、徳川氏下の江戸開府以來、漸次開發に向へり。伊勢「昔、男ありけり。人の娘を盗みて、武藏野へゐてゆく程に、……武藏野はけふはな焼き若草のつまもこれり我もこもれり」といふ。地、武藏坂といふ處あるにより「ふ」と。されど、前項の伊勢物語の歌、もとは、古今集に見えて、初句「春日野」とあるを變へたるものなるより、後人の言ひ出せるなるべし。かすがの(春日野)の異稱といふ。武藏野は廣大なるより「飲み盡されず」に、野見盡されずの意を含めていふ。大なる盃。武藏野といふ大盃(シ)は無いといふ。四元歌年間より明治二十年頃まで、京都の繩手通四條河原(シ)下の所でありし精進料理屋。曲亭馬琴、その口上を書き、その裔武田氏、今は、同地に旅宿業を營む。

むさしはう 武藏坊(名) 人(人) べんけい(辨慶)の坊號。

むさしはうべんけい 武藏坊辨慶(名) [名] 二「人」熊野別當湛増(名) 辨正の子。初名鬼若丸。叡山の西塔に住し、武藏坊と號す。源義經に従ひて職あり。

むさしばん 武藏判(名) 武藏一分判金と武藏小判金との併稱。武藏判小判金と慶長江戸座小判金との併稱。

むさしばんこ 武藏萬古(名) えざばんこ(江戸萬古)に同じ。

むさしひら 武藏平(名) 武藏國八王子市より產出する枋地。

むさしや 武藏屋(名) 江戸向島(シ)の牛島にありし料理屋。天明六年、四方赤良(シ)・朱樂菅江(シ)談州樓馬場等の、始めて落語の會を開きし處。まると、武藏屋、春花秋月客來頻、葛西(シ)太郎今何在、一碗濃茶風味新。

むさしりう 武藏流(名) 官本武藏を流祖とするよりいふ。二刀流(二刀流)に同じ。

むさしをんせん 武藏温泉(名) 地(地)筑前國筑紫郡二日市町大字武藏字湯町にある温泉。鐵道九州線二日市停車場の南方十町。福岡縣下第一の温泉にして、武藏川の河底より湧出するを取りて、浴舎に引く。古は次田(シ)の湯と呼び、菅公、太宰府謫居中、屢ば來り浴せりと云ふ。

むさすみ 武佐墨(名) 昔、近江國蒲生(シ)郡武佐驛より製出せし墨。

むさす 武佐寺(名) 近江國蒲生(シ)郡にある長光寺の舊稱。鹿戸皇子の開基。武川(シ)綱の建立と傳へ、天台宗に屬す。その地、東山道の要路に當り、古來、往還の人の立ち寄りし記事多く、又、その觀音は、難產の時、祈りて効ありとて、子安觀音の稱あり。盛衰記「抑も、長光寺といふは、武作寺の事なり」。

むさ(シ) 副(シ) わけもなく。無造作(シ)に。むやみに。むさむさと。狂言武藏「家久しい者をば、むさと討つて捨てた事ぢや」。

東海道名所馬菜・冷水、むざとしたる食物を横むべし。

むざね 實・正身(名) 身實(シ)の轉か。まことの身。正しき身。正體(シ)。さうじみ。「古語」記「正身、ムザネ」同「實、ムザネ」。

むざばん 武佐判(名) 次條の略。武佐判江戶にて、鐵張った枋を、かけ判といふ。鐵張らざるを、武佐判といふ。近江の武佐判とは、八合枋なり。

むざばんす 武佐判枋・武佐判升(名) 武ざばん(武佐判)に同じ。

むざぶる 食ふ・動る(動四他) むざぼる(食ふ)の轉。字彙集「劬、ムザブル」一。代男「よろづ不自由なれば、思はぬ慾も出て來て、人をむざぶるて」。

むざべつ 無差別(名) 差別なきこと。差別を立てぬこと。平等。むしやべつ。

むざべつてつぐ 無差別哲學(名) 「哲學といつてつぐ(同一哲學)に同じ」。

むざぼり 食(名) むざぼること。食餐(シ)。鳥餐、アヂハヒムサボリ」源氏「夕の露のかかる程のむざぼりよ」。

むざぼりつく 武者振付く(動四自) むしやぶつく(武者振付く)の訛。生玉心中「小辨にむざぼり付き」。

むざぼる 食ふ(動四自) ぼるは欲(シ)の義。むざは「まざまざ」との「まざ」の轉か。慾深く望む。よくぼる。源氏朝の露に異ならぬ世を、何をむざぼる身の祈にか」。

むざす 武佐併・武佐升(名) 近江國の領主佐佐木義實が、天文十三年、同國蒲生(シ)郡武佐驛にて造りたる一升枋。方四寸六分五厘、深さ二寸三分九厘八毛、容積五十一立方寸八分六厘餘、八合入にて、燒印なし。石田三成、佐和山占領の時、も使用したり。石田併。燒印なき枋。一説に、鐵を張りてあらぬ枋なりと。むざばんす。むざばん。

むざ(シ) 副(シ) 次條に同じ。天の鶴島(隱し)包んで、むざむざ殺す、その罪もおそろしく」。

むざね 實・正身(名) 身實(シ)の轉か。まことの身。正しき身。正體(シ)。さうじみ。「古語」記「正身、ムザネ」同「實、ムザネ」。

むざばん 武佐判(名) 次條の略。武佐判江戶にて、鐵張った枋を、かけ判といふ。鐵張らざるを、武佐判といふ。近江の武佐判とは、八合枋なり。

むざばんす 武佐判枋・武佐判升(名) 武ざばん(武佐判)に同じ。

むざぶる 食ふ・動る(動四他) むざぼる(食ふ)の轉。字彙集「劬、ムザブル」一。代男「よろづ不自由なれば、思はぬ慾も出て來て、人をむざぶるて」。

むざべつ 無差別(名) 差別なきこと。差別を立てぬこと。平等。むしやべつ。

むざべつてつぐ 無差別哲學(名) 「哲學といつてつぐ(同一哲學)に同じ」。

むざぼり 食(名) むざぼること。食餐(シ)。鳥餐、アヂハヒムサボリ」源氏「夕の露のかかる程のむざぼりよ」。

むざぼりつく 武者振付く(動四自) むしやぶつく(武者振付く)の訛。生玉心中「小辨にむざぼり付き」。

むざぼる 食ふ(動四自) ぼるは欲(シ)の義。むざは「まざまざ」との「まざ」の轉か。慾深く望む。よくぼる。源氏朝の露に異ならぬ世を、何をむざぼる身の祈にか」。

むざす 武佐併・武佐升(名) 近江國の領主佐佐木義實が、天文十三年、同國蒲生(シ)郡武佐驛にて造りたる一升枋。方四寸六分五厘、深さ二寸三分九厘八毛、容積五十一立方寸八分六厘餘、八合入にて、燒印なし。石田三成、佐和山占領の時、も使用したり。石田併。燒印なき枋。一説に、鐵を張りてあらぬ枋なりと。むざばんす。むざばん。

むざ(シ) 副(シ) 次條に同じ。天の鶴島(隱し)包んで、むざむざ殺す、その罪もおそろしく」。

むざむざ

むざむざと「副」むざとに同じ。傾城反
尋常地團太(??)踏んで……むざむざと
は死ぬまい……と観念し」

むざさん 無産(名) 資産の無きこと。

むざさん 無算(名) 淮南子に「日計無
算、歲計有餘」とあり。數ふるまでもな
き程に少きこと。むざ(無數)に同じ。

むざ(無誤)に同じ。

むざん 無慚無惡(名) 佛梵Alarika
の譯語。觀經疏記に「於三所造罪、自觀無
恥、名曰無慚、觀他無恥、說曰無慚」
とあり。惡をなしながら、自ら觀じて恥
づる所無きこと。漢書「我、むざんの法師
にて、惡む事の中に破る戒」は多からめ
ど、徒然放逸、無慚のありさま」。

むざん 無慚無惡(名) 佛梵Alarika
の譯語。觀經疏記に「於三所造罪、自觀無
恥、名曰無慚、觀他無恥、說曰無慚」
とあり。惡をなしながら、自ら觀じて恥
づる所無きこと。漢書「我、むざんの法師
にて、惡む事の中に破る戒」は多からめ
ど、徒然放逸、無慚のありさま」。

むざん 無慚無惡(名) 佛梵Alarika
の譯語。觀經疏記に「於三所造罪、自觀無
恥、名曰無慚、觀他無恥、說曰無慚」
とあり。惡をなしながら、自ら觀じて恥
づる所無きこと。漢書「我、むざんの法師
にて、惡む事の中に破る戒」は多からめ
ど、徒然放逸、無慚のありさま」。

むざん 無慚無惡(名) 佛梵Alarika
の譯語。觀經疏記に「於三所造罪、自觀無
恥、名曰無慚、觀他無恥、說曰無慚」
とあり。惡をなしながら、自ら觀じて恥
づる所無きこと。漢書「我、むざんの法師
にて、惡む事の中に破る戒」は多からめ
ど、徒然放逸、無慚のありさま」。

むざん 無慚無惡(名) 佛梵Alarika
の譯語。觀經疏記に「於三所造罪、自觀無
恥、名曰無慚、觀他無恥、說曰無慚」
とあり。惡をなしながら、自ら觀じて恥
づる所無きこと。漢書「我、むざんの法師
にて、惡む事の中に破る戒」は多からめ
ど、徒然放逸、無慚のありさま」。

むざん 無慚無惡(名) 佛梵Alarika
の譯語。觀經疏記に「於三所造罪、自觀無
恥、名曰無慚、觀他無恥、說曰無慚」
とあり。惡をなしながら、自ら觀じて恥
づる所無きこと。漢書「我、むざんの法師
にて、惡む事の中に破る戒」は多からめ
ど、徒然放逸、無慚のありさま」。

むざん 無慚無惡(名) 佛梵Alarika
の譯語。觀經疏記に「於三所造罪、自觀無
恥、名曰無慚、觀他無恥、說曰無慚」
とあり。惡をなしながら、自ら觀じて恥
づる所無きこと。漢書「我、むざんの法師
にて、惡む事の中に破る戒」は多からめ
ど、徒然放逸、無慚のありさま」。

むざん 無慚無惡(名) 佛梵Alarika
の譯語。觀經疏記に「於三所造罪、自觀無
恥、名曰無慚、觀他無恥、說曰無慚」
とあり。惡をなしながら、自ら觀じて恥
づる所無きこと。漢書「我、むざんの法師
にて、惡む事の中に破る戒」は多からめ
ど、徒然放逸、無慚のありさま」。

むざん 無慚無惡(名) 佛梵Alarika
の譯語。觀經疏記に「於三所造罪、自觀無
恥、名曰無慚、觀他無恥、說曰無慚」
とあり。惡をなしながら、自ら觀じて恥
づる所無きこと。漢書「我、むざんの法師
にて、惡む事の中に破る戒」は多からめ
ど、徒然放逸、無慚のありさま」。

むし

字として用ふ。人類、獸類、鳥類、魚介以
下の下等なる動物の總稱。蟲類(??)。
目くわちゅう(??)に同じ。目くしげ(??)蟲
氣の略。「蟲が起る」。

目くしげ(??) 蟲氣の略。「蟲が起る」。

目くしげ(??) 蟲氣の略。「蟲が起る」。

目くしげ(??) 蟲氣の略。「蟲が起る」。

目くしげ(??) 蟲氣の略。「蟲が起る」。

目くしげ(??) 蟲氣の略。「蟲が起る」。

目くしげ(??) 蟲氣の略。「蟲が起る」。

目くしげ(??) 蟲氣の略。「蟲が起る」。

目くしげ(??) 蟲氣の略。「蟲が起る」。

目くしげ(??) 蟲氣の略。「蟲が起る」。

目くしげ(??) 蟲氣の略。「蟲が起る」。

目くしげ(??) 蟲氣の略。「蟲が起る」。

むし

はてたる私の病人(??)にさりととも
と思ふ心も蟲の息」

蟲の印(句) ぬけがら。漢書「ただ癡た
まへるやうにて、變りたまへる所も無
く、美しげに打臥したまへるを、斯くな
がら、蟲の殻のやうにても見るわざな
らましと云ふ」。

蟲の殻(句) 足先の運の極めて鈍き
形容。沙石集「御舍利一粒、蟲の這ふや
うに這ひ寄りたまひけり」。

蟲の居所(句) 惡し。痛癢にさける
蟲を殺さぬ(句) 人の極めて、なきけ
深く、又は温和なる形容。蜚(??)も殺
さず。

蟲も踏殺さぬ(句) 前條に同じ。本朝
二十四孝「名さへ慈悲藏とて、蟲さへえ踏
み殺さぬ者」。

蟲を合はす(句) 蟲合(??)を行ふ。
山家白河にて、蟲合はせられるに」。

蟲を聞く(句) 鈴鈴鈴などやうの
蟲の聲を聞く。俳諧新選「布」。

蟲を殺す(句) 痛癢にさきりながら、
強ひて我慢す。

蟲を摩(??)る(句) 前條に同じ。浮世
風流寶物だから、なぐさまれても、蟲を
さすつてのけれど」。

蟲を封ず(句) 蟲封(??)をなす。
燈火に入る夏の蟲(句) 夏の蟲、飛
んて火に入る」に同じ。「謬語」。

蟲を焼く(句) 燈に入る夏の蟲、妻
を焼く(句) 秋の鹿」。

蟲を焼く(句) 燈に入る夏の蟲、妻
を焼く(句) 秋の鹿」。

むし

少女が透影(??)に名残多くて行きわかれ
ぬる」

李の垂衣(句) 古、婦人の外出する時、
笠の周圍に、薄き布を縫ひつけて垂し、
頭より身體を掩ひ隠すやうにせしめ
る。むし。夫本草「深みむしの垂衣結
び上げて通りわづらふ夏の旅人」。

むし 無私(名) 偏私の心無きこと。依怙
(??)をせぬこと。

むし 無視(名) 有れども、無きが如くに
侮り見ること。存在の價値を認めぬこ
と。蔑視。

むし 無疵(名) むきず(無疵)に同じ。

むし 無資(名) 資本の無きこと。

むし 無始(名) 佛何處まで遡り窮む
とも、その始無きこと。無窮の遠き過去。
字義無始よりこの方、生死(??)に流轉(??)
するは」。

無始の罪業(句) 佛「無始以來の罪
業。廣義無始の罪業、悉く滅すなれ
ば、……と、惡くもしげに仰せられて」。

無始の罪障(句) 佛「無始以來の罪
障。平家「惡業(??)煩悩(??)、無始の
罪障消ゆなるものをと、頼もしくぞ
思しめす」。

無始の罪(句) 佛「無始以來の罪。
無始の煩悩(??)」。佛「無始以來
の煩悩。廣義「無始の煩悩は、
雪を削る摺屑(??)、五蘊(??)離散して、
梅檀の烟に伴なふ」。

無始・無終の凡夫(句) 佛「無始の過
去より、無終の未來まで、生死を出離す
ること能はざる凡夫。廣義「無始・無
終の凡夫」。

むし 夢死(名) 深く思ひて夢に見るこ
と。むし 夢死(名) 夢に見るまで、深く思ふ
こと。

をえあわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにほ とてつちた そせすしそ こけくきか おえういあ

〔名〕秋の七草を、鉢植とし、その間に、外
部よりは見えぬやうに、蟲を入れたる事

したる物を、再び用ふ。二度の勤(マツ)を
なさしむ。

のは一切無く、隨ひて、身體も、宮殿もなく、識心のみ存して、深妙なる禪定(サマディ)

をたした油障子」曰らうあう(老鶯)の異稱。一説に、次項の鳥と混同して呼べるな

ををわ ろれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

2225

りと。世爲は、……夏・秋の末の末まで、老聲に鳴きて、蟲くひなど、ようもあらぬ者は、名を附けかへていふぞ、くち惜しくすき心ちする。」四(動)燕雀類に屬する鳥。形、鶯に似、頭部は橄欖色にして、不規則なる灰白色の條斑を交へ、背面は橄欖綠色、胸部は灰白色、腹部は白色を呈し、顔に黄白色の眉斑、翼にも同色の帯一二條あり。我國、北方の山地に棲み、數種類ありて、斷崖・樹幹に巢を營み、主に昆蟲を捕へて食ふ。

むじくひあたま 蟲喰頭・虫喰頭(名)『蟲喰』の痕(名)のごとく見ゆるよりいふ『毛髮の間の處處に、腫物又は疵などの痕の存する頭。』

むじくひど 蟲喰砥・虫喰砥(名)つしま(對馬縣)に同じ。

むじくひは 蟲喰齒・虫喰齒・齧齒(名)むじは(蟲齒)に同じ。 運歩色葉集「齧齒、ムシクヒバ」。

むじくひびろおど 蟲喰天鷲絨・虫喰天鷲絨・蝕天鷲絨(名)『蟲喰』の痕のごとく見ゆるよりいふ。地合は平織、綾織又は縹子織にて、輪奈(名)にて模様を現したる天鷲絨。もと、葡萄酒の商人の天文年間の輸入に係り、慶長中、京都西陣の織工、これに倣ひて織り出しに始まる。

むじくふ 蟲喰ふ・虫喰ふ・蝕ふ・蝕ふ(動四他)蟲、物を喰ひてそこなふ。むしくひになる。むしばむ。 養村蠶つて下葉ゆかしき煙草かな」。

むじくやう 蟲供養・虫供養(名)農夫の耕作中、多くの蟲類を殺すことあるより、僧に請ひて營む供養。 「栗の實、むじくやう 蟲栗・虫栗(名)蟲ばみたるむじくやう 蒸栗(名)蒸したる栗の實。むじくりあつじ 蒸くり暑し(形)むじあつじ(蒸暑)に同じ。 藤原歌「初夜すぎ、はや夜中、むじくり暑う、寝にくやと」。

むじぐるじ 蒸苦し(形)苦しきほどに蒸暑し。

むじくわじ 蒸菓子(名)蒸して製したる菓子。例へば、饅頭など。むしもち。

むしけ

むしもの。

むしけ 蟲氣・虫氣(名)小兒の、蝸蟲、又は消化不良などによりて、體質虛弱となり、不眠・痲痺等を伴ふこと。むし。 油種「あはれなは蟲氣なる子の乳母(名)」。

むじげ 無字偈(名)『佛』無字の妙理を示したる偈、即ち「無無無無無、無無無無無、無無無無無、無無無無無」の一種。親指を趾、人さし指を蛇、小指を蜥蜴に擬へ、三(三)の理によりて、勝負を定むるもの。

むじけん 蟲拳・虫拳(名)拳(名)の一種。

むじけんけん 無試験(名)試験を経ぬこと。むじけんけん 無試験檢定(名)試験の方法に依らずして、資格を檢定すること。(試験檢定に對して)

むじけら 蟲蟻・虫蟻(名)むし(蟲)に同じ。 寄藤虎狼・蟲けら 俳諧古連貞徳「冬ごもり蟲蟻まてもあなかしこ」。

むじこ 蟲籠・虫籠(名)むじかご(蟲籠)に同じ。『古語』むじこ(蟲籠)の略。 羽川波の數、蟲籠より手をいだし、軒に立てたる槍お取り」。

むじこ 蒸海鼠(名)ほじ(乾海鼠)に同じ。 蒸講(名)古山城國葛野(名)郡東梅津村にて、二月中の酉の日に、痘瘡麻疹(名)の呪禁なりとて、婦女子の集まりて行ひし習俗。一村七町の者、一町ごとに、頭屋(名)を定めて、注連繩(名)を張り、産土神(名)松尾明神を祭り、庭上に大釜を据ゑ、醴酒(名)又は醇酒(名)を沸し、小兒又は他郷の者を捕へ、抱きて、釜の上にて、三度蒸す眞似をなし、三方を鳥籠として、その沸したる酒を俯めて歸らしむるなどの儀式をなし、頭屋にての響應念佛などありたり。

むじこがう 蟲籠格子・虫籠格子(名)蟲籠のごとく、組子を繋ぐこまかく取り附けたる組格子。和漢三才圖「繁密而如三蟲籠」者、謂三蟲籠也。

むじこたじ 蟲熱・虫熱(名)うさはらし(憂晴)に同じ。 「代男」遊び盡して、胸つ

むじま

かへて、蟲こなしに、少しの商する」。

むじこまど 蟲籠窓・虫籠窓(名)蟲籠格子を取り附けたる窓。むしこ。 續山井集「蜘蛛の巢や二階つばきの蟲籠窓」。

むじごゑ 蒸聲(名)蒸攻の時、各所に備へたる軍兵などの發する聲(名)の聲。

むじさけ 蒸酒(名)せうちう(燒酎)に同じ。

むじさん 無資産(名)資産の無きこと。

むじじやう 無始生死(名)『佛』無始以來の生死。 海清記「無始生死の間に塵の結縁つもらて、泰山となる」。

むじしるじ 蟲印・虫印(名)「井守」の印に同じ。 本朝醫藥比事「守宮(名)の血を取つて、左の腕に附けおきぬ。これを蟲じしとて、その女、男にまみえぬ内は、何ほど洗うても落ちざる例あり」。

むじす 蟲酸・虫酸(名)むしづ(蟲唾)に同じ。 蟲酸が走る「句」『蟲唾(名)が走る』をむじせめ 蒸攻(名)『むす(蒸す)』を見よ。敵を破らうために、火を擧げ、(名)を作りて、大舉急襲の勢を示すこと。

むじぞな 蒸備(名)蒸攻を行ふ部隊。

むじそは 蒸蕎麥(名)蒸して造りたる蕎麥。 代女川口屋の蒸蕎麥」。

むじそはきり 蒸蕎麥切(名)前條に同じ。 輕口男「一杯六文かけなし、むし蕎麥切の根本(名)」。

むじたいまつ 蒸松明(名)蒸攻に用ふる松明。

むじだの 蟲出・虫出(名)次條を見。 蟲出の神鳴(名)『句』『禮記の月令篇に「仲春之月……雷乃發聲、始電、蟄蟲咸動」とあり。春の初の雷鳴。はつがみなり。蟄雷。五人女、蟲取の神鳴ひびき渡り、何れも驚きて、姥(名)は年越(名)の夜の煎大豆(名)取り出すなど」。

むじたつ 蒸立つ「他下二他」盛んに蒸す。 一代男「湯氣(名)に蒸して立て」。

むじたて 蒸立(名)食物などの、蒸し上へてより、多くの時間を經ざること、又

むじたれ

その物。

むじたれ 苧垂・蒸垂(名)次條に同じ。 仲實玉記「綾筒笠染付蟲垂二點」。

むじたれきぬ 苧垂衣(名)古、女の道を行くにうすき、笠のめ布帛をつけ、長く垂れたるもの。むし。

むじづ 蟲唾。 飲(名)の氣味にて、口中に逆出する、胃内の酸敗液。むじず(蟲酸)参照。

むじづ 蟲唾が走る「句」『口中に、胃内の酸敗液逆出して、嘔吐を催す。』蟲が好かず」に同じ。

むじし 無實(名)事實の存せぬこと。實際ならぬこと。 太平記「無實の議によつて、死罪を行はれ候はば」。

むじつくし 蟲盡虫盡(名)『むしあはせ(蟲食)に同じ。 平家方の朝令、月の夜詩歌(名)管絃・鞠・小弓・扇合・給合草づくし、蟲づくし、様々興ありし事ども』。

むじつ 蟲喰・虫喰(名)『喰』の音便。むじつ 蟲附虫附(名)類白(名)をよく轉らしむるために、鈴蟲・松蟲などの側に置き、その聲を學ばしむること。

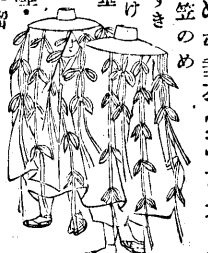
むじつ 六質汁(名)昔、牛蒡(名)・芋大根赤豆(名)など、六種の實を入れ、事始(名)・事納(名)の兩日に食せし汁。

むじどころ 蟲所(名)蟲の音を聞きて樂しむに適する地。 佛蘭西遊來出「今宮は蟲所なり聲なり」。

むじどり 蟲取・虫取(名)蟲を捕ふこと。

むじどりきぬ 蟲取菊・虫取菊(名)〔植〕ちまゆき(名)〔除蟲菊〕に同じ。

むじどりぐさ 蟲取草・虫取草(名)〔植〕



なづな(蕨)に同じ。

むじどりすみれ 蟲取葦・虫取葦〔名〕

〔舊〕狸藻科に屬する草。高さ三四寸。葉は叢生し、長卵形又は長楕圓形に、一箇づつに粘液分泌し、花莖の頂端に、一箇づつの卵形・紫色の花を著く。小蟲の接近する時、これを附著せしめ、葉の上縁を卷きて捕へ、消化液を出して吸収す。我國、高山に自生す。

むじどりせきじやう 蟲取石菖・虫取石菖〔名〕

〔舊〕石菖蒲科に屬する草。高さ一二尺。葉は對生し、卵狀披針形にして、鈍頂全緣、夏、淡紅・紫紅・白色の小花、聚繖花序に開く。莖の節下より、粘液分泌して、小蟲の花部に昇るを防ぐ。原産地は歐羅巴南部。觀賞用として栽培す。はへとりなでしこ。もちなでしこ。

むじな 猪・猪〔名〕

〔動〕食肉類に屬する、哺乳動物。狸に似て、頭と鼻とは尖り、眼黒く、毛は深黒にして柔く、黄褐色を呈し、斑あり。穴居してよく眠り、夜間出て、食を求む。毛は、ちよつき、その他、冬著の裏に用ふ。狸と同種なるべしとの説あり。うじな。もじな。

むじなじる 猪汁・猪汁〔名〕

猪の肉を實としたる味噌汁。

むじなひやうちやう 猪評定・猪評定

〔名〕きたはちやうちやう(小田原評定)に同じ。五元集・行年や猪評定夜あけまで。

むじなも 猪藻・猪藻〔名〕

〔舊〕藻類に屬する草。淡水中に自生して、根なく、葉は輪生し、圓形にして、感覺鋭き毛を有し。葉腋に、五瓣の花・一箇を著く。小蟲の、葉面の毛に觸るものある時は、葉身、直ちに閉合して、これを捕ふ。

むじねつ 蟲熱・蟲熱〔名〕

〔舊〕蟲氣(シ)に因む、小兒の發熱。
むじのす 蟲巢・蟲巢〔名〕

〔舊〕織物。靈絲(シ)と山繭の絲とにて織りたる織物。
むじのたれぎぬ 亭垂衣・帷〔名〕

むじのぼす 蒸上す〔動下二目〕

むじの息や 蠅の聲

むじは 蟲・蟲〔名〕

むじはみ 蟲食・蟲食〔名〕

むじはむ 蟲食む・蟲食む〔動四他〕

むじはや 蟲早し・蟲早し〔形一〕

むじはら 蟲腹・蟲腹〔名〕

むじはらひ 蟲拂・蟲拂〔名〕

むじは 蒸火〔名〕

むじは 無慈悲〔名〕

むじは 無字碑〔名〕

むじは 霧集〔名〕

むじは 無執〔名〕

むじは 蟲封・蟲封〔名〕

むじふ 蟲封・蟲封〔名〕

こと、又その護符。

むじぶ 蒸鉄〔名〕

〔舊〕竹筒の一方に糸を張り、蠅を覆ひ、その上方に飛びのぼりたる時、蠅の一端を、籠又は袋などに向け、張りたる紗の上より息を吹きかけて、蠅を、その籠又は袋などの中に入らしむること。貞徳文藝・晚景・蟲吹可三龍出候。

むじぶすま 蒸衣・蒸衣〔名〕

〔舊〕一説に、蟲食の義にて、絹の夜著なり。或は、むじはむ(シ)の義か。〔古語〕記・汝を置きて夫(シ)はなし綾垣のふはやが下にむじぶすま柔(シ)やが下に袴(シ)ぶすま。萬葉集・蒸衣にこやが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒しも。

むじふせ 蒸伏〔名〕

〔舊〕蒸攻をなささんがために備へおく伏勢。

むじふはい さんどうきよく 無集配三等

〔舊〕集配をなさざる三等局。

むじぶら 蒸風呂〔名〕

〔舊〕浴室の四方を密閉し、體を湯氣にて蒸し温むる風呂。

むじへん 虫偏〔名〕

〔漢字の偏の字。〕

むじはら 蟲干・蟲干〔名〕

(有心(シ)に對して) 四〔文〕連歌にて、詞を選び繕はぬこと。(有心(シ)に對して) 〇遠慮なく物を乞ふこと。一代男

御無心ながら乳を、少し貰ひましょ

御無心〔名〕

〔舊〕無慮なるを、海の深く廣きに譬へて、眞如の理體をいふ。無盡藏海。

むじんかい 無盡海〔名〕

〔舊〕無慮なるを、海の深く廣きに譬へて、眞如の理體をいふ。無盡藏海。

むじんけい 無信仰〔名〕

〔舊〕無慮なるを、海の深く廣きに譬へて、眞如の理體をいふ。無盡藏海。

むじんがけ 無心懸〔名〕

〔舊〕無慮なるを、海の深く廣きに譬へて、眞如の理體をいふ。無盡藏海。

むじんきん 無盡金〔名〕

〔舊〕無慮なるを、海の深く廣きに譬へて、眞如の理體をいふ。無盡藏海。

むじんけい 無神經〔名〕

〔舊〕無慮なるを、海の深く廣きに譬へて、眞如の理體をいふ。無盡藏海。

おえういあ

こけくきか

そせすしざ

とてつちた

のねねにな

ほへふひは

もめんむみま

よゆや

るれるりら

をえわわ

をえわわ

を虎に攀へていふ語。太平記無常の虎の身を貫むる上野の原を過ぎければ

むじやうおん 無常音 [名] [佛] 絶對の眞理を譬へていふ語。隻手(びだ)の聲。龍曲山經「梢に響く山彦の無常音を聞く便(の)となり」

むじやうかうお 無償行爲 [名] [法] これに對する報償なき法律行爲(有償行爲に對して)

むじやうがく 無上覺 [名] [佛] むじやうしやうがく(無上正覺)に同じ。

むじやうかひつけ 無償貸付 [名] [法] 無償にてなす貸付。(有償貸付に對して)

むじやうかせ 無常風 [名] [佛] 無常の風に同じ。長町玄觀「今夜は所在の無常風、沙汰は無いこと、雜禮の辰」

むじやうかん 蒸羊羹 [名] 羊羹の一種。赤小豆(あじ)の餡の水氣を絞取り、麵粉寒天などを加へ、砂糖汁にて捏ね、器に入れて固まらせ、釜にて蒸したるもの。初單に羊羹といへば、この製法に依るものなりしが、煉(は)羊羹出づるに及びてこの名生ずるに至れり。

むじやうきり 無性切 [名] 無性に切ること。むやみに切ること。國姓爺後日合戰「遠慮會釋(だ)も長刀の手にも構はぬ無性切」

むじやうけ 無常傷 [名] [佛] 諸行無常むじやうけい 無償契約 [名] [法] 當事者の一方が義務を負ふのみにて、その報償を受くることなき契約。例へば、普通の贈與など。

むじやうこう 無常講 [名] [佛] 貧賤無縁の人人、組合を作り、少しづつ掛金を集め、その中の者に死にし時は、その積金にて、講中寄り合ひて、葬送を取りまかなふこと。新三篇「黒髪」秋知らぬ男はもるる無常講」

むじやうこころ 無常心 [名] 無常の感じ。善の門松「ああ、慈悲の無い親御やと、……無常心や、入相の鐘物凄く」

むじやうご 無常聲 [名] 世の無常なる由をうたふ聲。七職人歌合「無常聲人

聞けてぞ飄飄のしばしばめぐる月の夜念佛(ぶつ)」

むじやうさんぎえ 無上慚愧衣 [名] [佛] 慚愧の徳能く衆惡を防ぐこと、衣服の如きよりいふ(袈裟)の總名。

むじやうしやうふ 無償收入 [名] [法] 無償行爲により得たる收入。

むじやうしやうがく 無上正覺 [名] [佛] 梵 Anuradha-samyak-sambodhi (阿耨多羅三藐三菩提)の譯語。無上の正覺。しやうがく(正覺)參照。諸曲(葛城)「五衰の眼を、無上正覺の月にさす」

無上正覺の月 [名] [佛] 無上正覺を、月の朗らかなるに譬へていふ語。諸曲(葛城)「五衰の眼を、無上正覺の月にさす」

むじやうしやうさうがく 無上正等覺 [名] [佛] むじやうしやうがく(無常正覺)に同じ。

むじやうしやうさうじやうがく 無上正等正覺 [名] [佛] 前條に同じ。

むじやうしやうさうじやうがく 無上正等正覺 [名] [佛] 前條に同じ。

むじやうしやうさうじやうがく 無上正等正覺 [名] [佛] 前條に同じ。

むじやうしやうさうじやうがく 無上正等正覺 [名] [佛] 前條に同じ。

むじやうしやうさうじやうがく 無上正等正覺 [名] [佛] 前條に同じ。

むじやうしやうさうじやうがく 無上正等正覺 [名] [佛] 前條に同じ。

むじやうしやうさうじやうがく 無上正等正覺 [名] [佛] 前條に同じ。

むじやうしやうさうじやうがく 無上正等正覺 [名] [佛] 前條に同じ。

むじやうしやうさうじやうがく 無上正等正覺 [名] [佛] 前條に同じ。

むじやうしやうさうじやうがく 無上正等正覺 [名] [佛] 前條に同じ。

むじやうしやうさうじやうがく 無上正等正覺 [名] [佛] 前條に同じ。

むじやうどり 無常鳥 [名] 前條に同じ。

むじやうに 無性に [副] むやみに「達(だ)に。やたらに。和合人むしやうにタアアといつて」

むじやうにん 無生忍 [名] [佛] むしやうはだん(無生法忍)に同じ。十洲十地(じゅうしゅうじゅうち)に同じ。忍地とも號し、證果をば無生忍ともいひ、釋尊をば能忍とも名づけ奉る。

むじやうねんきん 無償年金 [名] [法] 一。これに對する報酬無きもの。(有償年金に對して)

むじやうなばい 無常話 [名] 人間の死につきての話。一代男(いちだいのう)を吹き、無常咄(むじやうだつ)内證事よろづ人様の氣を取る事ぞかし」

むじやうふくてん 無上福田 [名] [佛] 次條を見よ。

無上福田の衣 [名] [佛] 次條に同じ。

無上福田の衣の上に、邪見放逸の胃を著る

むじやうふくてん 無上福田衣 [名] [佛] ふくてん(福田衣)を強めていふ語。

むじやうばい 無上菩提 [名] [佛] ばい(大菩提)に同じ。諸國これ、敢て名利のためにせず、無上菩提のためなり

むじやうふばい 無生法忍 [名] [佛] 三法忍の一。眞如法性の無生無滅を認知して安住すること、又その菩薩の位。無生忍。

むじやうめいはい 無上命法 [名] [法] 哲むじやうめいはい 無上命令 [名] [法] 哲「獨逸の哲學者カント(Kant)の命名「ちよくけんめいはい(直言命令)に同じ。

むじやうやたい 無性失鱈に [副] 「無性の條下を見よ。

むじやうやみ 無性闇 [名] 無性に思ひつめて、前後を辨へぬこと。むやみ。やみくも。毛吹草(けふし)も、遠慮も、むしやうやみに、見知ごしなる惡口」

むじやうやみ 無性闇 [名] 無性に思ひつめて、前後を辨へぬこと。むやみ。やみくも。毛吹草(けふし)も、遠慮も、むしやうやみに、見知ごしなる惡口」

むじやうやみ 無性闇 [名] 無性に思ひつめて、前後を辨へぬこと。むやみ。やみくも。毛吹草(けふし)も、遠慮も、むしやうやみに、見知ごしなる惡口」

むじやうやみ 無性闇 [名] 無性に思ひつめて、前後を辨へぬこと。むやみ。やみくも。毛吹草(けふし)も、遠慮も、むしやうやみに、見知ごしなる惡口」

押し寄すること。

むじやかへし 武者返 [名] 昔、諸侯の屋敷にて、表長屋の前に構へし小溝のふちに立てし石。

むじやき 蒸焼 [名] 鍋・土器などに物を入れ、密閉して焼くこと。うむしやき。

むじやしき 無邪氣 [名] 邪念の無きこと。心のよこしまならぬこと。心の淡泊なること。言行にいつはり飾の無きこと。

むじやく 無爵 [名] 爵位を有せぬこと。

むじやくし 無爵者 [名] 爵位を有せぬ人。

むじやくしや 貌 [名] むしやむしやに同じ。百台若大臣野寺(やうしや)の中は、むしやくしやくと、髪が澤山ある筈」

むじやくしや 貌 [名] むしやむしやに同じ。百台若大臣野寺(やうしや)の中は、むしやくしやくと、髪が澤山ある筈」

むじやくしや 貌 [名] むしやむしやに同じ。百台若大臣野寺(やうしや)の中は、むしやくしやくと、髪が澤山ある筈」

むじやくしや 貌 [名] むしやむしやに同じ。百台若大臣野寺(やうしや)の中は、むしやくしやくと、髪が澤山ある筈」

むじやくしや 貌 [名] むしやむしやに同じ。百台若大臣野寺(やうしや)の中は、むしやくしやくと、髪が澤山ある筈」

むじやくしや 貌 [名] むしやむしやに同じ。百台若大臣野寺(やうしや)の中は、むしやくしやくと、髪が澤山ある筈」

むじやくしや 貌 [名] むしやむしやに同じ。百台若大臣野寺(やうしや)の中は、むしやくしやくと、髪が澤山ある筈」

むじやくしや 貌 [名] むしやむしやに同じ。百台若大臣野寺(やうしや)の中は、むしやくしやくと、髪が澤山ある筈」

むじやくしや 貌 [名] むしやむしやに同じ。百台若大臣野寺(やうしや)の中は、むしやくしやくと、髪が澤山ある筈」

むじやくしや 貌 [名] むしやむしやに同じ。百台若大臣野寺(やうしや)の中は、むしやくしやくと、髪が澤山ある筈」

むじやくしや 貌 [名] むしやむしやに同じ。百台若大臣野寺(やうしや)の中は、むしやくしやくと、髪が澤山ある筈」

むじやつ

外廓に沿ひたる處に設けて、武者の屯集、勢揃ひなどせし廣場。『撃劍の道場』にて、傍觀者の控へ居る場處。

むじやつかひ 武者遣〔名〕戰陣に於ける騎卒の指揮。

むじやどろ 武者所〔名〕古、院司〔名〕に屬し、院宮〔名〕の武者の詰番せし所。又、元弘三年、朝廷にも設置せられて、その警固の武士の詰番せし所。後者は、諸國の武士交替して詰番し、新田氏の族人、その頭人に任せられたり。『泰西別志』

武者所といふは、官府の名なるべし。御書所、御廚子所、記録所の類なるべし。兵家者流の輩の六十六箇國に武者所三十三ありといへるは、國を誤れるなるべし。『武者所の武士』

むじやばり 武者走〔名〕城内にて、軍士の往來に便するため、土居〔名〕の下、その内の屋敷裏の間に設け、幅三間の道。『昔の軍船の船側に、舳より櫓にかけて設けし通路。百合若大田野守鑄射手船には、……武者走を、高く上げ、船筏〔名〕を、二行に列ね』目はしがかり〔名〕に同じ。

むじやぶきやう 武者奉行〔名〕武家時代に、武者の進退及び戰時の軍中の諸事の指揮を掌りし役。

むじやぶね 武者船〔名〕武者の乗れる

むじやぶり 武者振〔名〕武者の武裝し、又は雄雄しく振舞ふ状態。『武者振の髭づくりせよ土大根〔名〕』

むじやぶり 武者振附く〔動四自〕力をこめて、敵に掴みかかる。しがみつ

く。むじりつく。

むじやぶる 武者震〔名〕心勇み立ちたる餘に、身體の震ふこと。『八笑』なぜ、そんなに震へなかりや。……ははあ、武者ぶるひだ、武者ぶるひだ

むじやべつ 無差別〔名〕『佛』有爲〔名〕の諸法は、外相は千差萬別なれども、内性の一なること、恰も波の姿は異なれども、水の性は一なるが如くなること。平等〔名〕。『むじやべつ』無差別に同じ。

むじやば

むじやばこり 武者埃〔名〕昔の軍陣にて、味方の軍勢の蹴立つる塵埃。〔武者埃〕に對して。『多無遮會』に同じ。

むじやばふ 無遮法會〔名〕『佛』むじやむじやまど 武者惣武者窓〔名〕武家屋敷にて、門番所に設けたる

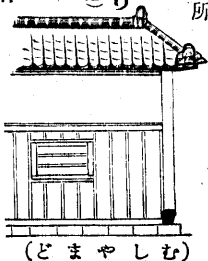
脇の門。たるけまど。よりきまど與力窓参照。

むじやむじや

〔名〕無作

法に物を食ふさま。むじやむじやむじや

毛など又は心の亂れ纏れたるさま。むじやくしや。むやくや。むさむさ。むやむや。



(どまやしむ)

むじやりむじやり 〔名〕前條に同じ。

むじやりんたう むじや龍膽〔名〕植

唇形科に屬する多年生の草。高さ一二尺。葉は對生し、無柄にして、狭長全縁、莖の上部に、青紫色なる大形の花簇生す。山地に自生す。せいらん。

むじやわらち 武者草鞋〔名〕むじやうり

〔武者草履に同じ。〕

むじやわらんち 武者草鞋〔名〕前條に

同じ。門出八咫。これは武者草鞋、旅への御用に立たず

むじやわらんち 武者草鞋〔名〕前條に

むじやわらんち 武者草鞋〔名〕武者を描きたる

繪。北條氏と武者繪などに、馬をとばせて走る間に、弓を引き、矢を放つと見えたり

むじやゑ 無遮會〔名〕『佛』梵語。Pancha-parica 又 pancha-rasika-parica (般闍于慧)の譯語。賢聖道俗貴賤上下の差別を問はず、平等に財施と法施とを行(釋)ずる法會。印度の國俗、屢ばこれを行ひ、支那にては、梁の武帝の大通元年、初めて行ひ、我國にては、推古天皇の四年十一月、法興寺落成に際して行へり。五年に一回を通過す。むじやゑ。

むじや 無主〔名〕所有主の無きこと。

むじや

むじや 無酒〔名〕『佛』むじやしん(無酒神)の略。勢多合戰、無茶無酒又無飯……腹中、けしからず透き徹り

むじやう 無終〔名〕終の無きこと。未來永劫に續くこと。『無始無終』参照。

むじやき 無主義〔名〕一定の主義の無きこと。

むじやく 無宿〔名〕住む家を有せぬこと。又その人。やどなし。じやうしむし

ゆ(上州無宿参照。月籍の無きこと。又その人。無籍。『き人。』

むじやくもの 無宿者〔名〕住む家の無

むじやくらう 無宿牢〔名〕にけんらう(二

間牢)に同じ。

むじやくこ 無數劫〔名〕『佛』あそろぎこ(阿僧祇劫)に同じ。衆生往昔の無數劫に苦を受けて、生死(しじ)の中に流轉(りゅうてん)して

むじやくきでん 無主職田〔名〕給與せられたる者の無き職田。

むじやくしん 無酒神〔名〕『佛』法華文句の卷二に「阿修羅者、此云三無酒。四天下探花醞三於大海、一魚龍業力、其味不變、順始暫斷。故言三無酒神」とあり。あしゆる阿修羅の異稱。

むじやくつ 無術〔名〕藝術なきこと、又權略なきこと。『不學、無術』

むじやくぶつ 無主物〔名〕〔法〕所有主の無き物件。不動産の場合には、當然國家の所有に歸すれども、動産なる場合には、先占によりて所有權を得。

むじやくほん 無主品位田〔名〕給與せられたる者の無き品位田。

むじやくみ 無趣味〔名〕趣味の無きこと。無風流。沒趣味。

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、たむじやくん 矛盾矛盾〔名〕『ほ』こと、た

むじやくん

「contradiction」むじやくんたいらう(矛盾對當)の略。矛盾の原理(句)「哲」むじやくんりつ(矛盾律)に同じ。

むじやくんご 矛盾語〔名〕『哲』英 Contradictory terms 二箇の名辭の屬性の、互に全く兩立せぬもの。例へば、「善」と「不善」との類。

むじやくんたいらう 矛盾對當〔名〕『哲』

「英 Contradictory opposition」全稱肯定判斷と特稱否定判斷と、又は全稱否定判斷と特稱肯定判斷と、即ち質も量も互に異なる二對の判斷の對當關係。例へば、「すべての人は正直なり」と「或人は正直にあらず」と、又は「すべての人は正直にあらず」と「或人は正直なり」との類。この場合、一方眞なれば、他方は必ず偽、又、一方偽なれば、他方は必ず眞なる關係にあり。

むじやくんはふ 矛盾法〔名〕『哲』むじやくんりつ(矛盾律)に同じ。

むじやくんはふ 無準備〔名〕準備してあら

むじやくんはふ 無準備發行〔名〕

〔經〕兌換の準備をなさずして、紙幣を發行すること。

むじやくんはふ かうじへい 無準備發行紙幣〔名〕〔經〕無準備發行の紙幣。例へば、不換紙幣など。

むじやくんりつ 矛盾律〔名〕『哲』英「law of contradiction」論理上の三大原則の一。同一の事物に就きて、一方に肯定しながら、他方に否定するを得ず、又一方に否定しながら、他方に於て肯定するを得ざること。例へば、「金剛石は炭素物なり」といへば、「金剛石は炭素物にあらず」といへば、「金剛石は炭素物なり」といへば、更に「金剛石は炭素物にあらず」といふを得ざる類。(自同律排中律に對して)非矛盾律。

むじやくん 墓所〔名〕ほしよ(墓所)に同じ。

千歳月忌の日、かの墓所にまかりけるに、平家一天の君崩御なつて後、御墓所へ渡り奉る時の作法は、南北二京の大衆、悉く供奉して、御墓所のめぐりに繞(めぐ)るを打つ

ことありけり」
むじやう 霧鐘【名】霧中信號の一。晝夜の別なく、一定の時間を隔てて、自動機にて鐘を打ち鳴らすこと、又その鐘。
むじやう 無繩【名】次條を見よ。
無繩自縛【名】(句)「自縛」自縛に同じ。

むじやうくわうぶつ 無相光佛【名】(佛)「その光明を稱讃する者なき義」じふに「わちぶつ十二光佛」を見よ。
むじやうく 無證據【名】證據の無きこと。
むじやうじやてん 無所有處天【名】(佛)『梵 Akṣanāyāna の譯語』三界諸天の一。むじやてん(無色天)參照。

むじやうち 蒸夜討【名】蒸攻の方法に依る夜討。
むじやく 無色【名】色の無きこと。色を帯びてあらぬこと。「無色透明」

むじやく 無職【名】一定の職業の無きこと。無職業。
むじやく 無職【名】前條に同じ。

むじやく 蟲除【名】「蟲害を除くこと、又そのための器具裝置。むじやくまもり(蟲除守)の略。
むじやくまもり 蟲除菊【名】「植」ぢやちゆ(除蟲菊)に同じ。さやちゆ(蚤取粉)を見よ。

むじやくまもり 蟲除守【名】毒蟲、毒蛇の類の害を避け得べしといふ護符。むしよけ。
むじやくまもり 無所屬【名】屬する所の無き義。むし(無畏)に同じ。

むじやくまもり 無始來【名】(佛)無始よりこのかた。海經記「無始來の眠は、夢長く覺め」
むじやくまもり 筆撈【名】むしること。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】鹿の夏毛(か)の、秋にかけたもの。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】煮又は焼きたる魚肉を裂きちりたるもの。むしりもの。摘録集「乾物のむしり看に、酒を

出して、中なほりの酒盛り」
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】焼鰯(さ)を裂きちりたるもの。三代男「短きもの(この所の夜遊、むしりするめ)」
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

絶えず見えける」
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

貧家にて、戸として用ふるもの。風流筆記「屏風、建戸に、烟立ちのぼり、乞食の住める所と見えけるに」
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。
むじやくまもり 筆毛撈毛【名】むしりするめ。

むす

むす 蒸す【動四他】氣を、鬱して上へ通らす。日湯氣をこもらせた中に入れば、蒸して熱せぬ。ふかす。うむす。火を燃やして揚げ、燗を作して、急ぎせんとする状を、敵に見せかく。太平記新田殿は山門より押し寄せ、正成は搦手より攻め登り、真中に包んで、一蒸(じ)蒸す程ならば、朝敵、一戦に亡びん。

蒸す(蒸)【句】こしき(飯)に同じ。

字彙(蒸)【句】こしき(飯)に同じ。

むす 嘔す、咽す、硬咽す【動下二自】飲食物、涙、埃、煙又は高き香氣などのために、氣息塞がるごとく感ず。むせぶ。和名「硬咽、無須、食塞也」【心塞】が。高葉「我妹子」が植ゑし梅の木見ること心咽せつつ涙し流る。

むす 無手【無】「無手は、假借の文字」無作法に相手に迫りて、勢強く振舞ふさま。むんず。著書前を走る馬のさし細の先を、むすぞと踏まへけり。平道今日の御座席こそ、よにしどけなう見え候へと色代(む)して、信頼卿の上(む)に、むすぞと著きたまふ。

むす 無敵【名】数の数へきれぬほど多きこと。無算。数知れぬこと。

むす 無敵劫【名】「佛」むしゅこふ(無敵劫)の誤讀。「と痒し」。

むす 痒し【形】「むすむす」。

むす 痒し【名】「ほこぎ(痒)に同じ」。

六帖かや山のむすぎが本にむす昔の色も變らず世をや盡さん。

むす 息息子【名】「生(こ)す子の義」男の子。息。息(こ)。源氏、御むすこの君たち。

むす 息息子株【名】親がかりにて、世の辛酸を知らぬ息子の身分。萬葉千紅「阿保親王の五番目の息子株、岡田川原にひとりぶらつく」。

むす 息息子【名】「前前條に同じ」。

むす 息息子【名】「地」もすは(莫斯科)に同じ。【德川時代の語】。

むす 息息子【名】「地」前條の訛。【德川時代の語】。

【名】「地」前條の訛。【德川時代の語】。

むす 息息子【名】「地」前條の訛。【德川時代の語】。

むす 息息子【名】「地」前條の訛。【德川時代の語】。

むす 息息子【名】「地」前條の訛。【德川時代の語】。

むす 息息子【名】「地」前條の訛。【德川時代の語】。

むす 息息子【名】「地」前條の訛。【德川時代の語】。

むす

て、被下甚だ赤きもの。うすこうべや。

むす ちがけ 六筋掛【名】三味線の類に、絃の六筋なる昔の樂器。一代男はさみ箱より、接竿(つぎ)の黒檀、六すち懸を取り出し。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。



むす

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

むす ちがけ 六筋右衛門【名】「さすちがけ」。

るもの。

むすびうた結玉「名」むすびたま結玉

むすびうた結玉「名」一條の線を、上下

より見たるが如き形に模したるもの。

むすびうた結玉「名」燈臺「名」

一種、細く削りたる木三本を、

やや上端に近

き部分に於

て、紐にて

括り合はせ、三方に交又状

に繋ぎ、上に燈臺を載せるもの。

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉



(臺燈結)



(庫兵結)

「物へまかりける人のもとに、幣(ひし)を、結

袋に入れて遣す」と

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉

むすびうた結玉「名」結玉「名」結玉



(文結)

編み又は組みなどして、一つの物に作る。

「透箱」成立せしむ。落葉黄金(おとし)

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

ぞ濡れける女郎花露むすぼれて立てるけ

しきに」心はれやかならず。ふきぐ

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

「結玉」を、衣箱の大きさに結べるに

むすめ

人持てば、身代漬すに同じ。〔諺語〕
娘一人に智三人〔句〕次條に同じ。
醒睡笑「娘一人に智三人といふ事は、昔
富める人の娘を持ちたりしが」
娘一人に婿八人〔句〕「一人の娘に
對して、婿たらんと望む者多きこと。
一つ一つの物事に對して、希望者の多き
譬。〔諺語〕」

むすめがた娘形〔名〕むすめやく〔娘役〕に
同じ。和合「張公が娘形だらうが、矢場
公が和事師だらうが」

むすめかたき娘形氣・娘氣質〔名〕娘
の、娘らしき、うぶなる氣だて。むすめぎ。
むすめころ。

むすめ娘氣〔名〕前條に同じ。八陣守
應慈明幕に焦れ慕うてゐるものを、聞え
ませぬと娘氣に跡や先なる恨言」

むすめきだいふ娘義太夫〔名〕年若き
女の語る義太夫節又その女。たれぎだ。
むすめ娘子〔名〕むすめ〔娘〕に同じ。
狂言等「おな上臈というて、むすめ子が
御座らうが」

むすめ娘御〔名〕むすめ〔娘〕の敬稱。
諸曲景「御娘御の御所望の候」

むすめころ娘心〔名〕むすめかたき娘
形氣に同じ。

むすめさかり娘盛〔名〕娘としての美
しさの盛りたる年頃。俗曲「流瀧娘」色さ
かり、娘さかりのいそいそと」

むすめ娘師〔名〕むすめ〔娘〕を見
よ。ちやちやぶり土藏破の隠語。

むすめしん娘自慢〔名〕親が、娘の容
貌を誇ること。一代女「母の親、鼻の先智
慧にて、大かたに生れつきし娘自慢、は
や、十一二より、格別に色作りなし」

むすめつよう娘節用〔名〕「書」藝妓
小三の、金五郎に對する情話を記し
たる人情本。具さには、假名文章のつや、娘
節用といふ。三篇九卷。曲山人の作。

むすめだらうじやう娘道成寺〔名〕江
戸長唄の曲の一。詞は「鐘に恨が數數ど
ざるに始まり、中」は丸山、ただ丸か
れと思ひそめたが縁ぢやえに終る。略

むすめ

して、單に道成寺ともいふ。又、詞はこれ
と同一にして、徳川時代の末に、久留米の
宮原檢校の、曲節を新にせるものに、京阪
地方にて、新娘道成寺といひ、東京にて、
錦町（やま）と呼ぶものあり。もぢぢりむ
すめだらうじやう（百千島娘道成寺）参照。

むすめばら娘腹〔名〕母と娘とを聚り
たる場合に、その娘の腹より生れしこと。
（親腹に對して）榮生「親腹の御子をば五
の宮、娘腹の御子をば、六の宮とて」

むすめぶん娘分〔名〕假りに娘と見な
すこと。仕懸文庫「昨日の娘分は、今日の
かみさんと變じ」

むすめやく娘役〔名〕俳優の娘に扮す
ること。和合「女形で娘役といふのは」

むすめれん娘連〔名〕多くの處女。娘達。
「英」Nitrous anhydride 等容の一酸化
及び二酸化窒素を混合せるもの。又は四
容の一酸化窒素と一容の酸素とを混合せ
るものを、零下二十一度に冷却する時に
生ずる、深青色の液體。三酸化砒素と硝
酸とを共に蒸溜して生じたる瓦斯を、零
下二十一度に冷却し、又は、亞硝酸曹達
を、硫酸に處理しても生ず。沸點三五度。
三酸化窒素。

むすめあひさん無水亞砒酸〔名〕〔化〕
「英」Arsinous anhydride 砒素又はその
化合物を、空氣中に熱するが、砒素を、硫
酸又は稀硝酸と共に煮沸し、蒸發、乾固す
る時に生ずる、白色、細末の結晶。天然に
も、酸化砒石として産出。八面體なる
と、單斜柱狀なるとの二形あり。比重、
後者は四、前者は三・六九。二百二十度
にて、熔融せずして昇華す。顔料、染料、防腐
藥等に用ふれども、猛毒あり。砒石、砒
礬石、三二酸化砒素。三酸化砒素。白砒。
「英」Stibious anhydride にさむわやわ
ら（二酸化硫黃）に同じ。

むすめありさん無水亞磷酸〔名〕〔化〕
「英」Phosphorous acid anhydride 磷を、
注意して、空氣の氣流を烈しく通じなが
ら熱する時に生ずる白色の粉末。水を作

むすめ

用して、亞磷酸を生ず。
むすめあるこおる無水亞爾爾保兒・無
水酒精〔名〕〔化〕純粹にして、水を含ま
ざるエチルアルコール。水を含める不純
のアルコールを、幾回も分溜して、後に、
煑製石灰を加へて、數時間放置し、蒸溜
し、更に金屬ソーヂウムを加へて、再び蒸溜
すれば得。

むすめくろさん無水格魯護酸〔名〕
〔化〕「英」Chromic acid anhydride さん
さんくわくむ（三酸化格魯護）に同じ。

むすめけいさん無水硅酸〔名〕〔化〕「英」
Silicic anhydride 水分を含まざる硅酸。
天然には、硅酸鹽として、地殻の主成分を
なす。白色の粉末をなせると、無色、透明
にして、六方柱狀をなし、又は種種著色せ
る半透明にして、粒狀又は塊狀をなせる
結晶性のものとあり。質硬く、非化水素
の外は、多くの藥品に對し、安定にして、
アルカリと煮沸する時、硅酸鹽となりて
溶解し、又、酸水素塩にのみ熔融す。硝子
の原料として用ふ。二酸化砒素しりか。
むすめさん無水醋酸〔名〕〔化〕「英」
Acetic anhydride 醋酸曹達に鹽化アセ
チルを用せしむる時に生ずる無色の液
體。刺激臭を有し、發煙せず、百三十四度
にして沸騰し、水、酒精、アンモニヤに反應
して、それぞれ醋酸、醋酸エチル、アセト
マイド及び醋酸アンモニウムを生ず。

むすめさん無水酸〔名〕〔化〕「英」Acid
anhydride さんせいさんくわく（酸性酸化
物）に同じ。

むすめさん無水硝酸〔名〕〔化〕「英」
Nitric acid anhydride 純粹の硝酸に五
酸化磷の如き強脱水劑を用せしむる時
に生ずる、白色、雪様の粉末。レトルト中
に、硝酸と共に蒸溜する時、動き易き、甚
だ振發性なる液として流出し、直ちに白
色の結晶となる。融點は三十度。甚だ不
安定にして、分解し易く、水と作用して、
硝酸を生ず。

むすめたんさん無水炭酸〔名〕〔化〕「英」
Carbonic anhydride たんさんかす（炭酸瓦
斯）に同じ。

むすめ

むすめひさん無水砒酸〔名〕〔化〕砒酸
の結晶末を強熱して得る、白色の固體。染
料として用ふ。

むすめほうさん無水硼酸〔名〕〔化〕「英」
Boric anhydride 硼素と硼酸とを空氣
中に強熱する時に生ずる、硝子様塊狀
の物。粘性を有し、種種の酸化金屬を溶
解す。マグネシウム又はアルミニウムと
共に熱する時、金屬硼素を生ず。

むすめりりさん無水スノリン〔名〕〔化〕
羊毛より採集し、精製したる無水の脂肪。
淡黄色軟膏様の塊にして、殆ど臭氣なし。
軟膏の基礎藥とす。

むすめりりさん無水硫酸〔名〕〔化〕「英」
Sulphuric anhydride さんさんくわやわ
ら（三酸化硫黃）に同じ。

むすめりりさん無水磷酸〔名〕〔化〕「英」
Phosphoric anhydride 磷を、空氣中又は
酸素中に熱して得る、白色無定形の、
輕き粉末。水に觸るる時は、磷酸を生ず。
潮解しやすく、乾燥劑として實用す。

むすめをれむす折〔名〕力を用ひずして、
折ることを。腕く折ること。小町斷む
ず折の心の松や雪の枝」

むせい無聲〔名〕聲の無きこと。聲の
聞えぬこと。無聲（むせい）。「よ。
無聲に聴く」〔句〕「無形に視る」を見
無聲の詩〔句〕繪畫の異稱。無韻の詩。
（有聲の畫に對して）

むせい無性〔名〕「生」雌雄の性のなき
こと。下等の生物などにより。

むせい無稅〔名〕稅をかけぬこと。租
稅を徵收せられぬこと。免稅。「せい。
むせい」無勢〔名〕人數の少なきこと。ぶ
むせいおん無聲音〔名〕「語」〔英〕Voice-
less sound 聲帶の振動を伴はずして、發
する音聲。聲を帯びず、單に口腔の諸器
官の活動のみによりて起る聲音。東洋古
來の韻學にて、清音と呼べるは、略、これ
と一致すれど、五十音圖中のや行・ら行の
子音の如きは、無聲音に非ず。（有聲音に
對して）

むせいから無稅港〔名〕「港」に同じ。

むせんで

して、受信装置の鑽石檢波器に感應し、電鍵を押す時間の長短により、電波持續の時間にも、長短の別を生ずるを、電話の受話器を用ひ、音響によりて受信す。もとは、コヒラを受信装置の主要部とし、普通の電信の受信機によりて、受信したり、研究國にては、明治三十年より、逓信省にて研究を開始し、種種の改良を加へ、海軍省も、又、研究を重ねて、明治三十七八年の日露戦役に偉効を奏するを得、同四十一年より、公衆の陸上と海上との通信用にも供するに至り。

むせんでんじんき 無線電信機(名)〔理〕無線電信の發信及び受信に要する装置。
むせんでんじんききよく 無線電信局(名)通信管署の一。無線電信の傳送を管掌する役所。

むせんでんじんききよく 無線電信局(名)無線電信の事務を取り扱ふ官署。

むせんでんじんき 無線電信法(名)無線電信及び無線電信の管掌施設。許可、罰則等を規定する法律。大正四年六月公布、同年十一月施行。二十八條より成る。
むせんでんじんき 無線電報(名)無線電信に依りて傳送する電報。

むせんでんじんき 無線電話(名)〔理〕「英 Wireless telephony」又「Telephony without wire」。

むせんでんじんき 無線電話機(名)〔理〕無線電話の送話及び受話に要する装置。
むせんでんじんき 無線旅行(名)旅行費を所持せずして旅行すること。
むせんでんじんき 嘔せる・嘔咽せる〔動下〕「自」むす(嘔す)の訛。増補下集嘔哽

むそ

鳴、ムス・ムセル」
むそ六十【數】ろくじふ(六十)に同じ。〔古語〕

むそく 夢窓(名)「人」そせき(疎石)に同じ。無足(名)「料足の無き義」。

むそく 無足(名)「料足の無き義」。

むそく 無足(名)「料足の無き義」。

むそく 無足(名)「料足の無き義」。

むそく 無足(名)「料足の無き義」。

むそく 無足(名)「料足の無き義」。

むそく 無足(名)「料足の無き義」。

むだ

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むだ 無駄、徒(名)「無駄は假借の字」。

むちまじ

むちまじだか 無地増高(名)居檢地(名)により、反別を改むることなく、その高と年貢とのみを増して、本高に加算したる高。

むちむすび 鞭結(名)緒の結び方の一。

むちん 無賃(名)賃金を拂はぬこと、又それを拂ふを要せぬこと。

むちんじようじや 無賃乗車(名)無賃にて乗車すること。

むちんじようじやきつ 無賃乗車切符(名)所有者は、無賃乗車をなし得る切符。

むちんじようじやけん 無賃乗車券(名)むちんじようせん 無賃乗船(名)無賃にて乗船すること。

むちんじようせんきつ 無賃乗船切符(名)所有者は、無賃乗船をなし得る切符。

むちんてにもつ 無賃手荷物(名)汽車にて、乗客一人につき、何斤までと、目方に制限を設けて、無賃にて預り送達する手荷物。

むちめ 鞭目(名)鞭にて打ちたる疵の痕。平義朝……持ちたる鞭を以て、信頼の弓手(名)の頬先をしたたかに打たれけり。信頼……誠に應じたる體にて、顔に鞭目を押し撫で、押し撫でせられける。

むちや 無茶(名)物事又は行爲の、筋道の立たぬさま。むちや。むちやくちや。むちや。むちやくちや。めちやくちや。むやみ。亂雑。亂暴。

むちやう 無腸(名)臍力なく、又は節操なきこと。田秋成を見よ。

むちやう 無腸(名)人うへだあきなり(上)むちやうえきじう 無定役因(名)法定役に服せぬ因徒(名)定役因に對して。

むちやうかん 無腸漢(名)臍力なく、又は節操なき男。

むちやうこうし 無腸公子(名)抱朴子に「山中稱無腸公子者蟹也」とあり(蟹)の異稱。

むちやく

むちやく 無著(名)佛執著無きこと。諸曲集傳「無著法慈心」。

むちやく 無著(名)人梵 Asaṃgī(阿僧伽、阿僧伽の譯)佛滅後一千年代(西曆第四世紀)の北印度健駄羅國の人。初、小乘化地(名)部を奉ぜしが、後、中印度阿踰闍(名)國にて、彌勒(名)菩薩の指導を受け、瑜伽師地論(名)百卷を著し、大乘教中の一大新佛教たる瑜伽宗を開創す。寂所、寂年共に詳かならず。一説には七十五歳にて、王舍城に逝けり。著す所、瑜伽師地論の外、大乘莊嚴論十卷、十地論等あり。又、弟に世親、舊譯には天親あり、無著の學を傳へて擴張せり。支那唐の杭州の僧。名は文喜。七歳にして出家し、律を習ひ、教を聴く。宣宗の初、天台山に至りて、文殊(名)を禮し、懿宗の咸通三年、洪州の觀音院に至りて、仰山の寂禪師に參し、頓に心要を悟る。光化三年寂す。壽八十。

むちやくせんじ 無著禪師(名)人前條の敬稱。

むちやくちや 無茶苦茶(名)むちやくちや(無茶無茶)に同じ。榮樸樣茶背問答我も、むちやくちやと山家(名)屋へ行くはいやさうなれど。

むちやくてんじんじう 無著天親宗(名)佛ほっさうじう(法相宗)に同じ。

むちやくくぼさつ 無著菩薩(名)人むちやく(無著)の敬稱。

むちやくりく 無著陸(名)飛行機が、目的地に到着するまでの間、少しも著陸せぬこと。

むちやくすけ 無茶助(名)無茶なる振舞をなす人、又その振舞を人名に擬していふ語。浮世風情植附がいっ頃で、刈時がいっつだといふ事も、むちやく助さ。

むちやくつく 動四他(名)もつれ起る。紛擾生ず。春花五大功、その二三日が、むちやくかうと思つてから。

むちやくむちや 無茶無茶(名)むちやく(無茶)を重ね、その意味を強めていふ語。むちやくちや。

むちゆう

むちゆう 霧中(名)霧の立ちわたれる中。きりのなか。

むちゆう 夢中(名)夢を見てゐる中。夢裡。自覺を失ふほどに熱中すること。我を忘るること。有頂天(名)。

むちゆう 無住(名)佛住止することなきこと。寺院の、住持の無きこと。

むちゆう 無住(名)人にいへん(圓)むちゆうかうかく 霧中號角(名)英「foghorn」霧中信號の一。艦船の、汽力を用ひずして發音せしむるもの。

むちゆうさくさきもん 夢中作左衛門(名)むちゆう(夢中)を人名に擬していふ語。藤原毛彌次郎も、一向に夢中作左衛門なり。

むちゆうさきもん 夢中左衛門(名)前條むちゆううじ 無住寺(名)無住の寺。

むちゆううじんかう 霧中信號(名)英「fog signal」霧その他、展望の妨ある天候の際、航行中の船舶又は燈臺・燈船などが、附近航行中の船舶に對し、衝突・擱坐等の災害を避けるために、晝夜の別なく、規定の音響を發すること。船舶のは、汽笛・霧中號角を用ひ、燈臺・燈船等のは、霧笛・霧砲・爆發信號等を用ひて行ふ。霧警號。

むちり 貌むつりに同じ。

むちりむちり 前條の語を重ね、その意を強めていふ語。

むつ 六(名)昔の時刻の一。今の午前六時及び午後六時。前者は明六(名)、後者は暮六(名)といふ。むつどき。

むつ 鱈(名)鱈は、支那にては、形、牛頭の如しといふ一種の魚の名なるを、我國にては、むつ鱈の語に充てて用ふるは、むつ鱈と字形の似たるがためなるべし。硬骨類に屬する魚類。體は、鱈(名)に似て、やや小く、大なるは二尺に達し、楕狀の薄き鱗を被る。眼大きく、下顎少しく前出す。背

むつ 陸奥(名)地陸奥(名)の國の義にて、みちのくに(陸奥)といひしもの、轉じて「むつ」の國となりしより出づ。みちのくに(陸奥)に同じ。東山道十三箇國の一。前項の陸奥を、明治元年中五箇國に分ちしもの。青森・弘前・二市及び東津輕・西津輕・中津輕・南津輕・北津輕・上北(名)下北三月(名)二月(名)の九郡に分れ、二月のみは巖手縣に、その他は青森縣の管轄に屬す。

むつ 六(名)五つより一つ多き數。むつ。ろく。年齡六歲。むつ。六つの巷(名)六つの道に同じ。心中二枚箱紅紙冥土は六つの巷ぞや。

六つの塵(名)佛ろくちん(六塵)の直譯。新義六つの塵通く照らすあたりこそ三世に常なる悟なりけれ。

六つの府(名)佛ろくちん(六衛府)に同じ。年中行事散金御酒賜ふ今日のためとやあやめ草むつのつかさもかねて引くらん。

六つの根(名)佛ろくこん(六根)の直譯。散金集九つの子の聲遠く聞ゆなり(名)わが六つの根の罪や消ゆらん。

六つの花(名)佛ろくくわ(六花)の直譯。藏玉集冬風に吹かれて吹かんむつの花手折る袖にも雪のかかれる。

六つの道(名)佛ろくだう(六道)の直譯。赤染衛門集めぐりけん程ぞ悲しきおくれではひとりやむつの道に惑ひし。



むつ

部は紫黑色を呈し、腹部は灰白色を帶ぶ。八十尺以上の深海の岩礁の間に棲み、我國、附近にては、太平洋面の北東に多く、一二月頃、淺所に來りて、産卵す。肉は、味美ならず。脂は、燈油の料に供す。ろくのうを「鱈花餅」かほむつ(川鱈に同じ)。

むつ 陸奥(名)地陸奥(名)の國の義にて、みちのくに(陸奥)といひしもの、轉じて「むつ」の國となりしより出づ。みちのくに(陸奥)に同じ。東山道十三箇國の一。前項の陸奥を、明治元年中五箇國に分ちしもの。青森・弘前・二市及び東津輕・西津輕・中津輕・南津輕・北津輕・上北(名)下北三月(名)二月(名)の九郡に分れ、二月のみは巖手縣に、その他は青森縣の管轄に屬す。

むつ 六(名)五つより一つ多き數。むつ。ろく。年齡六歲。むつ。六つの巷(名)六つの道に同じ。心中二枚箱紅紙冥土は六つの巷ぞや。

六つの塵(名)佛ろくちん(六塵)の直譯。新義六つの塵通く照らすあたりこそ三世に常なる悟なりけれ。

六つの府(名)佛ろくちん(六衛府)に同じ。年中行事散金御酒賜ふ今日のためとやあやめ草むつのつかさもかねて引くらん。

六つの根(名)佛ろくこん(六根)の直譯。散金集九つの子の聲遠く聞ゆなり(名)わが六つの根の罪や消ゆらん。

六つの花(名)佛ろくくわ(六花)の直譯。藏玉集冬風に吹かれて吹かんむつの花手折る袖にも雪のかかれる。

六つの道(名)佛ろくだう(六道)の直譯。赤染衛門集めぐりけん程ぞ悲しきおくれではひとりやむつの道に惑ひし。

六つの指(名)佛ろくへん(六指)に同じ。下野集群舞、ムツノユビ・ムツノユビ。

六つの輪(名)佛ろくりん(六道の輪廻)に同じ。

新勸業「六つの輪」を離れて三世(三)の佛にはただこの杖にかかりてぞなる」六つの渡(り)。「句」(佛)「六つの道」に同じ。拾玉簪小舟のりの心を知りぬれば六つの渡も迎れぬかな」六つの緒(句)「やまごさ(大和琴)」の異稱。六帖むつの緒のより目ごとにとぞ香(さ)はにほふ彈くをため子が袖や觸れつる」

むつ【貌】瘡にさはりて、黙したるまふく返るさま。夢太「むつとして戻れば門(の)柳かな」一面に惡臭く、又はむし暑き氣の満つるさま。續猿蓑「立寄ればむつと鍛冶屋の暑きかな」

むつ【および】六指(名)むつゆび(六指に同じ。「古語」和名「辨振、無豆於典非」むつ【貌】「むかむか及びむかを見よ」急に心に湧き起る感じ。猿蓑合戰「むつと道心起りて」

むつ【かひ】形二心はれやかならず。氣が詰るやうなり。うるさし。面倒なり。鬱陶し。おそろし。土佐船のむつかしさに、船より、人の家に移る」枕「龍膽(び)は、枝ざしなどもむつかしげなれど」

むつ【理解し、又は望を達すること困難なり。思ふがままにならず。目「取り扱ふに困難なる義にていふ」理窟多くして、氣難ならず。苦情多くして、人づき惡し。氣むづかし。病氣重くして、快復困難なり。

むづ【かひ】形二前條に同じ。前條に同じ。俗れれ「都は人の附き合もむづかし」前條に同じ。和合人「とてもむづかしからうと醫者も申します」

むづ【かひ】やむづかし家(名)理窟多くして、氣難ならぬ人。氣むづかしや。むづ【かひ】陸語(名)陸しく語りあふこと。むつものがたりなど語らひかはいつつ」

むつ【かまじき】六釜敷(名)紋所の一。大なる輪を中心とし、その周圍に六箇の輪

を互に入違に並べたるもの。

むつ【からほな】六唐花(名)紋所の一。六舞の唐花を描きたるもの。

むつ【かり】慣(名)むつかること。むつかり慣(名)前條の轉。丹羽與作「どうでもないやちやとおむつかり」

むつ【かる】慣(動四自)氣はれやかならずして、怒る。心鬱して、いきどほる。むつ。ふづ。起憤、ムツカリタマフ

むつ【小兒、ぢれて泣く。】

むつ【ある】慣(動四自)前條の轉。傾城反魂香「有るべき道具の足らぬのは、ひよんな物として、おむつかる」

むつ【き】襦袢(名)うぶき(座衣)に同じ。和名「襦袢、无豆岐」伊勢集「正月一日、子生みたる人に、むつき遺すとして」しめし(襦)に同じ。佛蘭新選周本「夕顔や雞も一二羽襦袢散る」目(ふんどし)に同じ。襦袢の内(句)「襦袢(ふんどし)の内に同じ。襦袢その御腹の若君の、二つになりたまふを、むつきの中の御ありさまは、只、形代(かたしろ)などを祝ひたらんやうにて」太平記「武士の家に生れし人、むつきの内より、斯かる事あるべしと思ひ召し知らぬこそ、うたてけれ」

むつ【き】陸月・正月(名)陰曆正月の異稱。紀「正月、ムツキ」玉葉「もろ聲に鳴くべきものを、はむつきともまだ知らずやあるらん」

むつ【き】きだめ 襦袢定(名)生兒のため、むつきを用意しおくこと。胸算用「今日生つて、生れぬ先のむつききだめ、乳母を連れてくるやら」

むつ【く】慣(動下二自)むつかる(慣る)に同じ。「古語」夫木、おのづから手枕はづし寝直ればわれ思はずに妹むつけたり」

むつ【く】むくの音便。百合若大臣野寺鶴百合若、むつくと起き上り」

むつ【くり】貌 前條に同じ。浮世風呂朝むつくり起きと」むむむに同じ。重帷子「裸身を、むつくりと抱いて寝たい」

むつ【くり】おきむつくり起(名)むくおき(むく起)に同じ。

むつ【ど】むつ蠶(名)蠶の繭を作らず、復蟄(ふたご)の如くになれるもの。

むつ【ど】陸言(名)陸しく語りあふこと。又その話。むつがたり。むつこととは。源氏「かかるついでには、各むつ言も、え忍びとどめずなんありける」曾我「まだ陸言のつきなく、きぬきぬになる曉の涙に」

むつ【ど】は陸言葉(名)前條に同じ。新編古今「むつ言の葉も言ひつくし」

むつ【ど】らう(名)「動三自」の一品種。體は圓筒状にて、長さ三四寸に達し、背面は青黒色、腹面は淡色を呈し、肉味美なり。筑後國柳河(の)の名産。

むつ【さ】貌 むさの音便。

むつ【さ】貌 ぶさに同じ。謂鳥年代記「松原、むつさと生え茂ったが」

むつ【た】貌 むさに同じ。

むつ【た】六田(名)「地」むた(六田)の古稱。萬葉集「鳴く六田の川の川楊のねもごろ見れどあかね君か」

むつ【た】陸魂(名)陸しき魂。なつかしむ心。「古語」

陸魂合ふ(句)なつかしむ心に叶ふ。「古語」萬葉大君の陸魂合、や豐國の鏡の山を宮と定むる」

むつ【ち】蟲虫(名)む(蟲)を云ふ。「幼むつち、無茶(貌)むちや(無茶)の音便。麗聲笑「兼平の御最後は、むつちやとならせたまひけり」

むつ【ちやくちやく】無茶苦茶(貌)むちやくち(無茶苦茶)の音便。

むつ【ちり】貌 むつくりと肥えて、愛らしきさま。生玉心甲「前のやうに、むつちりと肥えてか。嘉永次が吸ひ取ったか」

むつ【つぎん】六頭巾(名)紋所の一。六角の頭巾を、六角形に描きたるもの。

有吻類に屬する昆蟲。浮塵子(の)の一種。體は、長さ一分ほどにて、黄綠色を呈し、前頭に四箇乃至六箇の黒點あり。

むつ【ど】がほむつと顔(名)瘡にさはりて、黙したるまふく返りたる顔つき。新服歌集「疑晴られさせと寄抄するほど、むつと顔」

むつ【ど】き 六時(名)むつ(六)に同じ。むつ【ど】の陸奥殿(名)陸奥守伊達侯の敬稱。續佛乘宗人談略「陸奥殿の涼臺(の)なり千松島(の)」

むつ【ばあね】六葉茜(名)「植」せいやうあかね(西洋茜)に同じ。

むつ【び】陸呢(名)むつぶること。したしみ、親陸。和「好、ムツビヲ」源氏朝夕のむつびをかはさんには」

むつ【び】き 陸月(名)むつき(陸月)に同じ。諸曲常陸常「人も我もむつび月の、袖觸れて寄り來(よ)」

むつ【び】のつき 陸月(名)前條に同じ。むつ【ぶ】陸ぶ呢が囁ぶ(動上二自)むつましくす。親しくす。したしむ。むつむつる。むつましむ。源氏和親、エギビムツアルコト」源氏姫君の御あたりをむつびて、ここには來(くる)なりけり」

むつ【ふち】六藤(名)紋所の一。藤の花六房を圓形に描き、その中央に、花一箇を容れたるもの。

むつ【ふか】睦か(貌)むつまやか(睦やか)に同じ。「古語」綿綿、ムツマカニ」

むつ【ふし】睦し呢し睦し(形二)むつみとあり。親密なり。したし。源氏御にも、むつましき限しておはしましぬ」榮花(疎)さむつましきさ」

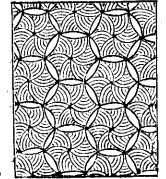
睦しき中に垣をせよ(句)「親しき中に垣をせよ」に同じ。「諺語」

むつ【まじ】睦じ「形二むつまじ(睦し)の轉。むつ【まじ】き 陸月(名)むつき(陸月)に同じ。俗言「春道中雙々」あが「一座の裏馴染、陸月の名れもまし」

むつ【まじむ】睦しむ(動四自)むつ(睦ぶ)に同じ。「古語」紀「朕所ニ交親、百濟國者、ワガムツマシムクダラノクニハ」

むづま

むづまはりせいがい 六廻青海(名)様模
の。一、各方面の異
なる青海波六つ
を、次第に重ね、
周縁は、六角形を
なすもの。



(海青廻六)

むづまやか陸や
か(名)むづましきさま。むづまか。字
鏡「綱鑑、太志加爾、又、牟豆末也加爾」

むづ睦む。昵む。睦む(動四自)むづ
(睦ぶ)に同じ。「古語」字鏡、親近也、
……牟豆率」

むづむさむ 六六指(名)六箇の駒を用
ひてする六指。にさ。一代女「子供相手
に六つむさし」

むづむみつ 陸奥宗光(名)「八」外交
家。伯爵。舊和歌山藩士。初め伊達陽之
助と稱す。外務大臣となり、日英條約改
正及び日清戦役に功あり。明治二十九年
歿す。年五十四。

むづめゆ 六目結(名)紋所の一。細き
輪の中に、目結を、三箇づつ二列にし、右
方を高く斜に描きたるもの。豊臣秀吉の
臣堀尾氏、これを用ひたり。なほ、形はこ
れに似て、目結の数の異なるものに、十二
目結、十六目結もあり。

むづものがたり 睦物語(名)むづがたり
(睦語)に同じ。源氏何に、かかるむづ物
語をしける。

むづやぐるま 六矢車(名)紋所の一。六
本の矢を描きたる矢車。

むづゆび 六指。拊指(名)片手の指の數
の一。本多きかたは、むづおよび。へん
ぽ。下學集、拊指、ムツノユビ・ムツユビ

むづら六浦(名)「地」次條を見よ。「六
連」曲曲の一。武藏國六浦の稱名寺
(今は金澤村)に屬すに青葉の楓ありて
初、藤原爲相(彩)の、この地に紅葉を見に
來りし時、この木のみ、他の木に先だちて
紅葉せるを見て、「いかにしてこの一もと
にしぐれけん山に先だつ庭ののみち葉」
と詠ぜしに感じて、爾來、全く紅葉せざる
に至りしが、法華經の功德によりて、成佛

する由を作れるもの。目明治の初年設
置の縣の一。四年七月、相模國舊六浦藩
(金澤藩の改稱)の地に立てしもの。同年
十一月に至り、元年九月設置の神奈川縣
に合し、神奈川縣は相模國三浦鎌倉の二
郡と武藏國橘樹(橘)久良岐(都筑)の三
郡及び多摩郡の一部とを管し、九年四月、
足柄嶺の廢止と共に、相模全國、神奈川縣
に入り、今日に至れり。

むづらのじやう 六浦莊(名)「地」武藏國
久良岐(橘)郡の村。郡の極南、同郡金澤
村の西に位し、相模國三浦鎌倉の兩郡に
接す。もと莊名にして、廣く金澤よりは、東
方(橘)に亘り、鎌倉幕府の盛時には、東
方の埠頭たりき。江戸幕府時代には、米
倉氏この地に封ぜられて、金澤藩(後、六
浦藩)と呼ばれり。

むづらぼし 六連星(名)「すばるぼし(昴星)
を云ふ。「江戸の語」

むづる睦る。昵る。睦る(動下二自)むづ
る睦ぶに同じ。源氏、露の囁る春は昔に
てむづれし花の陰ぞかはれる」一代女
は、好(さ)けるやうにむづれ」

むづれじま 六連島(名)「地」もつりしま
(没利島)の轉訛。長門國豐浦(分)郡彦島
村の屬島。彦島の西北下關(分)海峡小
瀬戸の西北一海里半に位し、方八里許、四
邊、岩礁多くして、舟行危險。島の東北部
に、第四等不動白色の燈臺あり、下關海峡
に入る船舶の望標たり。

むづらん 陸奥灣(名)「地」陸奥國の北
部、即ち津輕海峡の南側にある灣。斗南
(津輕)の兩半島、東西に出て、これ
を扼し、灣面廣闊、南部より小湊半島突出
して、野邊地(分)青森の二小灣に分る。
各條を見よ。

むづわり 六割(名)「六つに等分する
こと、又その容積。斗斗樽のを六つに
分けたるだけの、酒の量、又その量を容
る酒樽。

むづわくわう 無對光(名)「佛」諸佛の
光明も、これに對立する能はざる義「十
二光の一」。

むづら

むづら

むづら

むづわくわうぶつ 無對光佛(名)「佛」
「無對光の德を具(たり)といふ」あみだ
ぶつ(阿彌陀佛)の異稱。

むづをれむづ折(名)むづと折るこ
と。「強木」はむづ折、柳に雪折
無し」

むづをれぐさ 六折草(名)「植」禾本
の、科に屬する草。淡水又はその邊に自生
し、茎と葉とは、平滑にして、紅色を帶ぶ。
水中に生ずるものは、水面に臥して、節より
根を生ずるを常とす。疎なる根を生じ、
長楕圓形の、やや大なる實を結ぶ。むぎ
から。むぎからぐさ。

むづ無手(名)「からて(空手)に同じ。
少し腕まへの無きこと。甲陽軍鑑「十
人の中に一人弱き者あれども、……、と
かくとして、むてなるは、さのみなし」
思慮もめぐらさず、手段も考へずして
振舞ふこと。源世風呂(眞)の拳(分)とい
ふものは、一(分)二(分)三(分)四(分)
五(分)六(分)七(分)八(分)九(分)といふ
ものだ。……無手と十(分)は打つも
んぢやあねえ」

むづいから 無抵抗(名)「英 Non-resis-
tance、ほうじ(奉仕)と共に、もと新約全
書(馬太)傳第五章第三十九節より第
四十二節にかけて、惡に敵すること勿
れ。人、汝の右の頬を批(く)たば、又、他の
頬を轉(か)らして、これに向けよなどあ
るをいへる語」苦痛、壓迫等に對して、不
平、復讐心等を發せず、これに服從して、
精神上の報酬に安んずること。

むづいからいけむき 無抵抗主義(名)「英
Non-resistance、rinohin)暴力によりて
迫害せらるる場合に、抵抗せず、憎惡の
心をも懷かざる主義。露國の文豪トルス
タイ(Tolstoy)が、その著書「わが宗教」の
中に唱導せるものに係る。

むづいかほじやうじやうけん 無定價保
證證券(名)「商」よていけんじやうけん(豫
定保險證券)に同じ。

むづいけい 無定形(名)「一定の形を
具へぬこと。日化「英 Amorphous」固
體が、一定の結晶狀をなさぬこと。

むづいけいたんそ 無定形炭素(名)「化」
「英 Amorphous carbon」結晶狀を呈せ
ざる炭素、即ち石炭、木炭、油煙など。

むづいけん 無定見(名)「一定見の無きこ
と。一定の見識を有せぬこと。

むづいけん 無定字(名)「目」に一字無
しを見よ。あきめくろ。無字碑。青貫。
むづいたう 無抵當(名)金の貸借など
に、抵當品を授受せぬこと。

むづいおじん 無定位針(名)「理」「英
Astatic needle」強き相等しき二本の磁針
を、極(分)の S
位置は相反
するやうに、
上下に平行
せしめて、兩
者の中央點
を、細き棒に
て固著せし
めたるもの。M. S.
その棒の上端を線にて吊れば、その磁針
が受くる地球の磁力は相殺せらるるがた
めに、針端を何れの方向にも向はしむる
を得。

むづいおんりうけい 無定位電流計
「理」「英 Astatic galvanometer」無定
位針を用ひたる電流計。磁針が地磁力の
作用を受けざるために、感受力甚だ鋭し、
むづうかこう 無潮河口(名)「地」土砂、
漸次に沈澱して、砂洲絶えず増進し、河水
はその砂洲中を迂餘分派し、海潮の流れ
難き狀態の河口。(有潮河口に對して)

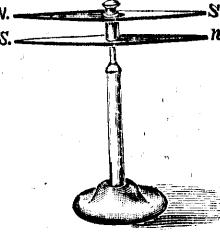
むづうけん 無條件(名)少しも條件を
伴はぬこと。條件附(分)ならぬこと。無
制約。絶對。

むづうけんてき 無條件的(名)「哲」「獨
Diebing」ぜたいてき(絶對的)に同じ。

むづうやく 無條約(名)或國家と或國
家との間に、條約の存せぬこと。

むづうやくてく 無條約國(名)或國家
との間に、條約を締結してあらぬ國家。無
條約の關係に在る國。

むづえ 無體(名)むだ(無代)の訛。和



(んしいるてむ)

合人といつあててえ、平氣なものだ」
むてかづりう 無手勝流【名】『塚原ト傳傳て琵琶湖上の矢走(きやう)の渡船の中に、一人の武者修行者より眞鍮勝負を挑まれし時、欺きて、これを、唐崎(からき)の小洲に上らしたる後、直ちに船を漕ぎ返して、戦はずして勝つ、無手勝流なりと稱し、その血氣の勇を戒めし事蹟に本づく』ほくろんりう(ト傳流)の異稱。
むてき 霧笛【名】霧中信號の一。燈臺、燈船などにて、笛を鳴らすもの、又その笛。
むてき 無敵【名】敵對する者なきこと。
むてき かんた 無敵艦隊【名】『英』Vincible Armada 西班牙國にて、フィリッ(Philp)第二世の代に、全歐洲に雄飛せし、その大艦隊の俗稱。西曆一五八八年、英國艦隊に撃破せられ、次いで、暴風に遇ひて覆滅せり。西班牙國の勢威衰へ、英國、これに代りて、海上に雄飛するに至りしもの、實にこの勝敗に起因す。

むてき じんぴはう 無敵神飛砲【名】昔の大砲の、重さ千餘斤なりしもの。羅山文藝鐵砲……其重千斤餘者、曰無敵神飛砲。
むてき 無手際【名】ふてぎは(不手際)に同じ。甲開軍艦、この月石合戦、信玄公の御代に、(一)の無手際なる合戦なり。
むてき 無敵【名】次條に同じ。本朝二十四考、無法無敵をしにせにて、名も横藏の筋街道。
むてき ばう 無敵砲【名】次條の註。
むてき ばう 無手法【名】感情の激發に任せ、前後を顧みずに行ふこと。無法。
むてん 無點【名】『漢文の、訓點を施してあらぬこと、又その漢文。白文。細楷』も得點の無きこと。零點。
むてん 無電【名】むてんしん(無線電信)又はむてんてん(無線電話)の略。(俚語)
むてん ぼん 無點本【名】無點の漢籍、素本(すほん)。(點本に對して)
むてん 無燈【名】夜間、燈火を點せぬこと。

むどう 無動【名】(佛)『心の散亂せぬこと。禪定(ぜんじやう)によりて、妄想の發生せぬこと。不動。』ふどう(不動)に同じ。
むどう 不動寺【名】比叡山中の東塔の南、谷を隔てて、數町の外にある、延暦寺所屬の寺。貞觀七年、相應和尚の創建に係る。三塔以外に屬し、琵琶湖を見下して、眺望、甚だ佳なり。榮花(えいけ)山に、無動寺といふ所に、夜の中におはしにけり。
むどう せん 無動尊【名】(佛)ふどうせん(不動尊)に同じ。
むどう ほう 無投票【名】投票をせぬこと。
むどう ほう 無投票當選【名】議員選舉に於て、或選舉區内の届け出たる候補者の數、選舉すべき議員の定數を超えず、選舉區民も、これを默認する場合には、その選舉區にては、投票を行はずして、その候補者を、直ちに當選人と定むること。大正十四年改正公布の衆議院議員選舉法にて設定せられし制度にて、この場合、選舉長は、直ちに、その旨を、投票管理者に通知し、併せて、これを告示し、且つ地方長官に報告し、その通知を受けたる投票管理者は、直ちに、その旨を告示し、又、選舉長は、選舉の期日より五日以内に選舉會を開き、選舉立會人の意見を聽きて、候補者の被選舉權の有無を定めたる上、その候補者を當選人と定む。
むとく 無徳【名】『徳の缺けてあること』立派なりし物事の、見劣(みおと)するに至ること。有る甲斐なきこと。形無分(かたちな)分。世に「むとくなるもの、潮干の湯(うし)なる、大きな船、髪短き人の、髪とひりおろして髪けづるほど」源氏、御けはひにおされて、皆人、むとくに物したまふるを。」
むとく 無毒【名】毒の無きこと。毒分を合みてあらぬこと。(有毒に對して)
むとく 心得心【名】『心得心せぬこと。不得心。不承知。』いかに言ひ聞かせても得心せぬ義「非道。無理。五十年忌念佛(ごじゅうねんぎねんぶつ)あまりといへば、親ながら、無得心なる御心や」源平和親(げんへいわしん)ええ、無得心の平次、いかに忠義ちやとて、自狀せねば、締め殺すとは」

むとく 無徳【名】『徳の缺けてあること』立派なりし物事の、見劣(みおと)するに至ること。有る甲斐なきこと。形無分(かたちな)分。世に「むとくなるもの、潮干の湯(うし)なる、大きな船、髪短き人の、髪とひりおろして髪けづるほど」源氏、御けはひにおされて、皆人、むとくに物したまふるを。」
むとく 無毒【名】毒の無きこと。毒分を合みてあらぬこと。(有毒に對して)
むとく 心得心【名】『心得心せぬこと。不得心。不承知。』いかに言ひ聞かせても得心せぬ義「非道。無理。五十年忌念佛(ごじゅうねんぎねんぶつ)あまりといへば、親ながら、無得心なる御心や」源平和親(げんへいわしん)ええ、無得心の平次、いかに忠義ちやとて、自狀せねば、締め殺すとは」

むとく 無徳【名】『徳の缺けてあること』立派なりし物事の、見劣(みおと)するに至ること。有る甲斐なきこと。形無分(かたちな)分。世に「むとくなるもの、潮干の湯(うし)なる、大きな船、髪短き人の、髪とひりおろして髪けづるほど」源氏、御けはひにおされて、皆人、むとくに物したまふるを。」
むとく 無毒【名】毒の無きこと。毒分を合みてあらぬこと。(有毒に對して)
むとく 心得心【名】『心得心せぬこと。不得心。不承知。』いかに言ひ聞かせても得心せぬ義「非道。無理。五十年忌念佛(ごじゅうねんぎねんぶつ)あまりといへば、親ながら、無得心なる御心や」源平和親(げんへいわしん)ええ、無得心の平次、いかに忠義ちやとて、自狀せねば、締め殺すとは」

むとく 無徳【名】『徳の缺けてあること』立派なりし物事の、見劣(みおと)するに至ること。有る甲斐なきこと。形無分(かたちな)分。世に「むとくなるもの、潮干の湯(うし)なる、大きな船、髪短き人の、髪とひりおろして髪けづるほど」源氏、御けはひにおされて、皆人、むとくに物したまふるを。」
むとく 無毒【名】毒の無きこと。毒分を合みてあらぬこと。(有毒に對して)
むとく 心得心【名】『心得心せぬこと。不得心。不承知。』いかに言ひ聞かせても得心せぬ義「非道。無理。五十年忌念佛(ごじゅうねんぎねんぶつ)あまりといへば、親ながら、無得心なる御心や」源平和親(げんへいわしん)ええ、無得心の平次、いかに忠義ちやとて、自狀せねば、締め殺すとは」

むとく 無徳【名】『徳の缺けてあること』立派なりし物事の、見劣(みおと)するに至ること。有る甲斐なきこと。形無分(かたちな)分。世に「むとくなるもの、潮干の湯(うし)なる、大きな船、髪短き人の、髪とひりおろして髪けづるほど」源氏、御けはひにおされて、皆人、むとくに物したまふるを。」
むとく 無毒【名】毒の無きこと。毒分を合みてあらぬこと。(有毒に對して)
むとく 心得心【名】『心得心せぬこと。不得心。不承知。』いかに言ひ聞かせても得心せぬ義「非道。無理。五十年忌念佛(ごじゅうねんぎねんぶつ)あまりといへば、親ながら、無得心なる御心や」源平和親(げんへいわしん)ええ、無得心の平次、いかに忠義ちやとて、自狀せねば、締め殺すとは」

むとく 無徳【名】『徳の缺けてあること』立派なりし物事の、見劣(みおと)するに至ること。有る甲斐なきこと。形無分(かたちな)分。世に「むとくなるもの、潮干の湯(うし)なる、大きな船、髪短き人の、髪とひりおろして髪けづるほど」源氏、御けはひにおされて、皆人、むとくに物したまふるを。」
むとく 無毒【名】毒の無きこと。毒分を合みてあらぬこと。(有毒に對して)
むとく 心得心【名】『心得心せぬこと。不得心。不承知。』いかに言ひ聞かせても得心せぬ義「非道。無理。五十年忌念佛(ごじゅうねんぎねんぶつ)あまりといへば、親ながら、無得心なる御心や」源平和親(げんへいわしん)ええ、無得心の平次、いかに忠義ちやとて、自狀せねば、締め殺すとは」

むとく 無徳【名】『徳の缺けてあること』立派なりし物事の、見劣(みおと)するに至ること。有る甲斐なきこと。形無分(かたちな)分。世に「むとくなるもの、潮干の湯(うし)なる、大きな船、髪短き人の、髪とひりおろして髪けづるほど」源氏、御けはひにおされて、皆人、むとくに物したまふるを。」
むとく 無毒【名】毒の無きこと。毒分を合みてあらぬこと。(有毒に對して)
むとく 心得心【名】『心得心せぬこと。不得心。不承知。』いかに言ひ聞かせても得心せぬ義「非道。無理。五十年忌念佛(ごじゅうねんぎねんぶつ)あまりといへば、親ながら、無得心なる御心や」源平和親(げんへいわしん)ええ、無得心の平次、いかに忠義ちやとて、自狀せねば、締め殺すとは」

むとく 無徳【名】『徳の缺けてあること』立派なりし物事の、見劣(みおと)するに至ること。有る甲斐なきこと。形無分(かたちな)分。世に「むとくなるもの、潮干の湯(うし)なる、大きな船、髪短き人の、髪とひりおろして髪けづるほど」源氏、御けはひにおされて、皆人、むとくに物したまふるを。」
むとく 無毒【名】毒の無きこと。毒分を合みてあらぬこと。(有毒に對して)
むとく 心得心【名】『心得心せぬこと。不得心。不承知。』いかに言ひ聞かせても得心せぬ義「非道。無理。五十年忌念佛(ごじゅうねんぎねんぶつ)あまりといへば、親ながら、無得心なる御心や」源平和親(げんへいわしん)ええ、無得心の平次、いかに忠義ちやとて、自狀せねば、締め殺すとは」

むとく 無徳【名】『徳の缺けてあること』立派なりし物事の、見劣(みおと)するに至ること。有る甲斐なきこと。形無分(かたちな)分。世に「むとくなるもの、潮干の湯(うし)なる、大きな船、髪短き人の、髪とひりおろして髪けづるほど」源氏、御けはひにおされて、皆人、むとくに物したまふるを。」
むとく 無毒【名】毒の無きこと。毒分を合みてあらぬこと。(有毒に對して)
むとく 心得心【名】『心得心せぬこと。不得心。不承知。』いかに言ひ聞かせても得心せぬ義「非道。無理。五十年忌念佛(ごじゅうねんぎねんぶつ)あまりといへば、親ながら、無得心なる御心や」源平和親(げんへいわしん)ええ、無得心の平次、いかに忠義ちやとて、自狀せねば、締め殺すとは」

むとく 無徳【名】『徳の缺けてあること』立派なりし物事の、見劣(みおと)するに至ること。有る甲斐なきこと。形無分(かたちな)分。世に「むとくなるもの、潮干の湯(うし)なる、大きな船、髪短き人の、髪とひりおろして髪けづるほど」源氏、御けはひにおされて、皆人、むとくに物したまふるを。」
むとく 無毒【名】毒の無きこと。毒分を合みてあらぬこと。(有毒に對して)
むとく 心得心【名】『心得心せぬこと。不得心。不承知。』いかに言ひ聞かせても得心せぬ義「非道。無理。五十年忌念佛(ごじゅうねんぎねんぶつ)あまりといへば、親ながら、無得心なる御心や」源平和親(げんへいわしん)ええ、無得心の平次、いかに忠義ちやとて、自狀せねば、締め殺すとは」



宗像の君【句】『君は、姓(かば)の一』神代に宗像の地を領有せし、筑紫の豪族。大己貴(おほのおのきみ)の命の後裔にして、安曇(やす曇)氏と隣接したる。多紀理昆(たきりこん)の命……市津比賣(いちづひめ)の命……、この三柱の神は、胸形(むながた)の君等がもちいつく三前(さんぜん)の大神なり。
宗像の三神【句】次條に同じ。
宗像の三女神【句】宗像神社の祭神たる三柱の女神。天照大神、素戔嗚(すさなひ)尊と誓約の際生れたまひて、筑紫を治め、専ら天孫を輔佐して、功あり。古事記と日本書紀各異本によりて、神名に異同あれど、要するに、韓國との交通路に當る海上の守護神にして、筑紫(ちくし)の豪族宗像の君が、これを、その氏神として仰ぐに至りし因縁は、同じく、筑紫の豪族の一なりし安曇(やす曇)氏が、航海守護の神なる住吉の神を氏神として崇敬せしと、同一の關係なりしものならんといふ。

むながた 宗像神社【名】筑前國宗像郡に鎮座せる官幣神社。田島村にありて、多岐津姫(たきづひめ)の命を祭神とする。津宮(つみや)の第一宮、大島村にありて、市津比賣(いちづひめ)の命を祭神とする。中津宮(なかつみや)の第二宮、沖の島にありて、多紀理昆(たきりこん)の命を祭神とする。瀧津宮(たきづみや)の第三宮の三所、相合して、一社をなす。延喜の制三座、並びに名神(なごみかみ)大社に列し、明治以後、國幣中社、官幣中社より、更に大社に進む。神功皇后の新羅征伐に、神驗著大なりきとて、爾來、國家有事の度、度に幣使を立てられたる。初宗像朝臣宗像郡の大領として、本社(ほんし)の神主を兼帶せしが、天元二年、始めて、大官司を置かる。

むながた 宗像神社【名】筑前國宗像郡に鎮座せる官幣神社。田島村にありて、多岐津姫(たきづひめ)の命を祭神とする。津宮(つみや)の第一宮、大島村にありて、市津比賣(いちづひめ)の命を祭神とする。中津宮(なかつみや)の第二宮、沖の島にありて、多紀理昆(たきりこん)の命を祭神とする。瀧津宮(たきづみや)の第三宮の三所、相合して、一社をなす。延喜の制三座、並びに名神(なごみかみ)大社に列し、明治以後、國幣中社、官幣中社より、更に大社に進む。神功皇后の新羅征伐に、神驗著大なりきとて、爾來、國家有事の度、度に幣使を立てられたる。初宗像朝臣宗像郡の大領として、本社(ほんし)の神主を兼帶せしが、天元二年、始めて、大官司を置かる。

むながた 宗像神社【名】筑前國宗像郡に鎮座せる官幣神社。田島村にありて、多岐津姫(たきづひめ)の命を祭神とする。津宮(つみや)の第一宮、大島村にありて、市津比賣(いちづひめ)の命を祭神とする。中津宮(なかつみや)の第二宮、沖の島にありて、多紀理昆(たきりこん)の命を祭神とする。瀧津宮(たきづみや)の第三宮の三所、相合して、一社をなす。延喜の制三座、並びに名神(なごみかみ)大社に列し、明治以後、國幣中社、官幣中社より、更に大社に進む。神功皇后の新羅征伐に、神驗著大なりきとて、爾來、國家有事の度、度に幣使を立てられたる。初宗像朝臣宗像郡の大領として、本社(ほんし)の神主を兼帶せしが、天元二年、始めて、大官司を置かる。

むなだ

むなひげ

むなした

むなし

むなだかや 胸形箭〔名〕古、筑前國宗像郡より産せし箭。金葉製、胸形箭。

むながねもの 胸金物〔名〕鎧の胸板に打ちたる金物。すなはちの裾金物。参照。

むながはら 棟瓦〔名〕屋の棟を葺く瓦。むねがはら。七、職人歌合、檜皮葺(かき)のむね瓦がおどき。

むなかんちやう 胸勘定〔名〕むなづもりむながらみ 胸絡、胸捌〔名〕胸座(むね)を取る。室町殿日記、むながらみに、ひしと掴み。

むなき 棟木・棟〔名〕棟として用ひたる棟に充ち牛に汗(あせ)す。〔句〕牛に汗し、棟に充つに同じ。

むなき 鰻〔名〕「動」うなぎ(鰻)に同じ。萬葉「石まろにわれ物申す夏瘦によしといふものぞむなき取り召せ」。

むなくさ むな草〔名〕「植」よひぐさ(白芷)に同じ。延喜式、白芷、典呂比久佐……無奈久左。

むなぐさ 胸糞、胸屎〔名〕むねぐさ(胸糞)むなぐら 胸倉、胸座〔名〕著衣の、左右の襟をかき合はせたる部合。むなづくし。

胸倉を掴む〔句〕相手を抑ふるために、その著衣の胸倉を握る。胸(むね)づくしを掴む。重井簡、胸倉掴み、宙に引つけ。

胸倉を取る〔句〕前條に同じ。諸毛「この親仁(おや)めは太(お)え奴(やつ)だ」と、北八、立ちかかって、かの親仁の胸ぐらを取る」と。

むなぐるし 胸苦し〔形〕胸部に故障あるやうに感じて、呼吸苦し。

むなぐるま 空車〔名〕物を載せてあらざる、又は人の乗らずにある車。あきぐるま。からぐるま。雲霧むな車に、魚(う)を懸(か)けて持(も)て来たり。字源、下人を、むな車を借りに遣りて。

むなぐら 胸黒〔名〕「動」涉禽類に属する鳥。千鳥の類。背面は黒色に褐色の斑を、胸腹部は灰色に黒色の斑を交ふ。ちやどり。

むなひげ 胸毛〔名〕男子の胸部に生え

ある毛。むなひげ。記「拔散胸毛、是成槍……」鳥の胸部に生えてある羽毛。夫木、池水に浮べる鴛鴦(う)の胸毛もて寒きけしきの無きあやしいことば。

むなご 空言、虚言〔名〕無實のことば。それと。虚言(うそ)。萬葉、あたらしき清きその名ぞおほるかに心思ひてむな言も親の名立つな。

むなさき 胸先、胸前〔名〕むなもと(胸元)に同じ。起、胸上、ムナサキ。

胸先晝下(ひるさ)〔句〕少し空腹を感じること。日本振振給、あまり笑うて、胸前も晝さがり。

むなさん 胸算〔名〕次條に同じ。じ。

むなさん 胸算當〔名〕次條に同じ。

むなさん 胸算用〔名〕むなづもり(胸積)に同じ。胸算用、買(か)り萬事、一軒(へ)も拂はぬ胸算用を極め。書(か)きせけんおなさん(おな)世間(よ)胸算用(むね)の略(りやく)。(世間の二字は、後人の添へて呼びなり)。

むなさき 胸騒(むねさわ)〔名〕驚怖、又は凶事の豫感などのために、心おちつかず、動悸の高まること。こころさわ。こころばしり。盛衰(せいざい)世間(よ)も忿怒(ぼんご)なる心地しける上、頻に胸騒(むねさわ)のしければ、何事のあるやらんと驚(おどろ)く。

むなし 空し、虚し〔形〕中(な)に物無し。空(くう)なり。うつろなり。萬葉、人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり。日事(ひこと)實(じ)なし。あとかたなし。無根(むね)なり。源氏、空しき事にて、人の御名(み)やけがさん。日効果(ひこうか)無し。かひなし。無益(むえき)なるべき……後の代の語り繼ぐべく名を立つべし。四假有(よかり)なり。夢の如く消えやすし。かりそめなり。はかなし。萬葉、世の中は空しき者と知る時、いよますます悲しかりけり。四怨心(よんおんしん)無し。心、淡泊(たふはく)なり。聖(みよ)沖退(みよ)ムナシクシソクコト。

空しき屍(しかばね)〔句〕次條に同じ。

空しき骸(が)〔句〕「靈魂(れいこん)の離れ去りて空しき意」死體。死骸。古今「戀しき

に侘びて魂惑ひなば空しきからの名にや残らん」。

空しき烟(けむり)〔句〕「無常の烟」に同じ。

空しき空(くう)〔句〕おほぞら。虚空(こくう)。古今わが戀はむなしき空に満ちぬらし思ひ遣れども行く方の無き。

空しき空に藏む〔句〕「佛」こころざら(虚空藏)の直譯。夫木、雲も皆空しき空に藏めつつ澄める嵐(あ)の山の端の月。

空しき谷響く〔句〕「空谷の梵音(ぼんおん)」に同じ。新古今世の中に空しき谷の響(こ)をばたれ山彦(やまひこ)と名づけそめけん。

空しき土となる〔句〕はかなき泥土に化す。平家、屍は、暫しやすらひて、濱の眞砂(まご)に戯れつつ、空しき土とぞなりたまふ。

空しき名〔句〕甲斐なき名。徒(むな)なる評判。地謡、我世には集めぬ和歌の浦千鳥(うらち)空しき名をや跡に残さん。

空しき船〔句〕「後頼口傳に」空しき船とは、おりるの帝を申すなり。その心は、位にておはします程は、船に多く物を積めば、海を渡るに恐あるなり。それに、荷を取りおろしつれば、風吹き浪高けれども、恐なきに備ふるなり」とあり。せんぞ(仙洞)に同じ。

空しき闇〔句〕「佛」無明(むみやう)の闇に同じ。續後撰、行き歸る道だに知らぬ中、空に空しき闇ぞ明くる夜もなき。

空しくなる〔句〕死す。みまかる。徒(むな)になる。はかなくなる。空(くう)はやく空しくなりたまひにき。狂言、磁石(じしつ)「起きよ磁石、磁石、これはいかなこと、誠に空しくなつた」。

空しの人〔句〕死にし人。亡(な)き人。故人。起亡者、ムナシノヒト。

むなしだのみ 空頼〔名〕そらだのみ(空頼)に同じ。「古語」六哲、伊勢の海の渚に寄するうつせ貝、空しだのみに世を盡しつ。

むなしで 空手〔名〕からで(空手)に同じ。「古語」聖供不得利、空手來歸、トモニサチヲエズ、ムナシデニシテカヘル。

むなしぶね 空船〔名〕からぶね(空船)に同じ。聖喪船(せいさうせん)に赴(む)ひて、空船を攻めたまはんとす。

むなしやくり 胸噓〔名〕深き呼吸と共にする嘖泣(げんせき)。今宮心中、胸じやくりして泣く聲の。

むなたか 胸高〔名〕帯を、胸部より上、殆ど胸のあたりに締むること。

むなたか おび 胸高帯〔名〕胸高に締めたる帯。女殺油地獄、小菊は、……ひらり帽子の深深と、……町て名古屋の胸高帯は、

むなち 胸乳〔名〕胸なる乳房。天(あま)宇受賣(うそ)の命(いのち)……胸乳(むね)を。かき出で。

むなづかへ 胸痞〔名〕胸若しく感ずるむなづくし 胸盡〔名〕むなぐら(胸倉)に同じ。風俗、選船頭の胸づくしを取り、駕籠(か)まはしを叩き。

胸盡を爲(な)る〔句〕次條に同じ。

胸盡を掴む〔句〕胸倉(むねぐら)を掴むに同じ。無山鳥、胸づくしを引つ掴む。

胸盡を取る〔句〕前條に同じ。甲陽軍鑑「胸づくしを取りて、後の壁に押し附く」。

むなづつみ 棟包〔名〕むねづつみ(棟包)にむなづばらし 胸づばらし〔形〕胸潰(むねつぶ)るさまなり。むねづばらし。萬葉、飛鳥(つば)こなたは、こころに見知らぬお人ぢやが、いと、顔をつくづく眺むれば、梅川(うめがわ)……と胸づばらし。

むなづもり 胸積〔名〕心の中にて、見積(みしほ)を立つること。胸中にての計算。こころづもり。むなかんちやう。むなさんよう。むなさん。心算。

むなで 空手〔名〕むなして(空手)に同じ。「古語」聖、この山の神は、むな手に、ただに捕りて來馳(き)のりたまひて。

むなばせ 空馳〔名〕競馬にて勝を得ぬこと。著聞、下野の敦末、競馬を仕うまつりけるが、十度むな馳をしたりけるを。

むなひげ 胸鬚〔名〕むなげ(胸毛)に同じ。

むなひも 胸紐(名) ①著物・羽織などの胸部に取り附けた紐。むねひも。若風俗「八所染(八ツ所の胸紐)」②著物に胸紐を附けてある頃の年齢の義。幼少の頃。幼時。神舞鶴本地胸紐から母様にさへ抓められぬ、大事の身」

むなぶくれ 胸膨(名) はらはれ(腹膨)に同じ。鷹渡「むなぶくれして大原の里(さいふ)に西行が歌座屋の花のもと」太蔵「出代(出)や朝飯する胸ぶくれ」

むなふだ 棟札(名) 社寺、その他の建造又は修葺に當りて、その年月及び建替者又は工匠の氏名などを記して、棟木に打ち附けおく、木製又は銅製の札。建造の由來、工事の次第等を、後日の記念とするための習より出てしものなるべけれど、後世は、事に興かりし人の無病息災、又は國家の泰平、領主の延命、五穀の豐饒を祈る、一種の符の如き意味をも帶ぶるに至れり。

むなべつ 棟別(名) ①けんべつ(軒別)に同じ。砂石葉棟別などいひて、心ならぬ奉加を持ちて「運歩色葉集」棟別、ムナベツ」②次條の略。

むなべつせん 棟別錢(名) 鎌倉・室町兩時代に、家の棟ごとに課せし税金。むなべつ。

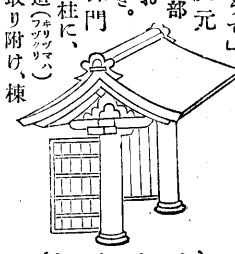
むなべつぶぎやう 棟別奉行(名) たんせん(段錢奉行)に同じ。

むなほね 胸骨(名) むねほね(胸骨)に同じ。和名鳩尾骨、無奈保爾

むなみる 胸見る(動上) ①頭を垂れて、己の胸部を見る。「古語」聖沖つ鳥むな見る時はたぎもこれはふさはずへつなみそにぬぎうて」

むなもと 胸元(名) 胸の部分。むなお。ち。むなさき。

むなもん 棟門(名) 二本の柱に、切妻破風造(ツツガツ)の屋根を取り附け、棟



を高くしたる門。むねかど。むねもん。胸にかけての部分。

むなわく 胸分(名) ①動下二目 鹿など、草木の茂れる中などを、胸にて押し分けて行く。「古語」萬葉ますらをの呼び立てしかばさを鹿のむな分けゆかむ秋の萩原」

むなわけ 胸分(名) ②むな分けること。むねつけ。「古語」萬葉さを鹿の胸わけにかも秋萩の散りすぎにける盛(や)かも去(ぬ)る」③胸の幅。胸廓(古は、女の乳と乳と間の幅廣きを佳しとせしより、特にいふ)「古語」萬葉胸わけの廣けき吾妹(や)腰細の螺贏(う)子(う)の」

むなぬ 空居(名) 空しく居ること。物思のために、爲す事もなく居ること。「古語」六百番歌合「浪の上くくだす小舟のむなぬして月に歌ひし妹ぞ戀しき」

むに 牟尼(梵) ①「佛」寂靜(や)寂。寂默(や)の略。②仙人。③しやかむに(釋迦牟尼)の略。太平記「奈くも牟尼の遺教(を)を受け、懇に叨利(の)の付囑に預かる」

牟尼の憲法(句) ぶっぱふ(佛法)に同じ。平家牟尼の憲法千萬軸、軸軸に佛種の因を明し」

むに無二(名) 二つと無きこと。最もすぐれてあること。無雙。無比。無類。長町女殿切互に無二の中なりしが」

無二(無三) ①「佛」次條②に同じ。百回我中道實相の事は、無二無三の門(に)に輝き」②次條③に同じ。盛衰記「東大寺と申すは、一閣浮提(が)に無二無三の梵閣」猿蓑合戰「法花(が)は入り難きの妙典、無二無三の眞文(が)なり」

無二亦(無三) ①「佛」法華經の方便品に「十方佛土中、唯有一乘法、無二亦無三、除佛方便說」とあるに本づく「道を説くに、二乗・三乗の別無し」一佛乘なるをいふ。會我眞如禪定(を)の時、無二亦無三と説かれてこそ

候(へ) ①他に類の無きこと。無二。無雙。むにせそん 牟尼世尊(名) 「人」むに(牟尼)にむざん(無二無三)に「割」脇目も振らず。用明天皇「命ばかりを助らん」と、無二無三に逃げ來り」

むにんさいりう 無人齋流(名) 小具足(を)の流派の一。荒木無人齋を祖とするもの。

むにんじやう 無人城(名) 人の籠りてをらぬ城。天神記「無人城とて、音も無し」むにんじやう 無人聲(名) 人聲絶ゆること。平家高野山は帝城(を)を去つて、二百里、郷里を離れて無人聲」

むにんたう 無人島 無人嶋(名) ①人の住みてあらぬ島。②「地」をさきほらじま(小笠原島)の舊稱。③「してあらぬこと」むにんべつ 無人別(名) 人別帳に記入むにやむにや(貌)にやむにやむ。

むね宗(名) むね胸の轉義。おもだちたること。主要。事一。聖賢つはもの業として、惡をむねとして、熊鷹狩漁に進める者の」「意。旨趣。本旨。むね旨(名) 事の宗の義。事の意味。趣旨。遠し」①「春秋の序に「言高則旨遠、辭約則義微」とあり」事の意味、深遠なり。

むね胸骨(名) ①「根」の轉、又は、うね(生)根の約か云ふ。②身體の前面、首と腹との中間の部分。人類的乳は、この部分に在り。③衣服の、前項の胸に當る部分。④こころ。おもひ。心中。胸中。胸懷。胸臆。落葉、いと胸きがなかりけり」流麗出世禮懺思案は、この胸にある」胸開(ア)く(句) 心、はれやかになる。胸の隙(を)あく。「胸開づ」に對して「源氏(亡)きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おほえかな」堀鶴嘆つきせず、胸あかぬちしりてけり。非常に胸痛し(句) 甚しく嘆かはし。非常に氣がかりなり。萬葉或は朝(あ)タ(を)にたまふれどあが胸痛し戀のしげきに」源氏、わりなきを思ふに、いと胸痛し」

胸が一杯になる(句) 胸中、悲しきに満さる。胸が透(さ)く(句) ①「胸開(ア)く」に同じ。②飲食物滯らず、心氣さわやかなる。③「胸が痞(を)へる」に對して「胸が痞(を)へる」胸苦し感ず。④「胸が透(さ)く」に對して「胸が開く(句)」「胸開(ア)く」に同じ。胸が塞がる(句) 「胸閉づ」に同じ。奥州安達原「母は、變りし形(を)を見て、胸一杯に塞がる思」

胸が焼ける(句) 胃に熱あるやうに感じて、不快なり。溜飲おこる。

胸焦る(句) 甚しく思ひ悶ふ。おもひこがる。焦慮す。胸を焦す。源氏人やりならぬ胸こがる夕べもあらん」胸裂く(句) 思ひ餘りて、胸も破裂せんばかりに感ず。胸張り裂く。鶴龜うつ蟬の胸裂けてこそ嘆くらめ」①「胸三寸に納む(句)」「胸に疊む」に同じ。胸騒(う)ぐ(句) 胸騒ぎてあり。胸騒(う)ぐ(句) 心ときめき。氣が揉めたる。胸騒(う)ぐ(句) 寒衣、何となう胸騒(う)ぐ。胸突く、胸衝く(句) ①はたと驚く。とむねを突く。女殺油地獄「ぎよつとして、胸突きけるでん顔」②腹だたく感ず。薩摩源五兵衛様、許して下さいせ、あ恥かしと、袖捲ふ。……源五兵衛も、胸あかしが」

胸潰る(句) 「胸潰(う)ぐ」を強めていふ語。若胸、少しつぶれて」用明天皇入道「姫君、胸はつぶるれど」

胸閉づ(句) 心結ばほる。心氣鬱す。胸開(ア)く(句) 對して「語」胸潰く(句) 「胸潰(う)ぐ」を強めていふ語。未幾「胸なる月は曇らじ」

胸に當る(句) おもひあたる(思當る)に同じ。徒然「かほどの理(を)ひ、誰かは思ひ寄らざらんれども、折からの思ひかけぬ心ちして、胸に當りけるにや」

胸が一杯になる(句) 胸中、悲しきに満さる。胸が透(さ)く(句) ①「胸開(ア)く」に同じ。②飲食物滯らず、心氣さわやかなる。③「胸が痞(を)へる」に對して「胸が痞(を)へる」胸苦し感ず。④「胸が透(さ)く」に對して「胸が開く(句)」「胸開(ア)く」に同じ。胸が塞がる(句) 「胸閉づ」に同じ。奥州安達原「母は、變りし形(を)を見て、胸一杯に塞がる思」

むね

胸に餘る【句】あまりの言草に、立腹せずには居られず。中將姫崎の松胸に餘りし當言【句】に、くわつと念立【句】ち、差寄つて。【あること】
胸に一物【句】【句】心にわだかまり胸に覺が有らう【句】他人に問ふまでもなく、自己のたくらみたる事は、自ら知りたる管なり。壬生大念佛偽物【句】か、偽【句】でないか、胸に覺のある事ぢや【句】
胸に聞く【句】落ちつきで、深く考ふ。胸に釘【句】次條の略。
胸に釘を打つ【句】弱點を言ひ中てられて、ひとと感ずる形容。胸に應【句】ふ。大胸その夜、やがて胸に釘打ちてきとこそ宣ひけれ。緋羅羅卯月の紅葉小路【句】の、家出のと聞く度ごとく、この伯母が胸には、釘を打つごとく、言ふさへ涙がこぼるるぞや【句】
胸に應【句】ふ【句】心にひとしと感ず。胸に三寸の彌陀あり【句】【佛】「唯心【句】の彌陀」の意に據りていふ。狂言「應得」射る事はなるまいぞ。胸に三寸の彌陀があるぞ【句】「慢す」
胸に据う【句】怒を表面に現さず。我胸に迫る【句】「胸に響く」に同じ。
胸に響く【句】心に秘しおきて、他に示さず。胸にをさむ。
胸に手を置く【句】「手」を胸部に安んず。かくする時は、夢を見る事多しといふ。【つらつら考ふ。よく思案す】
胸に響く【句】しみじみと感ず。
胸に焼金【句】次條の略。
胸に焼金【句】刺す【句】「胸に釘打つ」に同じ。平假名漢字記、そぞろに悦ぶ親子の情、お筆が胸に焼金【句】
胸に鑢【句】を掛く【句】「名」甚しく思ひ悶ふる形容。心算庚申【句】胸に鑢を掛け、肝を猛火【句】で熬【句】るやうな【句】
胸に蔵む【句】「胸に疊む」に同じ。
胸の霧【句】「心の霧」に同じ。新勳儀「胸の煙【句】」思の煙に同じ。新勳儀「袖の浪胸のけぶり」は誰も見よ君が浮

むね

名の立つぞ悲しき【句】
胸の水【句】「心の水」に同じ。曾丹集「胸の水も落け、心の思も消え」
胸の關【句】「心の關」に同じ。
胸の月【句】「心の月」に同じ。續古今「胸の月心の水も夜な夜なの静かなるにぞ澄みはじめける」
胸の火【句】「心の火」に同じ。夫木暗き世にとす螢の胸の火をおしこめ持たる玉かとぞ見る【句】
胸の隙【句】心の休まる時。心はれやかなる時。源氏宮は、いかなるにつけても胸の隙なき、安からず物をおぼす【句】
胸の隙【句】開く【句】「胸を開く」に同じ。源氏思ひ結ばるる事ども、少しづつ語りきこえたまふにぞ、こよなく胸のひまあく心ちしたまふ【句】
胸の炎【句】「胸の火」に同じ。空鳥年頃、胸の炎をさめず歎きわたりつるを【句】
胸の焰【句】「胸の火」に同じ。蜻蛉「思ひせく胸のほむらはつれなくて涙をあかす物にざりける」【守】に同じ。
胸の守【句】「胸の守」に同じ。愛敬「胸の守【句】あいきやうまもり【句】
胸の蟲【句】むし【句】【蟲】に同じ。曾我「胸が燃えかへり、胸の蟲がむかむか」
胸走る【句】「胸轟く」に同じ。其胸のいみじう走るなど斯くあるといひける答に、逢坂は胸のみ常にはしり井の見つくる人やあらんと思へば【句】
胸張り裂く【句】「胸裂く」を強めていふ語。
胸拉【句】ぐ【句】「胸潰」に同じ。狹衣「去【句】ぬる名残も、胸ひしげたるやうにて」【つまるやうに感ず】
胸塞【句】がる【句】心苦しきに、胸の胸塞【句】がる【句】前條に同じ。榮花「御胸ふたがりて、さだかにも御覽せられず」源氏「御胸のみ、つとふたがりて、つゆまどるまれず」
胸燃ゆ【句】「心燃ゆ」に同じ。新勳儀「遠ふことよ今は限の旅なれや行く末知らて胸ぞ燃えける」
胸焼く【句】食物、胃中に停滯して、胸

むね

熱するが如く感ず。醒睡筈、餅を食ひすとして、胸の焼くるが苦しい【句】
胸より餘る【句】おむひある【句】（思餘る）に同じ。源氏「いとほしう悔しうおぼえたまふさま、胸よりも餘る心ちしたまふ」
胸悪し【句】吐氣あり、又は穢らはしき物事を見聞して、不快に感ず。
胸を痛む【句】心痛す。
胸を打つ【句】感嘆又は絶望の餘に己の胸部を手にて叩く。萬葉伏し仰ぎ胸打嘆き【句】【事】に觸れて、即座に深く感ず。
胸を焦す【句】「胸焦る」に同じ。
胸を擦る【句】腹だたしさを堪へ忍ぶ形容。
胸を冷【句】ます【句】「胸の炎を冷ます。松尾荷葉東常盤」かりかりばつと腹立てても、主ある男の因果さは、勝つて負になるものを、胸を冷ます玉水の、庭の玉井に立ちかかり【句】
胸を据う【句】決心す。重井蘭「身一つ胸を据ふたれば、いっそ悲しい事も無し」
胸を潰す【句】「胸潰る」に同じ。狹衣「おぼし忘るる夜なく胸をつぶしたまひけり」
胸を撫で擦【句】る【句】心もとなく、又は腹だたしくなど思ひながら、強ひて、氣を落ち附かしむ。藤原歌「はや御祝儀は相済み、御縁附はきはまつたか、早う聞きたり、聞きたいと、胸撫てさするばかりなり」
胸を撫づ【句】次條に同じ。醒睡筈伊勢參の坂むかひに出てたる者、内に歸り、胸を撫て、額をとらへ、あら苦し、あら苦しと、時過ぐるまてかなしがるを【句】
胸を撫下【句】す【句】「長き心配の後」に安心する形容。
胸を冷す【句】「肝を冷やす」に同じ。
胸を焼く【句】「胸を焦す」に同じ。榮花「あさましう心愛き事を言ひ出でて、人の御胸を焼きこがし、歎をせさせ奉る」

むね

胸を焼く【句】「胸を焦す」に同じ。曾我「あはれ、胸を焼くとは、かかることをや申すべき」
胸を躍らす【句】「胸躍る」に同じ。
胸を悪くす【句】「胸悪く」に同じ。藤原歌「變な句のする酒だと思ひながら、胸を悪くして撫てさすり」
むね棟【名】「むね」の轉義、即ち家屋の中の主要なる部分の義。【むねき棟木】に同じ。源氏「むね、【むね】の最も高き處。方丈棟を並べ、【むね】を争へる、高き賤しき人のすみか」風雲「新月や内侍所の棟の草」【牛車】の【むね】の一部。屋形の上に、前後の方向に渡せる木。
棟高し【句】住宅の構、高大なり。五人女「棟高き町屋に腰元つかひして」
棟取る大臣【句】「むねまきみ」棟梁【句】に同じ。古語「棟に充ち、牛に汗す【句】「棟」に充ち、牛に汗す【句】「棟」に充ち、牛に汗す【句】
むね刀背【名】「むね刀背」に同じ。
むね棟【助動】建物の敷に添へていふ語。「屋母【句】一棟を焼く」長屋二棟【句】
むねあげ棟上【名】「家を建てるに、柱梁【句】などを組み立て、その上に棟【句】を上げ横たふること、又その式。上棟【句】。【むねたて】棟立【句】に同じ。
むねあて胸當【名】「上古、胸部に當てて用ひしよる。胸甲。【布帛】にて仕立て、小兒などの衣服のよこれを防ぐために、胸部に掛けて用ふるもの」
むねうち刀背打【名】「むねうち峰打」に同じ。商なき人の、商室にて、堅き物を食ふこと。「附けたる裝飾」
むねかざり棟飾【名】「屋根の棟に取り、胸勝【名】胸部の、目立ちて高きこと。榮花「御胸がに、乳なども、いと張りて」
むねかど棟門【名】「むねもん」棟門に同じ。
むねがはら棟瓦【名】「むねがはら」棟瓦に同じ。
むねき胸氣【名】「瘕」にさること。浮世床「少し赤面して、胸氣な奴等【句】だとい

ふ顔で、睨みつけ」
むねきよ 宗清(名) 〇〇(人)たひらむねきよ
(平宗清)を見よ。 〇〇常盤津節の曲の一。

本外題は「恩愛蘭守(名)」。俗に「雪の常盤」といふ。山城國木幡(名)の里に、平宗清、平清盛の命を受けて、新關を構へる所へ、常盤御前、三人の子を連れて通りかか、宗清の御前に従ひ、操を破りて、三子を助けんとし、六波羅に引き行かるるに終る筋のもの。奈河本助の作詞、第五世岸澤式佐の作曲、西川扇藏松本五郎市の振附。

むねく 胸葵 胸屎(名) 〇〇(胸)に同じ。罵りていふ時の語。 〇〇胸葵が悪いの略。 〇〇おれに取つてかかつたのが胸葵だ」
むねく 胸葵が悪い(名) 〇〇胸が悪い。いま

むねく 胸葵(名) 〇〇胸が悪い。いま立てて埋む木。 〇〇埋棺の時、棺の上に

むねく 胸氣(名) 〇〇胸の痛む病。「古語」空鶴中納言このむねけといふ心ちなんとして」
むねく 胸心(名) 〇〇同義の語を重ねていへる語。むね(胸)に同じ。 〇〇胸心漬る(名) 〇〇胸漬るに同じ。 〇〇空鶴「むね心もつぶれて、よろづの事覚えざりしかば」

むねく 棟越(名) 〇〇次條を見よ。 〇〇棟越の墓目(名) 〇〇「句」墓目の法の「。家の棟を越すやうに射るもの。」
むねく 胸叩 胸敲(名) 〇〇「手にて、胸を叩きながら、節季候と呼ばはる習なりしよりいふ」せきぞ(節季候)に同じ。三

二職人歌合「宿ごとに春参らんと契りしは花のためなる胸たたきかな」
むねく 胸立(名) 〇〇次條の略。
むねく 棟立 〇〇「名」屋根の棟を高く上げて、上方へ反(り)らしめたる興。板輿(名)の興などにあり。むねたけ。むねたて。 〇〇「宗任」を見よ。

むねく 無熱(名) 〇〇熱氣の無きこと。
むねく 無熱(名) 〇〇熱氣の無きこと。
むねく 無熱(名) 〇〇熱氣の無きこと。

音便。 〇〇「白い面」を批(り)りまげてやるべえ。胸つくそ悪い猿唐人ぢや」
むねく 無熱池(名) 〇〇「地」あなばたぢや(阿那婆答多池)に同じ。 〇〇平家無熱池の底には金銀(名)の砂(名)を敷き」
むねく 無熱池(名) 〇〇瓦を高く重ねたる棟。むなづつみ。下集「棟棟、ムネツツミ」

むねく 無熱天(名) 〇〇「佛」梵 Aśitaの譯語「三界諸天の中に、色界(名)の第四禪天に属する九天の一。この天に生くる者は、意識調柔にして、清凉自在、よく熱惱を離るるといふ。」
むねく 無熱池(名) 〇〇「佛」むねつち(無熱池)に同じ。

むねく 胸潰らはし(名) 〇〇「形」驚きて、胸も潰れんばかりなり。むなつばいし。 〇〇「人」人しくおぼさる。み居たれば、いと胸つぶらはしおぼさる。 〇〇「古語」驚船者の天下之要用ムネツモノ也」
むねく 宗徒(名) 〇〇次條の副詞の一轉して、名詞化せるもの「多くの人の中の、主要なるもの。著聞むねとの鬼むねとの儒者のありけるが」太平記「桐一揆を始として、宗徒の勇士五百餘騎」

むねく 宗と(名) 〇〇おもに。専ら。主として。第一に。 〇〇「砂石集あまたの疵の中に頭(名)を通して舌につきつけたりける疵、むねと大事なり」太平記「南方の御敵退治のためとは申しながら、宗とは仁木右京大夫義長が過分の舉動(名)を鎮めんがためにて候ひき」
むねく 棟融(名) 〇〇「文車」の具。むねの(名)を見よ。 〇〇「國太馬(彈正少弐公興朝臣車棟融不付之事」

むねく 胸投(名) 〇〇「相撲」の四十八手の一。四手(名)に取り組みたる上、互に胸にて押し合ひ、一方の者、相手に押しかかり、相手は、押されじとするを、右方へ開き振り上げて投げ、その上に重なるもの。振りまはる時は、胸矢倉(名)といふ手になる。

むねく 宗良親王(名) 〇〇「人」後醍醐天皇の皇子、護良(名)親王の弟。出家して、尊澄と號し、妙法院に住し、三品に敘せられ、天台の座主たり。元弘の亂に笠置陥りて捕へられ、亂後、京師に還りて、再び座主となり、位、一品に進む。後村上天皇立つに及び、遺詔を奉じ、髪を蓄へて、名を宗良と改め、中務卿征東將軍となり、常に戎馬の間に奔走し、備きに新業和歌集を撰む。薨去の年時詳かならず。上野親王、又信濃宮とも申す。

むねく 胸走(名) 〇〇むねはしり(胸走)に同じ。 〇〇「古語」驚かたはら痛しと思ひつつ、さすがに胸はしりするを」
むねく 胸走火(名) 〇〇むねはしり(胸走)をばしり(走火)に譬(る)ていふ語。古今「人」あはんつきのなきには思ひおきて胸走火に心焼けるを」太極「吹ききやす胸はしり火や卵酒」
むねく 胸紐(名) 〇〇むねひも(胸紐)に同じ。 〇〇「代安羽織の胸紐」
むねく 棟平瓦(名) 〇〇のしがはら(慶斗瓦)に同じ。

むねく 棟札(名) 〇〇むねだ(棟札)に同じ。 〇〇「慶應寺御堂」の造立、すてに成就し、棟札を書かんと、法印出でて、筆を染め」
むねく 胸骨(名) 〇〇むねこ(胸骨)に同じ。 〇〇「宇道むね骨は、殊にさし出で」
むねく 棟梁臣(名) 〇〇「棟梁」の臣の直譯。むねの棟梁之臣、タケシヲ記「命武内宿禰、爲二棟梁之臣、タケシヲチノシクネヲ、ムネマチギミ(ムネトルマチギミ)トス」

むねく 胸前垂(名) 〇〇胸の邊より垂れ掛る前垂。 〇〇「緋縮緬月の紅雲胸前垂に草鞋がけ、親の辛苦一つにて仕出(名)いたるこの身上(名)」
むねく 宗宗(名) 〇〇「形」宗とあるさまなり。おもだちであり。確(名)としてあり。 〇〇「源氏あやしうよるぼひてむねむねしからぬ軒のつま」 〇〇「むねむねしき方の事、はた、殿より申させたまはば」

むねく 無念(名) 〇〇「佛」妄念の無きこと。正念(名)。 〇〇「ねんなし(念無し)」と。 〇〇「口惜しきこと。残念。ぶねん。我いつ思ひ出もなく果てんことこそ無念なれ」
無念(名) 〇〇「何等の想念もなきこと。 〇〇「無邪氣。無心。百合若大臣野寺」侍分の者どもは、生心(名)ある故に、向ふの心に微するなり。無念無想の下部ども、占はせよ。承る」
むねく 無念(名) 〇〇「動四自」無念に思ふ。残念が。

むねく 無念泣(名) 〇〇「無念」の餘に泣くこと。くちをしなみだ。くやしなき。 〇〇「太平記」無念泣して無念泣」
むねく 無念泣(名) 〇〇「無念」の餘に泣く。 〇〇「百合若大臣野寺」口惜しや、刀を返せと脱(き)め付くる兩眼に、はらはらと無念涙を流しける」
むねく 無念腹(名) 〇〇「無念」の餘に腹立つこと。 〇〇「傾城原合戰」不覺者の無念腹」
むねく 棟門(名) 〇〇むねもん(棟門)に同じ。 〇〇「平門」に對して、運歩色葉集「棟門、ムネモン」

むねく 棟役(名) 〇〇次條の略。
むねく 棟役錢(名) 〇〇轉宅する者に課する税。 〇〇「甲賀軍勢他郷へ有る移(名)家人一者、追而可執棟役錢一事」
むねく 胸矢倉(名) 〇〇むねなげ(胸投)を見よ。

むねく 胸休(名) 〇〇「まやすめ(氣休)に同じ。 〇〇「てんじん(點心)に同じ」
むねく 胸分(名) 〇〇むねわけ(胸分)に同じ。 〇〇「後醍醐朝露に移ろひぬべし」を鹿のむねわけに朝露の秋の萩原」
むねく 棟別(名) 〇〇むねべつ(棟別)を見よ。 〇〇「棟別」を棟の下に、隣の壁も、隣家と共通に建てたる長屋。合棟(名)の長屋。

むねく 無能(名) 〇〇才能の無きこと。
むねく 無能勝(名) 〇〇「佛」みへ(彌ををむわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

賢記「有道の政無偏の恵」
無偏無黨「句」『書經の洪範篇に「無偏無黨王道荡荡」とあり「不偏不黨」に同じ。』

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むへん 無邊「名」廣大にして、邊際の無

むほん 謀反謀叛「名」君王又は主君に
坂きて、兵を起すこと。謀反(ひ)。曾野國
の源氏謀叛を企て。

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むほん 無本「名」書籍の無きこと。浮世

むまご 孫「名」(まご)に同じ。和名孫、
無萬古。廣野支「鴨突は登津のあまの
むまごめかな」

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

むまごめ 孫姪「名」甥の子にて、女子

用。癡煩惱。六煩惱の一。目起信論に
ては、眞如平等の一義を了せざるより、忽
然として、發動する根本妄念。目非有非
空の理に迷ひて、中道の障礙となるもの。
四一癡の煩惱。四十二因縁の一。俱舍
宗にては、過去世に於て、種種の煩惱を起
す位なりとす。唯識宗にては、愚癡無癡の
癡煩惱とす。因眞宗にて、佛智を了せざ
る疑惑。

無明長夜「名」(みんちや)「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

無明の闇「句」(佛)「無明の闇

むみやう

るも夢の浮橋や、無明の橋のいと細き」
無明の闇(一)「句」佛「涅槃經に「菩薩永斷無明闇」とあり」無明のため、に事理に昏きを闇夜に譬へていふ語。

無明の醉(一)「句」佛「無明の酒」に同じ。八大尊無明の醉(一)

無明法性(一)「句」佛「煩惱(一)即(一)菩提」に同じ。「佛」煩惱無體(一)、全依法性(一)に依る。新可笑記心憤き三人比丘尼となりぬ。誠に無明無體、全依法性となり、聖(一)の云へる、氷消えては、清き水となる例(一)ぞかし」

四十品(一)の無明「句」佛「無明(煩惱)に四十二品あり、その太敷を擧げていふ。發覺論四十品の無明の根本を斷す」

むみやうい 無名異「名」(一)「化」くわんくわんがん(過酸化滿庵)に同じ。日(一)す(吳須)に同じ。

むみやうい 無名異焼「名」佐渡國相川より製出する磁器。釉を用ひず、質堅く、色澤紫泥又は朱泥に似たり。

むみやうい 無名抄「名」書和歌に關する諸論四十八項を、國文にて記したる隨筆。二卷。鴨長明の著。群書類從には、無名抄と題して收めたり。

むみやうい 無明世界「名」佛煩惱(一)を脱せぬ、迷執の世界、即ち凡夫の世界。

むみやうい 無名秘抄「名」書前「前條に同じ。

むみやうい 無明流「名」劍術の一派。石田伊豆守を祖とするもの。

むむ 生む産む「動四他」うむ(生む)に同じ。「代男」まだ子をむまいて仕合(一)むむ「感」口を閉ちて少し笑ふ聲。源氏「ただむむと打笑ひて」感心し、又は合點する時に發する聲。生玉心中「むむ、それ聞えた」和名、腕、无无岐、むむぎ、腕「名」もむぎ(腕)に同じ。「古語」むんぐう文口「名」朝鮮語。「客」の字

むんず

を二字に分ちたるもの」しはきこと、又その人の隠語。けち。吝嗇。
むんず「貌」むすの音便。曲曲夜討會戰「むんずと組めば」

むんちやく 羌廋「名」(動)偶蹄類に屬する獸。印度東印度臺灣等に産し、ヒマラヤ山にては、三百メートルの高處にも棲息す。鹿に似、體長毛色等、産地によりて、小異あれども、角の基部數寸の間、毛を生ず。性柔順なれども、時に激怒することありといふ。

むんむ「貌」蒸暑き感じ。

むめ 梅「名」(一)「種」うめ(梅)に同じ。本草和名、梅、牟女。佛家奇人談談「梅」の花答へて曰く梅(一)の花

むめ 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無名「名」(一)「名」を記してあらぬこと。無記名。日名の世人に知られてあらぬこと。名高くあらぬこと。(有名に對して)日名義の立たぬこと。正當なる理由なきこと。「無名の師」

むめい 無銘「名」書畫刀劍などに、製造者の記名の無きこと。諸國は「初より、無銘の何の役にも立たざるものとは」

むめい けいやく 無名契約「名」(一)「法」法律、殊に民法、商法等に一定の名稱なき契約。例へば契約になりて、或不行爲の義務を負ふ類(有名契約に對して)

むめい 無名骨「名」(一)「醫」羅の inominum 軀幹の下位に在り、薦骨、尾椎骨などと共に、骨盤を形成する扁平、不齊なる骨。體骨。

むめい けいやく 無名骨髀臼「名」(一)「醫」無名骨の外側にある、深く大なる臼窩。

むめい 無名氏「名」しめいし(失名氏)に同じ。

むめい 無名指「名」孟子の告子上篇に「今有無名之指、屈而不信」とあり、すりゆひ(藥指)に同じ。

むめい

むめい じやうみやく 無名靜脈「名」(一)「醫」羅 Vena anonyma 内頸靜脈と鎖骨下靜脈との、頸部の邊にて合合して成れる靜脈。

むめい じやうみやく 無名投票「名」(一)「法」むめい じやうみやく 無名動脈「名」(一)「醫」羅 Arteria anonyma 大動脈弓の上部より分枝せる動脈。

むめい 無名門「名」平安城の内裡にて、清涼殿の殿上(一)の問より、小板敷を下り、紫宸殿に至る土廊にありし門。建武中行事「無名門に入りて、弓場」に連なり立つ。建武殿上(一)の戸を出て、させたまひて、無名門より、右近の陣を過ぎさせたまへば」曲の一。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むめい 無目「名」(一)「めめ」滑の轉。敷居鴨居と同じ位置にありて、溝なき横木、又窓と欄間(一)との間にある横木。

むもん

江國奥山方廣寺の開山。元中七年歿す。年六十八。「ん(平滑筋)に同じ。

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

むもん 無紋筋「名」(一)「醫」(一)「つわつ」

わやひふね 舫船・纜船(名)むやふ船、又、むやひたる船、もやひぶね。
むやふ 舫ふ・纜ふ(動四他)船と船とを繋ぎあはす。もやふ。夫木、水もせに紅葉の舟をむやひつつ錦帆に掛けて風ぞ漕ぎゆく。

むやま 無山(名)次條を見よ。
無山を踏む(句)鷹狩に、鳥を捕らず、空しく歸る。
むやみ 無闇(名)結果を考へずに、無法なるさま。むや。和合人、残念な事だねえ。むやみにお出でなさいな。

むやみ 無闇(名)結果を考へずに、無法なるさま。むや。和合人、残念な事だねえ。むやみにお出でなさいな。
むやみ 無闇(名)結果を考へずに、無法なるさま。むや。和合人、残念な事だねえ。むやみにお出でなさいな。
むやみ 無闇(名)結果を考へずに、無法なるさま。むや。和合人、残念な事だねえ。むやみにお出でなさいな。

むやみ 無闇(名)結果を考へずに、無法なるさま。むや。和合人、残念な事だねえ。むやみにお出でなさいな。
むやみ 無闇(名)結果を考へずに、無法なるさま。むや。和合人、残念な事だねえ。むやみにお出でなさいな。
むやみ 無闇(名)結果を考へずに、無法なるさま。むや。和合人、残念な事だねえ。むやみにお出でなさいな。

むやみ 無闇(名)結果を考へずに、無法なるさま。むや。和合人、残念な事だねえ。むやみにお出でなさいな。
むやみ 無闇(名)結果を考へずに、無法なるさま。むや。和合人、残念な事だねえ。むやみにお出でなさいな。
むやみ 無闇(名)結果を考へずに、無法なるさま。むや。和合人、残念な事だねえ。むやみにお出でなさいな。

むやみ 無闇(名)結果を考へずに、無法なるさま。むや。和合人、残念な事だねえ。むやみにお出でなさいな。
むやみ 無闇(名)結果を考へずに、無法なるさま。むや。和合人、残念な事だねえ。むやみにお出でなさいな。
むやみ 無闇(名)結果を考へずに、無法なるさま。むや。和合人、残念な事だねえ。むやみにお出でなさいな。

むより 最寄(名)むらがりであること。
むよりの いみ 六回の齋(句)ろくさいにち(六齋日)に同じ。「古語」記「六齋、ムヨノイミ」。

むより 最寄(名)むらがりであること。
むよりの いみ 六回の齋(句)ろくさいにち(六齋日)に同じ。「古語」記「六齋、ムヨノイミ」。

むより 最寄(名)むらがりであること。
むよりの いみ 六回の齋(句)ろくさいにち(六齋日)に同じ。「古語」記「六齋、ムヨノイミ」。

むより 最寄(名)むらがりであること。
むよりの いみ 六回の齋(句)ろくさいにち(六齋日)に同じ。「古語」記「六齋、ムヨノイミ」。

むより 最寄(名)むらがりであること。
むよりの いみ 六回の齋(句)ろくさいにち(六齋日)に同じ。「古語」記「六齋、ムヨノイミ」。

むより 最寄(名)むらがりであること。
むよりの いみ 六回の齋(句)ろくさいにち(六齋日)に同じ。「古語」記「六齋、ムヨノイミ」。

むらあじ 群蘆叢(名)村蘆(名)群りて生えたる蘆。患難集うちそよぐ水のむら蘆下折れてうら淋しくぞ雪降りにける。
むらあけ 村預(名)江戸時代に、罪人を村役人に引き渡して、一定の期間禁錮せしこと。期間内に、その罪人が法を犯す時は、預主のむらに罰せらるる定なり。

むらあけ 村預(名)江戸時代に、罪人を村役人に引き渡して、一定の期間禁錮せしこと。期間内に、その罪人が法を犯す時は、預主のむらに罰せらるる定なり。
むらあけ 村預(名)江戸時代に、罪人を村役人に引き渡して、一定の期間禁錮せしこと。期間内に、その罪人が法を犯す時は、預主のむらに罰せらるる定なり。

むらあけ 村預(名)江戸時代に、罪人を村役人に引き渡して、一定の期間禁錮せしこと。期間内に、その罪人が法を犯す時は、預主のむらに罰せらるる定なり。
むらあけ 村預(名)江戸時代に、罪人を村役人に引き渡して、一定の期間禁錮せしこと。期間内に、その罪人が法を犯す時は、預主のむらに罰せらるる定なり。

むらあけ 村預(名)江戸時代に、罪人を村役人に引き渡して、一定の期間禁錮せしこと。期間内に、その罪人が法を犯す時は、預主のむらに罰せらるる定なり。
むらあけ 村預(名)江戸時代に、罪人を村役人に引き渡して、一定の期間禁錮せしこと。期間内に、その罪人が法を犯す時は、預主のむらに罰せらるる定なり。

むらあけ 村預(名)江戸時代に、罪人を村役人に引き渡して、一定の期間禁錮せしこと。期間内に、その罪人が法を犯す時は、預主のむらに罰せらるる定なり。
むらあけ 村預(名)江戸時代に、罪人を村役人に引き渡して、一定の期間禁錮せしこと。期間内に、その罪人が法を犯す時は、預主のむらに罰せらるる定なり。

むらあけ 村預(名)江戸時代に、罪人を村役人に引き渡して、一定の期間禁錮せしこと。期間内に、その罪人が法を犯す時は、預主のむらに罰せらるる定なり。
むらあけ 村預(名)江戸時代に、罪人を村役人に引き渡して、一定の期間禁錮せしこと。期間内に、その罪人が法を犯す時は、預主のむらに罰せらるる定なり。

むらかたさんやく 村方三役(名)江戸時代に、郡交代官の下に屬して、幕領の民政に従事せし官主・組頭・百姓代の總稱。むらにやく(村役人)参照。
むらかへ 村替(名)江戸時代に、その領せる村を、他と取り替へしこと。

むらかへ 村替(名)江戸時代に、その領せる村を、他と取り替へしこと。
むらかへ 村替(名)江戸時代に、その領せる村を、他と取り替へしこと。

むらかへ 村替(名)江戸時代に、その領せる村を、他と取り替へしこと。
むらかへ 村替(名)江戸時代に、その領せる村を、他と取り替へしこと。

むらかへ 村替(名)江戸時代に、その領せる村を、他と取り替へしこと。
むらかへ 村替(名)江戸時代に、その領せる村を、他と取り替へしこと。

むらかへ 村替(名)江戸時代に、その領せる村を、他と取り替へしこと。
むらかへ 村替(名)江戸時代に、その領せる村を、他と取り替へしこと。

むらかへ 村替(名)江戸時代に、その領せる村を、他と取り替へしこと。
むらかへ 村替(名)江戸時代に、その領せる村を、他と取り替へしこと。

むらかみ

むらかみのみさき 村上陵(名) 村上天皇の御陵。山城葛野(一)郡花園村にあり。

むらかみひら 村上平(名) 精好(一)の一種。越後國岩船郡山邊里(一)村より産し、その西隣村上町にて市場に出す。袴地として、同國の五泉平と並び稱せらる。往往、仙臺平の名によりて賣買せらる。

むらかみふづん 村上佛山(名) (人) 詩人。名は剛、字は大有、通稱は彦左衛門。豊前國神田村の人。京都に遊びて、名聲頗に著れ、後、郷里に帷を下す。明治十二年歿す。年七十。

むらかみよし 村上義光(名) (人) 武將。通稱は彦四郎。信濃國の人。元弘の亂に、護良親王に從ひて、吉野山に入りし時、土兵路に擁して、錦旗を奪ひしを、義光後れ至りて奪還す。たまたま敵兵來り圍み、城の陥らんとするや、親王の鎧を賜はりて、親王と作稱し、自盡す。親王間に乘じて通るを得たり。

むらからず 群鴉 群鳥(名) 群り飛ぶ鴉。むれがらす。鴉(一)鳥。むら鳥たそがれ時にうち連れていそが羽並(一)は遠(一)の山もと。

むらがり 群衆 衆(名) むらがること、又、むらがりたるもの。むれ。ぐん。集團。むらがる 群る。衆る。衆る(動四自) 多くの人の又は物が、一箇處に集まる。寄り集まる。かたまる。群(一)る。集合す。

むらぎ 斑氣 村氣(名) 變りやすき心。むらぎえ 斑消。村消(名) むらぎゆること。増鏡、薄く濃くのべの縁の若草のあとまで見ゆる雪のむらぎえ。

むらぎく 叢菊 村菊(名) むらがり生えたる菊。葉(一)も一も菊むら菊など。むらぎぬ 疋絹(名) 一疋の絹。家持、きりぎりすつづりさせとは鳴くなれどむら絹持たる我は聞き入れず。

むらぎみ 邑君(名) 一村を治むる人。むらぎを。むらづかき。「古語」記「天邑君、アマノムラギミ」。

むらぎみ 漁父(名) 漁夫の長。漁夫。「古語」和名「漁翁、無良岐美」。

むらぎも

むらぎも 村肝(名) 群れる肝、即ち五臓六腑。

むらぎもの 村肝の「枕」『きもむかふ(肝向ふ)』を見よ。臟腑の群り凝るといふ意にて、こころ(心)にかけていふ。萬葉、村肝の心くだけて思へども。

むらぎゆ 斑消ゆ。村消ゆ(動下二目) 雪、霜など、まばらに消ゆ。源氏「垣のもとに、雪むらぎえつつ、今もかき曇りつつ降る」。

むらぎり 斑霧。村霧(名) 薄く濃く疎らに立つ霧。萬葉「阿賀」海邊も晴るる村霧に。

むらぐさ 叢草。村草(名) むらがり生えたる草。拾玉「宿さびて夏も人目はかれにけり何しげらん庭のむら草」。

むらぐち 村口(名) 村の入口。むらぐみ 村舎(名) 太刀の鞘の所所に、金銀箔を押しあるもの。「古語」。

むらぐも 群雲 群雲村雲(名) むらがり起る雲。一むらの雲。太平記「群雲立ちて」玉葉「風の音はげしくわたる梢よりむら雲寒き三日月の空」。

むらくも 村雲(名) (地) 京都市上京區一條堀河通の北部。太平記「村雲の僧……さてこそ、所多きに、村雲といふ所に住せなれ」。

むらくもに 村雲尼(名) 歴代、村雲の御所に入室せらるる攝家の息女。むらくもの(一)じよ 村雲御所(名) ずるりゆ(一)瑞龍寺(一)に同じ。若風「年久しく一條村雲の御所に宮仕して」。

むらくもの(一)る 叢雲 叢(名) ぐさなきのつくさ草薙(一)を見よ。むらぐわき 村過料(名) 江戸時代に、過料(一)として村に科し、その村の村高に應じて出さしめしもの。

むらこ

むらこ 村紺 斑紺(名) 次條の略一説、むらこ(村濃)の音便なりと。選歩色葉集「村紺、ムラゴウ」出世最遺「むらこうの大暮打たせ」。

むらこ 村濃 斑濃(名) こんむらこ(紺村濃)に同じ。唐訓往來「卷染、村紺」。

むらこぎ 村搔 斑搔(名) 次條の略。むらこぎゆみ 村搔弓。斑搔弓(名) 五箇所を、一尺づつ輕く削り落し、白鼓を張りたる的弓。

むらこ 村木立 義木立。群木立(名) むらり立てる木立。一「川狩のうしろの明(一)や村木立」。

むらこ 村濃 斑濃 絨濃 絨濃(名) 絨の絨の一種。全部同じ色の絨を用ひ、淡き中に、濃きを交へて絨したるもの、又は、種種異なる色の絨にて絨したるもの。むらこ。

むらこ 群聲(名) 多くの物の鳴き立つる聲。夫木宿に泣く梢の蟬のむら聲は夕日の影も處せきまで」。

むらさいの 紫野(名) (地) むらさきの(紫野)の音便。大鶴むらさい野にて、御車に目を附け奉りたりし」。

むらさいのり 紫海苔(名) (植) むらさきの(紫海苔)の音便。紫葉細布(一)とさめむらさいのり」。

むらさき 紫(名) (植) 紫草(一)科に屬する多年生の草。莖は高さ二尺内外、葉は互生し、楕圓狀披針形にして、全縁、葉にも、葉にも、少毛生じ、粗面を有す。夏、日梢頭に、白色、漏斗狀にて、上邊五淺裂せる花冠を有する、小き花開き、小堅果を結ぶ。根は、紫根(一)と稱し、深紫色の部分あり、紫色の染料に用ふ。山野に自生し、又、園圃に培養す。ねむらさき。みなしぐさ。むらさきさう。

「紫草」和名「紫草、无良佐岐」(一)古は、大抵、前項の草の根にて染めし色なるよし。



(きさむ)

むらさき

りいふ 赤と青との間の色。染色には、藤紫、赤小豆(一)紫納戸(一)紫などの種類あり。むらさき。目(一)色の紫に近きよりいふ。しやうゆ(香油)の異稱。

「動」肉の紫黒色なるよりいふ。いわし(鰯)の異稱。「宮中の語」(一)「むらさきしき」(紫式部)に同じ。紫、ささめき思ふに、四條大納言、御簾(一)のもとに居たまへば」。

紫朱(一)を奪ふ(一)「論語の陽貨篇に「惡紫之奪朱也」とあるに本づく支那にては、正色を貴び、間色を卑しむより、青と赤との間色にして、而も麗美なる紫色が、正色なる朱色を混和壓倒するに譬へていふ」姦人が、正義の士を、紫の朱を奪ふといふことを惡むといふ文を御覽せさせたまふことありて」。

紫の色通ふ(一)「藤(一)の色」を見よ「血縁の關係あり。源氏「紫の色は通へど藤の花心にえこそ任せざりけれ」。

紫の雲(一)「しん(一)紫雲」に同じ。空、紫の雲に乗れる天人七人」新古今「紫の雲より藤の天千とせの松にかけてこそ見れ」(一)くわら(一)皇后の異稱。八雲御抄「后、むらさきの雲」。

紫の雲の迎(一)「佛」淨土門の修行者の臨終に、阿彌陀三尊が、紫雲に乘りて來迎(一)すること。三尊來迎。

紫の裾濃(一)「むらさき」(一)紫裾濃」に同じ。紫、紫の裾濃の御帳(一)し(一)紫の袖(一)「あは(一)位袍」を見よ。し(一)紫の(一)異稱。後拾遺「藤原氏の七十賀の月次(一)の屏風に、臨時客のかた書きたる所を詠め、紫の袖を連ねて來たるかな春立つことはこれぞ嬉しき」續世襲列なれる紫の袖も、事に從へる緋(一)も、縁も、花やかなる御垣の内、春なりけるとなん聞えはべりし」。

紫の竹(一)「植」し(一)紫竹」の直譯「かんち(一)寒竹」に同じ。現文「物思ふ涙と聞くとあはれなり昔來ける紫の竹」。

紫の塵(一)「しん(一)紫塵」に同じ。「和漢朗詠集」の、小野篁の詩句に「紫塵をふり」。

「和漢朗詠集」の、小野篁の詩句に「紫塵をふり」。

嫩蕨人等「手」とあるに本づく。蕨の萌え出てたる穂には、紫色の細粉附著せるよりいふとぞ。白居易の詩に「紫蕨行看採」方岳の詩にも「紫蕨成拳著雨肥」とあり。蕨の若芽の形容。堀太「紫の塵うち拂ひ春の野にあさる蕨のものうげにして」

紫の庭「句」『紫微宮を禁中に比するによりていふ。支那にも「紫庭」といふ語あれど、幕府の異稱なり』禁中の御庭、御苑。夫木紫の庭の春風のどかにて花にかすめる雲の上かな」

紫の星「句」しびせし（紫微星）に同じ。伊勢集「日の光重ねてくれば紫の星も二つに色やなるらん」

紫の宮「句」ちゆうぐ（中宮）の異稱。紫の物語「句」『書』げんじものがたり（源氏物語）に同じ。更科「紫の物語に、宇治の宮の娘どもの事あるを」

紫の縁「句」『句』縁（えり）の色を見よ「ゆかり（縁）に同じ。妹背中女屋訓「聲様をちよつと拜まして貰うたら、赤うござりますといふ顔も、恨色なる紫のゆかりの女と早悟（はやさと）なぶつてやろと」

むらさきいざと（紫絲）「名」『紫色の絲。むらさきいざと（紫絲絨）の略。太平記「紫絲の鎧」

むらさきいざと（紫絲）「名」『紫色の絲。むらさきいざと（紫絲絨）の略。太平記「紫絲の鎧」

むらさきいざと（紫絲）「名」『紫色の絲。むらさきいざと（紫絲絨）の略。太平記「紫絲の鎧」

むらさきいざと（紫絲）「名」『紫色の絲。むらさきいざと（紫絲絨）の略。太平記「紫絲の鎧」

むらさきいざと（紫絲）「名」『紫色の絲。むらさきいざと（紫絲絨）の略。太平記「紫絲の鎧」

むらさきいざと（紫絲）「名」『紫色の絲。むらさきいざと（紫絲絨）の略。太平記「紫絲の鎧」

むらさきいざと（紫絲）「名」『紫色の絲。むらさきいざと（紫絲絨）の略。太平記「紫絲の鎧」

て、緑色又は紫色を呈し、棘は強大にして、亦、紫色を呈す。淡水の混入なき清澄なる海水の岩礁の間に棲息し、六七月の交産卵す。我國愛知宮城福井などの地に多し。

むらさきうまごや（紫馬肥）「名」『紫馬肥。豆（マメ）科に属する多年生の草。高さ一二尺に達し、葉は互生し、複葉にして、三小葉より成る。青紫色の蝶形花、總狀花序に排列し、螺旋狀に巻ける莢果を結ぶ。牧草として栽培す。きもくしゆく」

むらさきえのころぐさ（紫狗尾草）「名」『植』禾本科に属する、多年生の草。えのころ草に似たれども、小形にして、穂に紫褐色の芒あり。多くは、原野の乾燥せる砂礫の間などに自生す。

むらさきおも（紫萬年生）「名」『植』鴨跖草（ツクシ）科に属する草。葉の裏面は紫色にして、花は白く、雄蕊に長き白毛あり。米國よりの舶來に係る。

むらさきおり（紫織）「名」『松の生葉（マツ）の纖維を材料として織りたる緞通。

むらさきかう（紫格子）「名」『紫地に格子のかたを染め出せる模様。増鶴、春宮（マツ）の女房、うへ、紫がうし、柳など、さまざまに、目もあやなり。』「栗毛」に同じ。

むらさきかた（紫栗毛）「名」『栗毛（マ）に同じ。酸漿草科に属する多年生の草。地上莖を缺き、地下に球莖ありて、多くの鱗狀物を著け、葉叢の中より、長き四五寸に至る花莖出て、淡紫色の花、繖形花序に排列して開く。ききやうかたばみ。

むらさきかた（紫栗毛）「名」『栗毛（マ）に同じ。酸漿草科に属する多年生の草。地上莖を缺き、地下に球莖ありて、多くの鱗狀物を著け、葉叢の中より、長き四五寸に至る花莖出て、淡紫色の花、繖形花序に排列して開く。ききやうかたばみ。

むらさきかた（紫栗毛）「名」『栗毛（マ）に同じ。酸漿草科に属する多年生の草。地上莖を缺き、地下に球莖ありて、多くの鱗狀物を著け、葉叢の中より、長き四五寸に至る花莖出て、淡紫色の花、繖形花序に排列して開く。ききやうかたばみ。

むらさきかた（紫栗毛）「名」『栗毛（マ）に同じ。酸漿草科に属する多年生の草。地上莖を缺き、地下に球莖ありて、多くの鱗狀物を著け、葉叢の中より、長き四五寸に至る花莖出て、淡紫色の花、繖形花序に排列して開く。ききやうかたばみ。

むらさきかた（紫栗毛）「名」『栗毛（マ）に同じ。酸漿草科に属する多年生の草。地上莖を缺き、地下に球莖ありて、多くの鱗狀物を著け、葉叢の中より、長き四五寸に至る花莖出て、淡紫色の花、繖形花序に排列して開く。ききやうかたばみ。

むらさきかた（紫栗毛）「名」『栗毛（マ）に同じ。酸漿草科に属する多年生の草。地上莖を缺き、地下に球莖ありて、多くの鱗狀物を著け、葉叢の中より、長き四五寸に至る花莖出て、淡紫色の花、繖形花序に排列して開く。ききやうかたばみ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさききき（紫擬寶珠）「名」『植』ぎょうし（擬寶珠）に同じ。

むらさき

むらさき

むらさき

むらさき

むらさき(つ) 紫薔躑躅 [名]「植」もちつ(つ) (餅躑躅)に同じ。

むらさき(つ)めくさ 紫詰草、紫垣草 [名]「植」あかつめくさ(赤詰草)に同じ。

むらさき(つ)ゆくさ 紫露草 [名]「植」鴨跖草(つ)科に属する多年生の草。高さ三、三尺。葉は、狭長にして、長さ一、二寸餘、先端尖り、青紫色の花、繖形花序をなして開く。原産地は北亞米利加。觀賞用に供し、雄蕊に生ずる毛は、植物學の實驗上、原形質の運動等を見る資料に供す。

むらさき(つ)つり花 [名]「植」衛矛(つ)科に属する落葉灌木。高さ一丈に達す。葉は對生し、橢圓形にして、鋸齒を具へ、五、六、暗紫色の小花、聚繖花序をなして開く。山地に自生す。

むらさき(つ)紫菜 紫菜 [名]「植」油菜の一變種。莖も葉も紫色を呈す。近江國日野の名産。あふみな。

むらさき(つ)かな 紫苦菜 [名]「植」菊科に属する多年生の草。高さ四五尺、葉は多少の缺刻ありて形、一様ならず、全體に軟質にして、莖にも、葉にも、白汁を含む。花は、紫色にして、白色の冠毛ある舌狀花、通常十箇つ頭狀花序をなせるもの、多數、分岐せる枝上に開く。山地に自生す。やまにがな。あきののげし(秋野薔栗)に同じ。

むらさき(つ)ほひ 紫句 [名]「製」の色目又は鍔の緋の一。紫色にて、上方を濃く、下方を次第に薄くしたるもの。製の色目の内、女房の装束なる場合には、下に紅の單(へ)を著用する習とす。

むらさき(つ)ね 紫根 [名]「植」むらさき(紫)に同じ。

むらさき(つ)の 紫野 [名]「地」山城國愛宕(つ)郡大宮村大徳寺邊の舊稱。大野郷に屬し、今の紫竹大門(つ)に當る。和歌の名所。

むらさき(つ)の 紫の [枕] 紫は美しき色なるより、にほ(句)ふ)にかけていふ。萬葉紫のほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我戀ひめやも」 紫は濃きを貴

ぶ意にて、こにもかけていふ。萬葉紫の粉満(つ)の海にかけく島珠かき出せばわが珠にせむ」 紫は貴き色とせしより、なだか(名高)にかけていふ。萬葉紫の名高の浦の眞砂路(つ)に袖のみ觸りて寝ずかなりなむ。

むらさき(つ)のいろがひ 紫色貝 [名]「植」むらさき(紫貝)に同じ。

むらさき(つ)のうすやう 紫薄様 [名]「製」の色目の一。紫貝と同様に、全體に、色の濃きの、それよりも薄きにて、女房の五衣(つ)なる場合には、下の二枚と單(へ)とに、白色を著用する習とす。

むらさき(つ)のかひ 紫貝 [名]「動」むらさき(紫貝)に同じ。夫、紫の貝寄る浦のふちかたは浪の掛くるぞ花と見えける」

むらさき(つ)のつばめ 紫燕 [名]「動」うま(馬)の異稱といふ。

むらさき(つ)のほひ 紫句 [名]「むらさき(紫句)に同じ。紫句珍しき袖口を、おもひおもひに押し出たり。紫の句、山吹あをにび」

むらさき(つ)のひととど 紫一本 [名]「書」古今集の「紫」の一本ゆゑに武藏野の草はみなあらはれとぞ見るの歌に本づきて、名づけたるもの。江戸の地理を記せるもの。二卷。戸田茂睡の著と傳へたれど、天和三年の奥書に、櫻田に住みし光融入道病中の筆と記せり。

むらさき(つ)のゆかり 紫のゆかり [名]「書」紫の一本に倣ひて、江戸幕府内の事を、國文にて記せるもの。一卷。山岡凌明の著。

むらさき(つ)のり 紫海苔、紫苔、紫菜 [名]「植」あざさ(り) (淺草海苔)に同じ。和名「紫菜」。一名、石薺、無良佐木乃里。俗用、紫苔。

むらさき(つ)は 紫派 [名] 尾崎紅葉一派の俳句。其角の風と檀林風とを交ふ。

むらさき(つ)ばうし 紫帽子 [名]「やう」ばうし野郎帽子に同じ。謡曲、紫帽子の野郎どもが見えるから、大かた宮川町といふ見當(つ)だ」 ばうし(野郎)に同じ。

むらさき(つ)はこ 紫紫葉 [名]「植」みみな(こ) (耳草)に同じ。

むらさき(つ)はるる 紫走る [動] 四自、むらさき(紫はるる)に同じ。

むらさき(つ)はな 紫花 [名]「植」つるむらさき(蔓紫)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

初は紫色のを著用せしより、中古歌の女人赤染衛門の名をもちりて言ひしめし語「ちよよくせい(女學生)の異稱。えひちやしき」海老茶式部参照。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

むらさき(つ)はむ 紫はむ [動] 四自、紫をむらさき(紫はむ)に同じ。

にうかけて走り入りぬ」

むらすずめ 村雀群雀「名」群がりてあ

る雀。夫々色色に門田の稻穂吹きみだ

る風に驚く村雀かな」

むらすまふ 村相撲「名」田舎にて、若者

たちの集まりて興行する相撲。

むらすり 村摺斑摺「名」所所に、一む

ら一むらと摺染のしたるもの。

むらせかうてい 村瀬柳亭「名」(人)儒

者。京都の人。名は之熙。字は君頼。通

稱は嘉右衛門。専ら古學を唱へ、博學宏

聞。詩文、書畫を善くす。佐竹侯に仕へて、

國政に與かる。文政元年歿す。年七十。

むらすり 村摺斑摺「名」摺繪(二)の

斑(一)に、濃淡あるやうにせるものな

るべし。装束さまざまの衣(二)どもに、

青色に、柳がさねの唐衣(三)に、裳(四)の有

様、例の村すりよりも、心ことなり」

むらた村田「名」江戸浅草藏前(二)にあ

りし烟管(一)屋。この店の製造に係る烟

管は、村田張(三)の名を博して、一時流

行せり。江戸名物詩選、店自繁昌品自鮮、

風流仕込在村田、近來新製文人張、吸出

詩歌幾首烟」

むらた村高「名」一村の總石高。「江

むらた村竹藪竹「名」むらがり生え

てある竹。藪竹、わが宿のいささ村竹吹

く風の音のかせきこの夕かも」

むらた村田銃「名」村田經芳の

創案に成りたる後裝銃。軍用、獵用の二

種ありて、我國陸軍にては、明治十三年よ

り同三十年まで使用せり」

むらた村田多勢「名」(人)歌人。春

海(二)の女。父の業を繼ぐ。

むらだち 村立業立群立「名」むらだ

つこと又むらだちであること。千鶴立

田山松のむら立なかりせばいづくか残る

錦ならまし」

むらだち「名」(植)次條の略。

むらだちのき「名」(植)あちやん(油ち

やん)に同じ。

むらだち 村田鶴群田鶴「名」群がれる

鶴。たづむら。萬代。葦間より友呼びつれ

むらすす

むらだち 群立つ「動四自」(人)又は木

など、或地に群がりて立つ。「村立つ。叢

立つ」太記所所に村立ちたる御方(一)の

勢(二)。(三)有勢人は多くありけれども、

この人人の氣色を見て、こやかしこに

群立って、寄する者こそ無かりけれ」

鳥など、群がりて立ち去る。萬葉、むら鳥

のむら立ちいねば」

むらたばり 村田張「名」村田にて製作

する烟管。むらた(村田)参照。

むらたはるかど 村田春門「名」(人)國

學者。又、俳人。浪華の人。初、一柳並樹

といひ、郁子園(二)の多豆能舍(三)等の號

あり。俳號を燕庵、鷹守といふ。本居宜長

に學び、古學、詠歌等を教授す。天保七年

歿す。新編俳諧文集の著あり。

むらたはるさど 村田春郷「名」(人)歌

人。春道の長子。字は君頼。顯義堂と號

す。幼より加茂眞淵に學び、和歌を巧み

にし、又、經史に精し。家を弟春海(二)に

譲り、自ら閑處に就きて、和漢の學を研究

す。明和五年歿す。年三十。

むらたはるみ 村田春海「名」(人)國學

者。春道の次子、春郷(二)の弟。字は士

觀。通稱は平四郎。琴後(三)翁又、錦織

齊(二)と號す。加茂眞淵に従ひて、古學

を學び、和歌を善くす。又、服部仲英、鶴

飼士學、皆川洪園等に從ひて儒を學ぶ。詩

文和歌を善くし、又、筆札に長ず。漢文の

結構を國文に應用し、紀貫之以後の能文

家と稱せらる。文化八年歿す。年六十六。

著書多し。

むらたはるみち 村田春道「名」(人)國

學者。江戸の人。姓は平、通稱は右兵衛。

尚古堂と號す。世世家商たり。加茂眞

淵の江戸に來るや、子弟をして、就きて學

ばしむ。最も和歌を善くす。明和六年

歿す。

むらたまの 射干玉の「枕」ぬばたまの(射

干玉)に同じ。「東國の古の方言」萬葉

むら玉の(二)に針刺し固めとし妹が心

は危むく無(一)めかも」

むらだち 村田了阿「名」(書)雜學

者。江戸の人。名は直溫、通稱は小左衛

門。一校堂・春枝堂、如春・台麗等の號あ

り。淺草黒船町に住み、烟管屋を業とし

和漢の書及び佛典に通じ、俳諧・狂歌・書

畫等を巧みにす。天保十四年歿す。年七

十二。但言集覽等、考證抄録する所頗る

多し。

むらちどり 村千鳥、叢千鳥、群千鳥「名」

■むらがりてある千鳥。新古今風さゆる

としまが磯の村千鳥たちあは浪の心なり

けり」■「植」いばちどり(若千鳥)に同じ。

■「植」きまん(黃鶯)に同じ。

むらちる 村散る、斑散る「動四自」一定

の方向なく、所所に散る。まばらに散る。

患寒風吹けば空にむら散る雲よりも浮

きて戀する人はまさきり」

むらづかさ 村司「名」一村をつかさど

る人。むらぎみ。むらをさ。「古語」紀

「郡公、ムラツカサ」

むらづつき 村續「名」一つの村より他

の村へと續きであること。俳諧新選還戀

「桃咲くや山を背負ひし村づつき」

むらづつめ 村燕群燕「名」むらがり飛

べる燕。芭蕉、盆に泥な落しそむら燕」

むらづつめ 村蝶群蝶「名」むらがり飛べ

る蝶を描きたる模様。太平記地白(二)の

直垂(一)に、金箔にて、村蝶を押して」

むらづつめ 賢「名」(賢)に同じ。「古語」

和名、賢、无良度」

むらど 村戸「名」あみど(編戸)に同じと

いふ。又、多くの妻戸なりともいふ。萬

曲田村「田村堂の軒漏るや月のむら戸を

おしあけて、内に入らせたまひけり」

むらとも 群友「名」集まり群がりてあ

る友。「古語」夫々夏狩のしげみを分け

て狩り來れば隠れもあへぬ鹿の群友」

むらどり 村鳥群鳥「名」群がりてある

鳥。空鶴、浪にきほかれて、村鳥の立つを

榮正今はとて飛びかぬる村鳥の古集

にひとりがむべきかな」

むらどりの 村鳥の群鳥の「枕」むら鳥

は、朝、時を離れ、群がりて飛びゆくより、

あまたちいぬ(朝立ち去ぬ)むらだちいぬ(群立

ち去ぬ)むらむら群れ去ぬ、いつたつ(出て

立つ)たつ(立つ)にかけていふ。記、むら

鳥の吾がむれ去(一)なば」萬葉、若草のあ

ゆひたづくりむら鳥の朝立ち去(二)なば」

同、むら鳥のむら立ちいねば」同、むら鳥

のいてちがてに」

むらなからど 村仲人「名」田舎にて、婿

姻の媒めをする人。柳鶯、ちとべい、芋は

あるがと村なからど」

むらなむち 村梨子地、斑梨子地「名」

部分によりて、疎密の差ある梨子地。玉村

梨子地。

むらなへ 村苗、叢苗、群苗「名」群がり

生えてある苗。萬葉、上毛野(二)佐野田

(一)の苗のむら苗に事は定めつ今はいか

に爲(三)も」

むらにえ 村鈍、斑鈍、叢鈍「名」斑文狀

をなせる刃文(二)。むらに現れたる鈍。

むらにんそく 村人足「名」公用のため

に、村より出づる人夫。

むらぬき がん 斑脱靴「名」ながだいがん

な(長臺靴)に同じ。

むらね 群寝「名」群がりて寝ぬること。

草履集「から寝おろす小船を近み水鳥

のむら寝驚く曉の聲」

むらはき 村萩、叢萩、群萩「名」むらが

り生えてある萩。

むらはちぶ 村はちぶ「名」一村の住民

申し合はせ、村内の強慾非道なる者など

に對して、交際を絶つこと。

むらにはむ 村食む、斑食む「動四他」全體

の内、所所を食む。期太「よそ目にもむ

らはは駒のけしきに、春野の草の程ぞ知

らるる」

むらばらひ 村拂「名」江戸時代の刑罰

の一。居村より放逐せしこと。この刑罰

に處せられし者の田島、家屋敷などは、利

欲より起りたるか、又は貸納未進の場合

などの外は、沒收せられざる例なりき。

むらびと 村人「名」その村に住める人。

村民。郷人。邑人。

むらふう 村風「名」村の風習。

むらな

むらな

むらな

むらな

むらな

むらな

むらな

むらな

むらな

むらな

むらな

むらな

むらな

むらな

むらな

むらまつ

むらまつ 村松義松・群松(名)「むらだちである松 赤松衛門集住の江の岸の村松陰遠み波寄するかと人は見きやは」むらまつ 村松(名)「地」明治の初年設置の縣の一。にひた(新潟)参照。

むらまつ 村松高直(名)「人」赤穂四十七士の一人。秀直の子。通稱は三大夫。大石良雄等と同時に、死を賜はる。年二十七。

むらまつ 村松秀直(名)「人」赤穂四十七士の一人。通稱は喜兵衛。浅野長矩に仕へて、中小姓たり。大石良雄等と同時に、死を賜はる。年六十二。一説には六十四。

むらみ 邑美(名)「地」因幡國の舊郡の一。明治二十九年、岩井法美(?)の二郡と合して、岩美(?)郡となる。

むらむら 村村斑斑義叢(貌)「所」にむらがりであるさま。源氏秋の前栽(?)をば、むらむらほのかにませたり」義叢記「十餘人の人人、むらむらと内に入りて」「俄かに逆上するさま」。

むらむら 村村し。斑斑し。義叢し「形」色濃き部分と、薄き部分とあり。斑なり。馬内侍集「つき草のうつし心やいかならんむらむらしくもなりぬべきかな」。「心、前後、一様ならず。心動き易し。源氏故殿(?)の、なさけ、少しおくれ、むらむらしき過ぎたまへりける御本性」。

むらむら 村村鳥(名)「むらむらと飛ぶ鳥。徽聖、むらむら鳥の羽打つが如く、駆け来る大勢」。

むらむら 鳥などの、群がりて飛び立つさま。「一谷徽聖むれある千鳥村千鳥、むらむらはと引く沙に」。

むらめかす 群めかす。族めかす「動四自」むらがるやうにす。群を爲す。平家「一人當千の兵(?)ども、……、族めかいて推し寄せ」義經軍寄手の兵(?)ども、むらめかして引退く」。

むらもち 村持(名)「一村の人人の共有。地方凡例録「山内不殘村持にて」」。

むらもみ

むらもみち 村紅葉(名)濃淡相まじれる紅葉。村紅葉むらもみち會津(?)商人なつかしき」。

むらや 村屋(名)村を治むる役所。後世の村役場の類。「奈良朝時代の語」。

むらやくに 村役人(名)江戸時代に、村方の自治を行ひし公吏。即ち大庄屋(?)。名主・組頭などの總稱。むらかたさんやく(村方三役)参照。「場」に同じ。

むらやくば 村役場(名)そんやくば(村役場)より。山縣(名)集まりてある山。とんざん。萬葉大和には村山あれど。よりふんの香具山(?)」。

むらやま 村山(名)「地」羽前國の舊郡の一。初、仁和二年、田羽國最上(?)郡を割きて置きし郡名にして、明治十三年、東村山西村山・南村山・北村山の四郡となれり。但し、古代の村山郡は、却つて、今日の最上郡より、北村山・西村山の兩郡の東部に互れる地なりしもの如く、古の最上郡は、ほぼ後世の村山郡の地に當りきといふ。「武藏國西多摩・北多摩・入間(?)」の三郡に互れる舊稱。武藏の七黨の一なる村山黨の本據とせし地。一説には、村山黨の據りし地は、西多摩郡箱根崎・殿ヶ谷(?)・石畑の諸村に互れる地なりと。

むらやま 村山(名)「地」武藏の七黨の一なる村山黨の本據とせし地。一説には、村山黨の據りし地は、西多摩郡箱根崎・殿ヶ谷(?)・石畑の諸村に互れる地なりと。

むらやま 村山(名)「地」武藏の七黨の一なる村山黨の本據とせし地。一説には、村山黨の據りし地は、西多摩郡箱根崎・殿ヶ谷(?)・石畑の諸村に互れる地なりと。

むらやま 村山(名)「地」武藏の七黨の一なる村山黨の本據とせし地。一説には、村山黨の據りし地は、西多摩郡箱根崎・殿ヶ谷(?)・石畑の諸村に互れる地なりと。

むらやま 村山(名)「地」武藏の七黨の一なる村山黨の本據とせし地。一説には、村山黨の據りし地は、西多摩郡箱根崎・殿ヶ谷(?)・石畑の諸村に互れる地なりと。

むらやま 村山(名)「地」武藏の七黨の一なる村山黨の本據とせし地。一説には、村山黨の據りし地は、西多摩郡箱根崎・殿ヶ谷(?)・石畑の諸村に互れる地なりと。

むらやま 村山(名)「地」武藏の七黨の一なる村山黨の本據とせし地。一説には、村山黨の據りし地は、西多摩郡箱根崎・殿ヶ谷(?)・石畑の諸村に互れる地なりと。

むらやま 村山(名)「地」武藏の七黨の一なる村山黨の本據とせし地。一説には、村山黨の據りし地は、西多摩郡箱根崎・殿ヶ谷(?)・石畑の諸村に互れる地なりと。

むらやま 村山(名)「地」武藏の七黨の一なる村山黨の本據とせし地。一説には、村山黨の據りし地は、西多摩郡箱根崎・殿ヶ谷(?)・石畑の諸村に互れる地なりと。

むらやま 村山(名)「地」武藏の七黨の一なる村山黨の本據とせし地。一説には、村山黨の據りし地は、西多摩郡箱根崎・殿ヶ谷(?)・石畑の諸村に互れる地なりと。

むらやま 村山(名)「地」武藏の七黨の一なる村山黨の本據とせし地。一説には、村山黨の據りし地は、西多摩郡箱根崎・殿ヶ谷(?)・石畑の諸村に互れる地なりと。

むらさか

むらさか 村早稻(句)古、天上にありきといふ村早稻。むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか

むらさか 村早稻(句)古、天上にありきといふ村早稻。むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むらさか 村岡(名)「地」但馬國美方(?)郡の町。郡役所・警察署・區裁判所等あり。この邊牛を産すること多し、但馬牛の稱あり。山名氏の舊藩地。明治の初年設置の縣の一。四年七月、但馬國舊村岡藩の地に立てしもの。同年十一月、豊岡縣に入り、九年、兵庫縣に入る。

むりどり 無理取【名】強ひて取ること。

むりなんだい 無理難題【名】無理押(ひ)のいひがかり。井筒義平河内通無理難題を言ひかけ。

むりに 無理に【副】無理。強ひて。

むりはうていぎ 無理方程式【名】「数」【英】Irrational equation)未知数が無理数なる方程式。

むりばき 無理穿【名】小くて、足に合はぬを、無理に穿くこと。若烏無理ばきの革足袋ふくろぶるを、用捨なく、足早に「むりはかち 無理發行【名】「經」せくわじゆんびはつか(正貨準備發行)に同じ。

むりむたい 無理無體【名】相手を輕んじて、無理押(ひ)に仕向くこと。鳩翁通話「私が、壺を持てをりませう。無理無體に手をお引きなされ」【無體】に同じ。

むりむり 無理無理【名】むりむたい(無理むりむり)【貌】めりめりに同じ。浮世風馬乾魚(え)なら、首(く)から骨まで、むりむりと咬み碎いて見しよ。

むりんまっち 無燐燐寸【名】燐を用ひず、次亜硫酸鉛・琉青化鉛又はピクリン酸鉛にて製したるマッチ。

むりやう 六絛綴【名】「六絛綴」の文字は、八絛綴といふものありて、それよりも、絛の數少きよりいふとぞ。昔、支那より舶來せし、一種の繻子(え)。經(こ)絛粗にして、光澤や劣れるもの。綾尻(お)に「漢府八絛」の四字を繻(え)へり。和漢三才圖會「六絛綴……俗云無里也字」審の門簾被(え)く布圖の綴子より、むりやうの事ぞ思はる。【無絛】に同じ。海通記「無絛の命はる」。

むりやう 無量【名】數量の測り知られていふ語。諸曲(江島)「無量億の樂(え)」。

むりやう おく 無量億【名】「佛」むりやう おく 無量億劫【名】「佛」むりやう おく 無量義【名】「佛」無量の義理。

むりやうぎやう 無量義經【名】「書」【梵】Amala-sutra)法華經の譯の順序とも種すべき經。德行品、說法品、功德品、の三品あり。一卷。蕭齊の曇摩伽陀耶舍(え)の漢譯。かいつにきやう(開結二經)参照。

むりやうくわう 無量光【名】「佛」十二光の一。光明無量にして、その光益三世に互りて、限なしといふもの。

むりやうくわう 無量光寺【名】相摸國高座(え)郡麻溝(え)村大字當麻(え)にある時宗の寺。弘長年間、一遍上人の開基といふ。第四世春海、藤澤に遊行(え)寺を建ててより、兩寺の間に確執生ぜしが、近世、宗内の一派、この寺を別に本山と定むるに至れり。俗稱、當麻(え)寺。

むりやうくわう 無量光天【名】「佛」【梵】Aparanabha)の譯語「三界諸天の中、色界(え)の第二禪天にある天。

むりやうくわう 無量光佛【名】「佛」【無量光の德を具へたりといふ】あまたの(阿彌陀如來)の異稱。

むりやうくわう 無量光明土【名】「佛」【むらむらやうと(極樂淨土)の異稱。

むりやうくわう 無量光院【名】京都の郊外、北山の西園寺邸内にありし寺。増鏡、無量光院の花のもとにて【陸中國平泉(え)】にありし寺。天正中熾失し、今は礎石の存するのみ。東鑑、平泉無量光院、號三新御堂。秀衡立之、其堂内四壁屏風、繪經觀大意、加之、秀衡自圖二繪狩獵之體、佛者阿彌陀、丈六也、三重寶塔、院內莊嚴、悉以所撰宇治平平等院也。

むりやうくわう 無量劫【名】「佛」【むらむらやうと(廣劫)に同じ。舊圖、無量劫の内に、三界に化生(え)して】。

むりやうくわう 無量歲【名】測り知られぬ年數。正統記、壽命も極めて久しく、無量歲なりき。

むりやうくわう 無量清淨土【名】「佛」【むらむらやうと(極樂淨土)に同じ。

むりやうくわう 無量淨天【名】「佛」【梵】Aparanabha)の譯語「三界諸天の中、色界(え)の第三禪天にある天。

むりやうくわう 無量壽【名】「佛」壽命の無限なること。

むりやうくわう 無量壽經【名】「書」【梵】Sukhavadyutha-sutra)の譯語「だいむりやうくわう(大無量壽經)に同じ。

むりやうくわう 無量壽佛【名】「佛」【條に同じ。

むりやうくわう 無量壽院【名】「佛」【梵】【天の内院四十九院の一。【法成(え)】寺の阿彌陀堂の名稱。大鸞、無量壽院、いとめてたく、極樂淨土の、この世に現れるよと見えたり。

むりやうくわう 無量品【名】「書」法華經二十八品中の一。猿山婦女處品、讀みさの無量品。

むりやうくわう 無理遣に【副】無理とは知りながら、強ひて。平假名發音、厭(え)がる法師を、無理遣に連れへる。

むりやうくわう 無理往生【名】むりやうくわう(無理往生)に同じ。

むりやうくわう 無理往生【名】むりやうくわう(無理往生)に同じ。

むりやうくわう 無理往生【名】むりやうくわう(無理往生)に同じ。

むりやうくわう 無理往生【名】むりやうくわう(無理往生)に同じ。

むりやうくわう 無理往生【名】むりやうくわう(無理往生)に同じ。

むりやうくわう 無理往生【名】むりやうくわう(無理往生)に同じ。

むりやうくわう 無理往生【名】むりやうくわう(無理往生)に同じ。

むりやうくわう 無理往生【名】むりやうくわう(無理往生)に同じ。

むれ群【名】むらがり(群)に同じ。【くみ。ななま。ともがら。

むれ家【名】ムレツカ(家)に同じ。【古語】字錄集、ムレツカ(家)に同じ。【古語】字

むれ牟禮【名】「地」讀岐國木田(え)郡にある村。高松市と志度(え)町の街道に當り、西は屋島に接し、北に五劍山崎つ。元暦年間の古戰場。【周防國佐波(え)郡にある村。中國街道に沿ひ、富海(え)村の西に接す。建久年間、東大寺の勅造に際し、木材の伐採を掌るため、後樂坊重源の駐紮せし地。むろつ。

むれ 無料【名】料金を支拂はずして可なること。(有料に對して)

むれういひん 無料郵便物【名】無料にて差し出し得る郵便物。郵便、郵便爲替郵便貯金・電信・電話の事務上の郵便物、及び、議員候補者又は推薦届出者、勅令の定むる所により、その選舉區内に在る選舉人に對し、選舉運動のためにする、同文の通常郵便物(選舉人一人につき一通は、これに屬す。舊稱、負稅郵便。

むれういひん 無料宿泊所【名】宿料を支拂はずして、宿泊し得る所。

むれからす 群鳥【名】むらがり(村鳥)に同じ。【鳥多勢を頼むむれ鳥】。

むれすめ 群雀【名】「種」雀(こ)科に屬する落葉灌木。莖は高さ三四尺にして、長き針あり。葉は互生して、四小片より成る、偶數羽狀複葉をなし、葉腋より細き花梗生じ、帶赤黃色の蝶形花、一箇づつを著く。原産地は支那。觀賞用として栽培す。

むれたつ 群立つ【動四自】むらがりて立ち去る。源氏、あるかきりむれ立ちて。

むれちどり 群千鳥【名】むらざり(村千鳥)に同じ。

むれむかふ 群向ふ【動四自】群がりて行き向ふ。【古語】夫々、岩垣の水城(え)の關に群れ向ふかの心も知らぬもろ人。

むれらか 群らか【貌】群がりてあるさま。【古語】宇治物語は、むれらかに得たるこそよけれ。こまごまに得んとのたまふ、わろき事なり。

むれらか 群らか【貌】群がりてあるさま。【古語】宇治物語は、むれらかに得たるこそよけれ。こまごまに得んとのたまふ、わろき事なり。

むれらか 群らか【貌】群がりてあるさま。【古語】宇治物語は、むれらかに得たるこそよけれ。こまごまに得んとのたまふ、わろき事なり。

むれらか 群らか【貌】群がりてあるさま。【古語】宇治物語は、むれらかに得たるこそよけれ。こまごまに得んとのたまふ、わろき事なり。

むらむら

むらむら

むらむら

むれ

むれる

むれる 蒸れる【動下一自】熱氣こもる。飯など蒸されて、よく熱す。

むれおる 群居る【動上一自】群がりにてする。源兵分れてし人人は、諸所にむれおるつづ。群がりて、その場に在り。

むろ室【名】上古、家の奥に、土を塗りこめて作り、寝所などに充てし所。むろや。和名室無呂。上古、山の側面などを横に掘りて岩屋の如く構へたる所。記「寶、ムロ」同。室、ムロ。住み籠る所。主に、僧房をいふ。源氏「かしこき行人（むろ）……老い肩まりて、室の外（むろ）にまかんでず」大判宿徳（むろ）にてましましける大徳（むろ）の早う死にけるが、室に松の木が枯れたるを見て。四外氣、寒氣、溫氣などに觸れしめぬため、物を藏めて密閉しおくやう、特別の構造を備へたる所。植木室（むろ）漆室（むろ）麴室（むろ）水室（むろ）などあり。室、慈姑（むろ）生ふの野澤の荒田打ち返し急ぐ代（むろ）は室の種（むろ）も。田（むろ）むろあぢ（室）の略。心中庚申むろの酢炒（むろ）。田（むろ）むろ（室津）に同じ。萬葉室の浦の迫門（むろ）の崎なる鳴鳥（むろ）の磯越す浪に落（むろ）れにけるかも。

室の八島【名】（古）八島は、室（むろ）なりといふ。昔、除夜に、室の灰をさらへて、翌年の吉凶を占ひきといふわざ。【古語】散々さひする室の八島のこととひに身の成果てん程を知るかな。

むろ樟杜松【名】（植）松杉（むろ）科に屬する常緑喬木。高さ數丈に達し、葉は針狀をなし、鋭く尖り、夏、葉間に、小花、雄異株に開く。果實は肉質、球形にして、麥門冬のに似たり。材は水濕に堪へ、建築器具の用に供す。山野に自生し、又栽培す。ねずみさし。としよう。

むろ標【名】（植）きりぎり（標柳）に同じ。和名標、一名河柳、無呂。

むろ無漏【名】（佛）梵「Anārya」の譯語。漏は貪（むろ）痴の煩惱（むろ）を、日夜に六根の門より漏洩する義、即ち煩惱の別名。煩惱無きこと。煩惱を離れたる

むろ

こと。（有漏）に對して。

むろ牟婁【名】（地）紀伊國の舊郡の一。今、東牟婁西牟婁南牟婁北牟婁の四郡に分る。上古の熊野の國の地に於て、俗に西牟婁郡を口熊野、東牟婁郡を奥熊野といふ。萬葉紀の國の牟婁の江の邊に

牟婁の溫湯【名】（古）紀伊國西牟婁郡にある溫泉。同郡には、湯崎（むろ）湯峯（むろ）など、溫泉の湧出多く、殊に湯崎は今瀬戸山（むろ）の地に於て、齋明天皇行幸の址、今も存す。紀三年九月、有間皇子、往牟婁溫湯。

むろ牟呂【名】（地）三河國溫湯（むろ）郡にありし村。明治三十年、吉田村と合して、牟呂吉田村といふ。徳川廣忠の幼時、岡崎に住居するに先だちて居りし所。

むろあぢ室餘【名】（動）硬鱗類に屬する魚。體は狹長にして肥え、長さ五六寸。鱗は圓滑にして細かく、頭部と脊鰭の左右との外は、大抵これを缺く。背部は蒼色、腹部は銀白色、側面の中央に、黃色な一條の線あり。我國太平洋に多くして、深海に棲み、五六百頃産卵す。乾魚として殊に賞味す。むろ。

むろがやの【名】（枕）つるにかけていふ。むろがやは草の名にて、蔓あるよりいふかとも、又、むろがやも、都留も地名にて、後者は前者の一部なるよりいふこと、さざ波の志賀などの類かともいふ。萬葉むろがやの都留の堤の成りぬかにふるは言へども未だ疑なくに。

むろさうさう室鳩巢【名】（人）儒者。名は直清、字は師禮、又、汝玉、通稱は新助。江戸の人。木下順庵及び羽黒成實に學び、一意朱學を奉じ、名教を維持するを以て、自ら任とす。加賀侯に召されて、元祿中移住し、新井白石の推挙によりて、幕府の儒官となり、神田駿河臺に宅地を賜はりしより、世に駿臺（むろ）先生と稱す。享保十九年歿す。年七十七。著書多し。論行義大意駿臺雜話等、著書多し。

むろきみ室君【名】（室）國の遊女。諸國（室君）室君たちを船に乗せ、はやし物をして、神前に參る御神事（むろ）の候。【諸

むろ

曲の一。室の明神の神事を記せるもの。むろく無祿【名】（祿）の無きこと。ふしあはせ。不幸。【祿】の無きこと。知行（むろ）の無きこと。

むろくぬき無六識【名】（六識）を具へてあらぬ人の義、むろ無恥に同じ。

むろきき室【名】草木の、室の中に於て温められて、花咲くこと、又その花。

むろたう無漏道【名】（佛）無漏の因道。四諦（むろ）六度等の觀行これなり。（有漏道（むろ）に對して）

むろち牟婁津【名】（佛）紀伊國牟婁郡の通むろち牟婁津【名】（佛）煩惱（むろ）を離れたる境界。（有漏地（むろ）に對して）

むろ室津【名】（地）播磨國揖保郡にある村。室津港所在の地、瀬戸内海五泊の隨一にして、一名、室（むろ）。徳川時代には、四國九州及び中國の諸侯の江戸往來に際して、繫泊するを常とし、幕府、亦埠頭を姫路城主の管治に屬せしが、三方山を負ひ、陸路交通の便を缺くがために、明治維新後は、寂滅たる海村に過ぎざるに至れり。【見よ】

むろつのみな室津港【名】（地）前條むろつのみ室津【名】（東雅）にむろつみとは、周禮に、三十里有室津、路室有委、五十里有候館、候館有積とあり。驛路の旅館、たち。（古語）和名館、多知。一云、無路都美。

むろづみ室積室津水【名】（地）周防國熊毛（むろ）郡にある町。郡の南海岸に位し、岩國街道に當る。山口町を距ること十七里半弱。一に御手洗（むろ）といひ、往時は有名な港なり。平室、康熙は、流されし時、周防の室津水にて出家しけり。

むろとさき室戸岬【名】（地）土佐國安藝郡にある岬。同國南岸の西方端蛇（むろ）岬と、遙かに相對し、土佐大灣を限る。海岸は岩礁多く、波濤荒し。

むろなほき室直清【名】（人）むろさう（室鳩巢）に同じ。

むろのあきつしまのみや室秋津島宮【名】（名）孝安天皇のおはせし宮。大和國

むろ

南葛城郡秋津村大字室に在り。

むろのいはや牟婁窟【名】（地）紀伊國鬼ヶ城（むろ）の異稱。

むろのえ牟婁江【名】（地）紀伊國西牟婁郡田邊（むろ）の古稱。萬葉紀の國のむろの江の邊（むろ）に同じ。

むろのき檉木杜松【名】（植）むろ（檉）むろのき檉【名】（植）むろ（檉）に同じ。萬葉玉ははきかりと鎌麻呂室の樹と表がもととききかむたため。

むろのつ牟婁津【名】（地）紀伊國西牟婁郡田邊（むろ）の港の古稱。用明天皇入世（契機）（むろ）といふものにだまし賣られて室の津の室君といはれしを。

むろのうと室戸【名】（地）（室）は門（う）の義、次條に同じ。諸曲水無月（むろ）めぐみ普き室戸に立つ神垣も。

むろのさまり室泊【名】（地）むろつ（室津）に同じ。萬葉記高砂や尾上（むろ）の松も過ぎければ、室の泊に著きたまふ。

むろののみやうじん室明神【名】（神）播磨國揖保（むろ）郡室津村なる縣社加茂明神社（祭神は京都の上加茂神社のに同じ）の俗稱。諸曲室君（播州室の明神）

むろのやしま室八島【名】（地）下野國の歌枕。その址は下都賀（むろ）郡國府（むろ）村大字惣社。那須郡なる飯室・室井の邊、又都賀郡茂呂驛の附近など、種種の説あり。東路のつみあづま路の室の八島の秋の色はそれと分かぬ夕烟かな。

むろふ室生櫻生【名】（地）大和國宇陀郡の奥、三本松町（むろ）村、會爾（むろ）の間に、丘腹として一區劃をなせる盆地。この盆地を中心として榛原（むろ）町より伊勢への道は、二方に分れ、一は伊賀國名張（むろ）町に出て、一は岩坂越をして赴く。

むろふ室生寺【名】（名）大和國宇陀郡室生村の室生山中にある眞言宗の寺。僧修圓の創立、空海の重興といふ。俗に女人高野（むろ）と稱し、塵外の清境にして、もと龍穴（むろ）神社の供僧坊（むろ）たり。又、その大塔は、特別保護建築物たり。

むろふのさまり室生泊櫻生泊【名】

「地」むろつ(室津)を見よ。十訓備中國吉河保(吉)に下向して、上洛の間、標生の泊にて」

むろほぎ 室壽(名) 家屋新築の時親族知人を招きて、祝宴を開くこと。にひむろいはひ。〔古語〕 記室壽、ムロホギ

むろまち 室町(名) 山城國京都市の南北の通路の一。烏丸通(からすまのちやう)の西、兩替町を隔てたる所。〔にて製する笠。〕

むろまち 室町笠(名) 京都室町邊むろまちきりやく室町紀略(名)〔書〕

むろまち 室町紀略(名)〔書〕足利十三代の事蹟を、編年體に遍述したるもの。二卷。村山緯の著。

むろまち 室町時代(名) 室町幕府の時代。

むろまち 室町將軍(名) 室町幕府時代の將軍、即ち足利氏。足利將軍。

むろまち 室町千疊敷(名) 津國女夫池に同じ。〔享保六年、竹本座にて原作上演の時、第四段千疊敷の一部、高評を博せしより、作者の歿後寛保二年の上演に際して、この外題に改めたりといふ。〕

むろまち 室町殿(名) 足利第三代將軍義滿が、永和四年に、京都室町通り、今出川(けふ)の北に開きし幕府。東西凡そ三町、南面に四足(よもぢ)門を構へたり。以後、代代、ここに居り、七十餘年の後、文安六年、義政これを毀ちて、烏丸殿に移りしかど、結構、前例に倣ひ、距離も違からざるより、名稱は、すべて元のままなりき。

むろまち 室町殿日記(名) 〔書〕足利義滿の末より、義輝(よしかげ)及び豊臣秀吉時代までの事を記せるもの。二十卷四冊。橋本長教の著。義晴(よしかげ)の時、書記たちの筆録に係る日記の、永祿の亂後に残れるを纂輯増補せるものといふ。

むろまち 室町幕府(名) 足利將軍が室町に開きし幕府。〔ちろん。〕

むろや 室屋(名) むろ(室)に同じ。記「喚び入れて、その蛇(へび)の室(むろ)に寝しめたまひき」

むろや 室屋役(名) 江戸時代に、麴(こう)の一。室蘭支廳の所管。〔麴振國室蘭郡にある町。室蘭灣に臨める、東海岸第一の良港にして、開港場なり。〕

むろや 室蘭(名) 〔地〕 麴振國室蘭郡の良港にして、開港場なり。

むろ 務位(名) むろに同じ。

むろ 無位(名) 位階を有せぬこと。無官。(有位に對して) 正無記、無位の人なれど、勳功高く、一等にあがれば、正三位の下、從三位の上に列なるべし。

むろ 無爲(名) 〔ぶろ(無爲)に同じ。〕太平記、中夏無爲の世になりて、めづたりし事どもなり。〔佛〕梵名(ばつ)の譯語、本來常住にして、何物にも作爲せられぬこと、又そのもの。(有爲)に對して、〔曲曲〕身處(みぢやう)を免れ、今は、はや、妙覺無爲に至るべき妙法蓮華經の功德。

無爲に入る 〔句〕 〔佛〕人間界の迷執(しやく)を脱離す。出家す。〔有爲(ぶ)の奥山に參照。〕

無爲の化 〔句〕 〔佛〕の化に同じ。

むろ 無畏(名) 〔ぶろ(無畏)の化に同じ。〕

むろ 佛が大家の中に法を説くに、泰然として畏るる所なき徳。無所畏しむろ。

〔四無畏參照。〕太平記、八宗派分れて、末流、道異なりといへども、共に、これ、師子吼(しう)の、無畏の説に非ずといふ事無し。

むろ 無畏施(名) 〔佛〕ふせ(布施)を言ふ。

むろ 無爲法(名) 〔佛〕本來常住にして、作爲せられぬ法。虚空眞如の如きこれなり。〔有爲法(ぶ)に對して。〕

むろ 無韻、無韻(名) 漢詩にて、韻を踏まぬこと。

無韻の詩 〔句〕 〔無聲の詩に同じ。〕

ん

〔發音〕 五十音圖及び伊呂波歌以外の假名。鼻音を示す。これを呼ぶには、通例うんといひ、又、撥假名(はつ)ともいひ、又、その音を、撥音(はつ)ともいふ。五十音圖以外のものなるが故に、辭書に於ては、最後に置くを順當とすれども、古來、往往んとむの假名にて示すことありしため、本書にては、假に、むの次の前に掲げたり。〔我國にては、鼻音に、はひ、へ、ほ、び、ぶ、べ、ぼの子音即ちb・pを發すると同じ位置なるものと、たゞ、さ、だ、て、ごの子音即ちt・dを發すると同じ位置なる舌端によりて發するものと、かき、け、こ、がき、げ、ぐの子音即ちk・gを發すると同じ位置なる舌本によりて發するものとの三種あれども、何れも、舌面後方の中部を隆起せしめて、軟口蓋の中部に押し當て、聲帯の振動を帯びたる氣息を、口より出だせしめ、鼻より漏して發す。故に、有聲音なる點に於て、濁音、母音と同種類に屬す。〔唇にて發するものは、羅馬字mの音に相當し、唇音なるは行音は行音、ま行音の直前に續く鼻音にして、例へば、さんび(意)はん(半端)のん(人民)などのん(ん)の音、これなり。m音の説明につきては、まの條下を見よ。〕

〔舌本にて發するものは、羅馬字ngの音に相當し、か行音が行音、さ行音、ま行音、や行音、わ行音及び母音の直前に續き、又は語の終末に在る鼻音にして、例へば、たんか(擔架)さん(參議)ほん(奔走)あん(杏子)こん(今夜)だん(談話)はん(汗)きん(金)などのん(ん)の音、これなり。ng音の説明につきては、かの條下を見よ。〕

〔鼻音は、我國にては上代には絶無もしくは稀有なりしかと思はるるが、漢語の輸入に伴ひて、多く用ひらるに至れり。漢字の音尾なる鼻音にも、上記の三種の區別ありて、韻鏡の學者は、これに唇内、舌内、喉内の名を命じ、總稱して、三内といへり(喉内の喉は軟口蓋を指せるものと見るべし)。ん(ん)の假名は、比較の後世の發達に係るため、漢字渡來の當初に於て、喉内即ちngの音は、これを寫すに、假に發音の近似せる母音の假名うを以てし、又はか行半濁音に轉用し、唇内即ちmの音はま行に、舌内即ちnの音はな行に轉用せり。喉内の例には、孔子、孟子、孔、孟はkong, mangなるに、じやうとし、盟はmeng、寧はningなるに、めいといし、相はshang、絳はkongなるを、相模と書きてさがみと訓ませ、餘綾と書きてよろぎと訓ませたる類、唇内の例には、甘はkan、男はnanなるを、甘樂と書きてかむらと訓ませ、男信と書きてなまじと訓ませたる類、舌内の例には、難はnan、信はshin、讀はshinなるを、難波と書きてなにはと訓ませ、信濃と書きてさぬきと訓ませたる類あり。又、しやみせん(三味線)の味、の字の如きは、上の「三」の字の唇内の音尾を示す宛字に外ならず。然るに、唇内

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

と舌内とは、後世、相混じり、共にんを用ひて記すこととなりたるが、「文」「轉」は舌内の文字なるに、その字音より察するに、兩者の混雜は、古にもその例ありしもの如し。又、後世の實際の發音は、唇内の文字、舌内の文字の何れたるを問はず、その直後の音の種類に應じて、mとも、nともなりその各の場合には、前記四に記せるが如し。③舌内の文字の直後に行又はわ行の頭音を有する文字の續く時、そのあ行わ行の音がな行の音に轉呼せられ、や行の頭音を有する文字の續く時、そのや行の音がな行の拗音に轉呼せらるる場合あることは、なになにの各條下に説明せるが如く、又、唇内の文字の直後に、あ行又はわ行の頭音を有する文字の續く時、そのあ行わ行の音が、ま行の音に轉呼せられ、や行の頭音を有する文字の續く時、そのや行の音がま行の拗音に轉呼せらるる場合あることは、ままの條下に説明せるが如し。但し、この場合にも、「三」は唇内の文字なるにさん(三衣・さん(三會)を、共にサンネと轉呼するが如きは、唇内と舌内の混雜を示すものなり。④うまる(生る)・うま(馬)・うめ(梅)の如きは、實際の發音はンマル・ンマ・ンメなるに、古よりうの假名を用ひ來ると同時に、むらさめ(村雨)・むかし(昔)などをんらさめんかしと記せる類、古書に往往その例あり。

【感】感嘆詞うんに同じ。

【助動】助動詞の音便。

【助】の音便。 澤世風呂「御前(ごん所ん)の指も、派手者だの」

め



【發音】①ま行第四の音。子音mが母音に結び附き發する。その發音の方法、位置に就きては、ま及びえの條下に説けるが如し。②長音は、めえと書くことめと書くとの兩法あり。本書にては、前者に依れり。③一語の中に、直下めのに又はひの續く場合には、相合して、めの長音に發音すること多し。例へば、めいよ(名譽)めひ(延)をメヨ・メエと發音する類。④一語の中に、めの直後にうの續く場合には、相合して、拗長音ミヨオに發音する。例へば、めうが(若荷)かうめう巧妙をミヨオガオミヨオと發音する類。

【字源】平假名めは漢字「女(訓、メ)の草體、變體平假名は「免」(吳音メン)の草體、又は「馬」(吳音メイ)の草體、又は「米」(吳音メイ)の草體、又は「面」(吳音メン)の草體より出づ。片假名メは「女」の略體。萬葉假名として、前記「女」外、字音に據れるものに「迷」・「謎」・「毎」・「梅」・「妹」・「味」・「咩」・「賈」・「晚」・「綿」等、訓を取りたるものに「目」・「眼」・「海藻」等あり。

め女【名】①女性の。をみな。をんな。むすめ。婦女子。(男)に對して。 聖めえ草のめにしあれば。②配偶の女性。つま。さい。【妻】 杜「朱買呂がめを教へけん年」和名妻、米。

め

妻いとほしの子いとほし【句】妻子の愛情に溺れて、親兄弟を疎外する形容。【諺語】女の神【句】めがみ(女神)に同じ。【男】の神に對して。【古語】萬葉をの神もゆるしたまひ女の神もちひたまひて。【古語】女の髪長【句】めがみなが(女髪長)に同妻を設く【句】妻を迎ふ。 梅垣女集「目變りて、めまうけて、そこにのみつきて」

め牝雌【名】女性の動物。めす。めん。(牡)に對して。 杜「蛇(め)尾はたらかさん、めと知れ」 俳諧通應庵「雌も連れず難をも連れずほととぎす」

め目【名】①見る(見る)參照。動物の、物を見る作用を具する器。まなこ。【眼】めつ(目付)に同じ。 蘇「目が、口ほどに物を言ふ」目見ること。見る作用。 會根崎心中「目が繁ければ、さもならず」 俗曲(新名物)「猫や鰐(め)の目を忍び、どうぞ抱かれて鼠とは、及ばぬ戀の身」の類。④はい(胚)を見よ。【卵の目】目見張ること。めつけ。監視。 蘇「其其屋」この玉が、きつと目になって、おさん様の側を、一寸も離れぬやうにしたによつて」⑤縱横幾筋も交はりてある物の、間隙の處。記「かた淵に網張り渡しめるよしによし寄り來」⑥物の一部。縦ひ、折り、合はせ、刻みなどしたる箇所。 杜「雪は、……いと多きは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黒う眞白に見えたる」東海道名所記「目のつぶれたる指針」⑦物の一部。縦ひ、折れ、よれたる箇所。 杜「硯……瓦の目にしがひて入りたる」⑧雙六(ご)などの采(え)の面にしるしたる點。萬葉「二采の目のみにあらざ五つ六つ三つ四つさへあり雙六のさい」太本記「雙六(ご)を打たれけるが、賽の目を論じて」⑨秤の、寒暖計などに、度を計るために附けたるしるし。「目を盛る」⑩秤にて計る量。はかりめ。重量。「目が足らず」⑪めくめ(木目)に同じ。 出資ひたる時 ばあひ。古今

め

「憂き目のみ生ひて流るる浦なればかりにのみこそ螢は寄るらめ」 然「辛い目を見候ひつる」②めめゆ(目結)の略。目合はず【句】眠り得ず。 源氏「ことさらに寐入りたまへど、更に御目も合はて、曉がたになりけり」目荒し【句】大體を見る力あり。 丹波與作「美濃路までかくれぬない干城(め)の八藏、目のあらひ男知らぬかい」目移る【句】めうつり。 源氏「時につつ様を變へて、今めかしきに目移りて、をかしきもあり」目驚く【句】見て驚く。目を驚かす。 榮花「きぬの裾・袖口、いと目もおどろきて見ゆ」 蓬園「目も驚くばかり、雪降り積りけるに」目及ばず【句】「目も及ばず」に同じ。 源氏「かぐや姫の、この世の濁にも汚れず、遙かに思ひのぼれる契高く、神代の事なれば、淺はかなる女、目及ばぬならんかしといふ」目が明く【句】閉ぢるたる目開く。【目端の】がきく。目先が見ゆ。氣が附く。注意が属く。 澤世風呂「そこを、女房も得心して居ねえやあならねえ。目が明かずに惡」やかましうばかり云つて見ねえな。それこそ、なほ逆み」つて出懸けるはな」③文字を讀み得。讀書力。を具ふ。目が見ゆ。 杜「まづ讀めかしといふ。いかでか、片目もあきつかまつらばといへば」目が有る【句】注意して、要點を見のがきす。監視す。目輝く【句】まばゆく感ず。あまり立派にて、よく見えぬ程なり。 榮花「えもいはずめてたき袖口衣のつまどものうち出しわたしたる見るに、目ががやきて、何とも見わきたる」目が利く【句】見分ける力する。鑑識を具ふ。 續藤「其、その善光(ごう)といふ人は、飛んだ目の利いた人だはえ」目がくつきさう【句】「目が附きさう」に同じ。